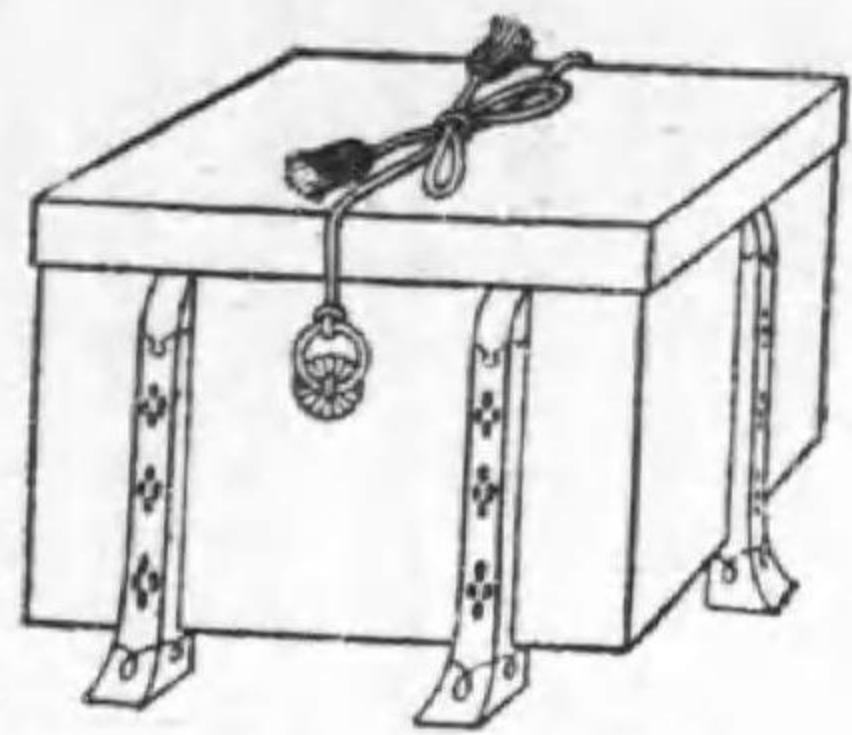
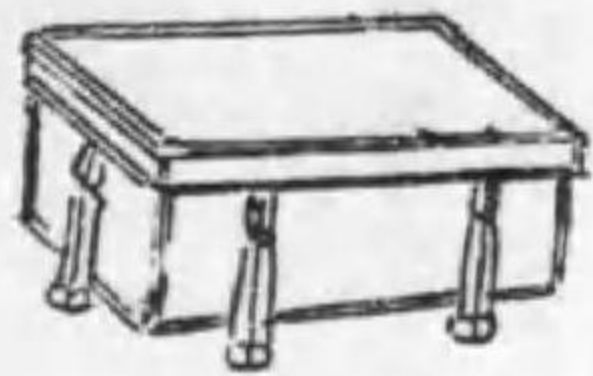


「この唐櫃は遠き昔から傳つてゐるもので、

唐櫃



唐櫃



いつ初めて作り置かれたかわからない。まあ

數百年たつたものである。かく代々相傳へて來た公の器物は、古くて破れ損じてゐるのもつて模範とする。だからたやすく改めなされるのはむづかしいといふことを故實の方面の役人達が申されたので、唐櫃を新しく改め作ることはやめになつた。

男のたのしき人——美男で富裕なる人の意、古注には誤つた解が多い。氣をつけねばならぬ。「たのしき」は「たのもしき」と同意で、富裕の意。快活などの意でない。○その事となく——何事と限つたことなく。何事でも萬事に。○過差——クワサ、クワシヤとよむ。過分のおごり。驕奢。奢侈。大鏡時平の所に、「延喜の世間の作法したためさせ給ひしかど、過差をえしづめさせ給はざりしに」とある。傳幽齋本、正徹本には、愚者となつてゐる。○御子——文段抄には一子となる。御子の方よからんと思はれる。○基俊卿——基具の二男。母は參議平惟忠の女。弘安六年二十三歳で參議、同八年檢非違使別當となり、翌年權中納言となつて別當は辭任。正應四年三十一歳で權中納言、翌年致仕。元應元年五十九歳にて薨去。○大理——檢非違使別當の唐名。弘安八年基俊が檢非違使別當となつた時には、父基具は准大臣で、樂學院の別當であつた。○廳務行はれるに——「廳務」は檢非違使廳の事務をいふ。「行はれるに」の主格は基俊卿と見るのが穩當である。この文は、「御子基俊卿大理になりて、廳務行はれるに、父の相國は、廳屋の唐櫃見ぐるしとて、めでたく作り改めらるべきよし仰せられける」となる。○廳屋——檢非違使廳の役所。○唐櫃——韓櫃とも書く。今の長持に似て小さく、脚が六本（前後に各二本、左右各一本）ついた櫃。廳の貴重なる書類など入れて置くもの。朱塗で新任の別當が、前任の別當より之を引繼ぐのが例である。○見ぐるし——古びてきたなくなつてゐたのである。息子の長官たる役所の唐櫃が古びてきたないから、作り變へようとするとところに、父の基具の過差を好み給ふ性格があらはれてゐる。○めでたく作り改めらるべし——「めでたく」は立派にといふこと。「改めらる」の「らる」は敬語の助動詞で、父が子に對していふのに敬語を使ふのはをかしいやうであるが、これは高貴な方の鄭重な言ひ方と見たがよい。第三者の兼好がこれを寫すのにかうした鄭重な言ひ方をしたといふのはよくない。その第三者が基具の行爲に對する敬語は、この下の「仰せられける」の「られ」がそれである。○上古——ずっと古い時代といふことで、歴史上いふ上古の意でない。○傳はりて——代々檢非違使廳の役所に傳はつて來て。○其の始を知らず——始めてこの唐櫃を置いたのは何時頃であつた分らない。○數百年を経たり——檢非違使廳が始めて京都に置かれたのは詳かでないが、弘仁七年頃にあつたのだから、この年から數へて、弘安八年までの年數を數へると、四百六十九年になる。故にここに數百年といふのは大體五百年位の年數をさしたものと想つてよい。○累代の公物——代々傳つてゐる公の器物。○古弊をもちて規模とす——「古弊」は、古くて破れ損じて居ること。「規模」は、手本とか模範といふこと。規矩模範の略語といふ。ここは古いものは値打があつて尊いといふ思想である。○たやすく改められがたきよし——「たやすく」は、容易に、簡単にの意。「られ」は敬語の助動詞と見るのがよい。さうやす／＼とお作りかへになることはむづかしいといふわけを。○故實の諸官——故實のことを擔當してゐる役人。使廳に勤めて居た役人の中でよく故實に通じた人々の意ともとれるが、斯くするのはこのままの文では少々無理である。○その事やみにけり——唐櫃を新しく作りかへることは止めになつた。「その事」は、唐櫃を改め作ることをさす。

第百段

口譯 久我相國が、或時清涼殿の殿上の間で水を召上らうとされたところが、主殿司が土器で水を差上げたので、相國は、「まがりて水をもつて来い」と仰せられて、まがりて水を召上りなされた。

久我相國は、殿上にて水をめしけるに、主殿司、土器を奉りければ、「まがりて水を召上らせよ」とて、まがりしてぞめしける。

語釋 ○久我相國——從一位六條顯房の長子、從一位太政大臣源雅實。號久我。保安三年太政大臣。大治元年七月七日出家、法名蓮覺、大治二年二月十五日六十九歳にて薨去。舞樂に妙を得て居られた才人。久我相國記の著がある。一説にこれは通光であらうといふのがある。尊卑分脈によると、通光の所に、「號後久我太政大臣」とあり、通光は、寶治二年正月十七日依病辭職、同十八日六十二歳にて薨去してゐる。故に雅實は崇徳帝の時代になるのであまり時代が遠くなるから、後醍醐帝の時代にあたる通光をさすものであらう。元來、徒然草にあらはれてゐる逸話は全體この頃のものだといつて通光とする新説があるが、確證がしつかりしない。参考のために系圖を掲げると、



となる。○殿上——テンジャウとよむ。清涼殿の殿上間（テンジャウノマ）のこと。○水をめし

けるに——「めす」は飲むの敬語。水をお飲みになつた時にの意。○主殿司——後宮十二司の一で、殿中の燈油、火燭、薪炭等の事を司る女官。職員には、尙殿一人、典殿二人、女嬬六人（後には十二人）がある。正しくは、トノモノヅカサとよむ。古くは殿司と書いた。この女官は殿上に出て、高官の世話をしたものである。今の場合は相國が水を飲みたいと言つたので、女官が出て來たのである。枕草子に、「主殿司こそ、なほをかきものはあれ。下女の際には、さばかり羨ましきものはなし。よき人にせさせまほしきわざなり。若くて貌よく、なりなど常によくあらむは、ましてよからむかし」とあるのは、この女官のことをさしてゐる。○土器——文段抄、大成本は「ドキ」とよみ、増補鐵槌本は「トキ」とよんでゐるが、正徹本には假名にて、「カハラケ」と書いてある。このカハラケとよむ方がよいと思はれる。古書は大抵カハラケとある。素焼の盃のこと。現在は神事だけしか使はないが、昔は廣く一般に用ゐられてゐた。隨つてこの際に女官がこれを持ち出したのは當然のことである。○まがり——飲器なる事には違ひないが諸説あつて一定しない。一説に木の曲物椀のやうなものといふ。又一説には柄杓ともいふ。恐らく柄杓のことであらうと思はれる。大成に、「山案、此所大全の説近きに似たり。其詞に云、此まがりとは杓の事也。杓をまがり」と云事は、女中女官の詞に此たぐひおほし、木をまげ用たる物なればおまがり」と云、相國も詞をかりそめにつかひの給ふなり。さて杓をまがり」と云證據は禁秘抄に見えたりと云々。禁秘抄の詞、首にしるす。（禁秘抄に、主上、御手水マイル所ニ、抑々御手水近代内々供之、昔ハ女官之所献ナリ。今ハ前後不定之間不用之。主水司供之。御手水女官昇之、各立御手水間前、女官申、御手水マイル候ハン、女房アトイフ。女房御楊枝ニツ双指御簾マ

ガリマイラセ候ハント云。女房アト云ナリ云々。今按ずるにまがりとは杓の字の和訓なり。常にはしやくと音ばかりにていふて和訓をば人がしらぬ故に、今さら別のものの様に思ふなり。たとへば扇の字をあふぎと和訓し、皿の字をさらといふ事などは人々の聞馴しゆへに不審せぬなり。此外常に音ばかりを用て、訓をしらぬ事ども多し。杓子をゆがみと云、碗をまりといひ、盆をほとぎといふ類也。其上地下に開なれぬ和訓ども堂上方にははおほし。されば練木をば地下にては、すり木の、すりこぎのといへども、是も堂上がたにては、ならしとの給ふなり。此類かぞへばいくらも有べし。このまがりも杓の和訓とさへ心得れば事すむ也。されども只今は堂上方にも杓をまがりとはいはざるにやおぼつかなし。此所に大事が有といふは、此まがりの事にてはなし。土器をさしのけてまがりして水をめしける事はいかなるゆへといふに大事があるなり」とあるのがよいと思はれる。○まみらせよ——持つて来い。呉れよといふこと。「せ」は敬語の助動詞。第三者の兼好がその事を寫したので、このやうに、「たてまつれよ」「さしあげよ」と丁寧な言ひ方をしたものである。○まがりしてぞめしける——まがりて水をお飲みになつた。「して」は、にて、を以ての意。土器をしりぞけて、まがりを召しなきたわけについて、大成に曰く、「此まがりをめしける義理いかんといふに諸抄まち／＼なり。先貞徳曰、惣別公家方の土器を用ひ給ふは、水火のけがれは水火になし。器にありといふよりはじまりて、昔より茶碗、天目のたぐひを用給ふ。しかるに今殿上の器なれば土器にあらざれども水火にけがれのなき道理を相國のあきらめて木器にて水をめしたるとも云々。又大全曰、此相國水火にけがれなし。器物にけがれ有るをしるしめし、あたら／＼しき杓にて水をめしけるとなり」とある。

第一百一段

或人、任大臣の節會の内辨をつとめられけるに、内記の持ちたる宣命をとらずして、堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへりとするべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位外記康綱、きぬかづきの女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

口譯 或人が任大臣の儀式の時の内辨の役を勤められたが、うつかりされて、内記の持つてゐた宣命を取らずに、紫宸殿の上へのぼつてしまはれた。これは非常な失態であつたが、立戻つてくるわけにも行かず、どうしたらよいかと思ひ悩んでゐられた時、六位の外記康綱が、衣かづきの女官をうまく語らつて、かの宣命を持たせ

第一百一段

語釋 ○任大臣の節會——大臣任命の儀式。任命と共に群臣に饌を賜ふのである。さて新大臣はその日の節會の上首を尊者と稱して招待し、その他外記に至るまで招待して饗應する。これを「大饗」(ダイキヤウ)といふ。「節會」(セチエ)。朝廷にて、節日に饌を群臣に賜ふをいふ。もとは節日の集會を云つたのが、此の日に朝廷から饌を賜はつたことから、饌なき日は節會と言はないやうになつた。なほ任大臣の詳しいことは江家次第卷二十、玉葉の文治二年十月廿九日條参照。○内辨——禁中で節會が行はれる日の奉行を内辨といふ。承明門(紫宸殿の正門)内に於て諸事を辨備する故に内辨といふ。同じく門外にありて手傳するのが外辨である。節會の時は内辨といふが、公事の時は上卿(シヤウケイ)と云ふのである。建武年中行事に、「元日節會、内辨大臣

て、こつそりと内辨に
差上げさせた。まこと
にうまくおやりになつ
た偉いことである。

陣の座につきて行ふ」などあるが、大臣ばかりでなく、大中納言がこれをつとめる。○内記——中務省に属する官人。宣命はまづ上卿が勅を奉じてその旨を内記をして起草せしめ、さうして出来ると、草稿、清書共に之を奏覽するのであるが、御覽になると又内記の方へお返しになる。内記はそれを持つて、杖座（陣の座、即ち公事の時、諸卿の着く所）に候する。それを又内辨が受取るのである。○宣命——センミヤウ。詔勅を漢字のみで、その音訓によりて純國語流に書き記したもので公事の時に讀む。神社、山陵への奉告、即位式、大嘗祭、任大臣などの儀式に用ゐられたものである。ここは任大臣の辭令。内辨（上卿）が勅を承つて内記に仰せつけて作らせ、節會の時、内記から階下で受取つて笏に持ち添へて堂上するのである。ここでは之を受取るのを忘れたのである。○とられずして——右にいふ通り、内辨たる大臣は、内記の持つて来た宣命を受取つて、堂上すべきであるのに、うつかりして受取らずにそのまま式場に臨まれたのである。○堂上せられにけり——式は紫宸殿で行はれるので、紫宸殿に昇られたといふのである。○きはまりなき失禮——この上もない失禮。「失禮」（シチライ）は、過失、粗忽、失態の意。○たちかへりとするべきにもあらず——普通の場合と違つて、重大な儀式の折柄であるから、忘れたといつて、もともどつて、又受取るといふわけには行かない。「たちかへり」は、もとの場所にもどつてといふこと。○思ひわづらはれける——内辨たる大臣が、どうしたものだらうかと、いろいろと心配したのである。「思ひわづらふ」は、思ひ悩む、心痛すること。○六位の外記康綱——外記は太政官の役人にして内記とは所屬を異にしてゐる。職原抄によると、「外記（大二人、相當正六位上、近代五位、少二人、相當正七位上、唐名外史）。太政官中有三局。左右辨官、（左

右大史掌其局」外記是也云々。外記恒例臨時公事除目叙位等事奉行之官也。尤爲重職。近代清中兩家任其職。於少外記者。彼兩家輩同門生等依器量任之。とある。官職秘鈔に、「大外記。往年多以文章生任之。近代以明經譜第者任之。」とある。これは文筆に關係のある事務を司るために學者の家である清原、中原兩家から採られたのである。「清中兩家」とあるのはそれである。さて「外記」とここにあるが、光廣本、傳幽齋本、嵯峨本、大成本、句解本には、「内記」となつてをり、参考本、文段抄本、元文本には「外記」となつてゐる。ここは外記とあるべきところである。次に康綱は中原家の出で、外記補任によると、正和五年閏十月に權少外記となり、文保元年三月少外記になり、建武元年に權大外記となり、延元四年六月十日に權大外記準人正で歿す。年五十歳。○衣かづきの女房——「きぬかづき」とは、女が外出の時、顔をかくすため頭からかぶつて着る服である。ここは「かづき」を着てゐた或女官といふこと。○かたらひて——説きつけて。事情を話して自分の仲間に引き入れること。わけを話してうまく取入れること。○しのびやかに奉らせけり——「しのびやかに」は、こつそりといふこと。こつそりと人に分らないやうにして内辨の手に渡させた。○いみじかりけり——えらい振舞であつた。まことに殊勝な事であつた。

第百二段

口傳 尹大納言光忠入

尹大納言光忠入道、追儼の上卿をつとめられけるに、洞院右大臣殿に次第

道が、追儼の儀式を行ふ奉行を勤められた時、洞院右大臣殿に式の次第を尋ねて教を願はれた所が、「それは又五郎といふ男を師として、指圖を受けなざる

より外によい方法はありますまい。」と仰せられた。かの又五郎は年取つた衛士で、よく公事のこと馴れてゐるものであつた。嘗て近衛殿が陣の座に着かれた時、膝突を忘れて外記をお呼びなされたところが、この時又五郎男は火をたいて居た

を申し請けられければ、「又五郎男を師とするより外の才覚候はじ」とぞのたまひける。かの又五郎は老いたる衛士のよく公事に馴れたる者にてぞ有りける。近衛殿着陣したまひける時、軾を忘れて外記を召されければ、火たきて候ひけるが、「先づひざつきを召さるべくや候らむ」と、しのびやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

語釋 ○尹大納言光忠入道——「尹」は彈正尹のこと。即ち彈正臺の長官をいふ。彈正臺といふ役所は、風俗を肅正し、内外の非違を糺彈することを掌る所である。光忠は内大臣源有房の二男。元應元年參議。正中元年に權中納言、同二年十一月辭任。元徳元年十月、前權中納言を以て彈正尹となり、翌年十一月權大納言。元弘元年正月正二位に陞り、同二年四月十八歳にて薨去。太平記に見える千種中將忠顯の父にあたる。大納言は本官で、尹は兼官である。職原抄に、「彈正尹尹親王。或大納言以上兼之」とある。○追儼の上卿——「追儼」(ツキナ)。鬼やらひとといふ。大舍人寮の舍人。鬼の役をつとめ、大舍人長は方相氏の役をつとめる。方相氏は四つ目のある恐ろしい顔の面をかぶり、玄衣、朱裳を著し、左の手に楯を持ち、右の手に戈を執り、鬼を拂ふ任にあたる。鬼は瀧口の戸を出て去るのである。第十九段參照。「上卿」は、シヤウケイとよむ。公事の奉行で、節會のときの内辨外辨にあたる。○洞院右大臣——壽命院抄本、大成本、句解本には、「左大臣」となつてゐる。文段抄、傳圖齋本、光廣本、正徹本、野槌本には、「右大臣」と

が、この近衛殿の有様を見て、「先づ膝突をお召しにならねばならぬのだらう」と、こつそりとつぶやいたのは、まことにをかしいことであつた。

なつてゐる。一説にこれは洞院左大臣藤原實泰公をさすものとしてゐる。すると第八十三段の洞院左大臣と同一の人になる。一説に、實泰の子の公賢といふ説が有力である。その論據は、光忠が中納言になつた正中元年以來、實泰が薨じた嘉暦二年八月十五日までの間には、三回しか追儼はあり得ないので、光忠が正中二年十二月十八日には職を辭してゐるから、正中元年の時の上卿となつたか、その後彈正尹になつてから上卿をつとめたか、二つの場合が考へられることになる。前者ならば實泰でもよいが、後者なれば實泰は生存してゐないから公賢でなければならぬといふのである。公賢は建武二年二月十六日に内大臣から右大臣になつてゐる。兼好がこの記事を書いたのが建武二、三年頃であるとする、この公賢こそ洞院右大臣と呼ばれてゐたのでないかと言はれてゐる。文保二年八月二十八歳にて權大納言となり、その後大納言を経て、元徳二年三月内大臣となつたのである。延文四年出家。翌年薨去。年七十。○次第を申し請けられければ——「次第」は追儼の式の順序をいふ。「申し請く」とは、尋ねて教を請ふこと。追儼の式次は江家次第十一に詳しく見えてゐる。○又五郎男——「又五郎」は名前で、「男」は、身分の低い男の名の下につけて、幾分親しみを以て呼ぶ名。稀には目下のものが、目上の男の名の下につけて呼ぶ場合もある。○師とするより外の才覚候はじ——又五郎男に教を受けるのが一番よい方法だらうとの意。「師とする」は、それを師として教を受けること。「才覚」は、工夫。方法。仕様。○衛士——衛門府(もとは衛士府といつた)に屬する小役人。庭燎(たはな)たくことなど司る。軍團の制のあつたときには、諸國から毎年交代で上京し、禁關守護の任にあつたが、衛士府も衛門府と改められるやうになると、衛士も交代上京の兵でないやうになつた。○よく公事に馴れたる者にて——

「公事」(クジ)は、朝廷で行はれる公務や行事。傳幽齋本や正徹本には、「公事によくなれたるものにて」とある。又正徹本には、「ぞ有りける」なし。○近衛殿——古注には何人か不明になつてゐるが、増鏡秋のみ山のところに、「近衛殿近頃は御惱みがちにてのみ臥し給へれど、今日の御悦にめづらしくいでみさせ給へり」とある。若しこの「近衛殿」と同一の人であるならば、經忠の父家平のことである。第六十六段の岡本關白殿参照。○着陣——陣の座につくこと。節會の時、官人の着坐する席に着かれること。第二十三段陣のところ参照。○軾——ヒザツキとよむ。膝突とも膝衝とも書く。公事の時など、地上にひざまづく際に、膝の下に敷く半疊大の薄縁(ウスベリ)のこと。今も神事るときに用ゐてゐる。○外記を召されれば——膝突を持つて來させるために外記を呼ばれたのである。○火たきて候ひけるが——夜分の儀式で、又五郎男が篝火をたいてゐたのが。○先づひざつきを召さるべくや候らむ——先づ膝突をお召しにならねばならぬのだらうの意。文段抄にも、「着陣にひざつきを忘れ給ひし時、又五郎は、はや其氣をつけをきし故、今何となく外記をめさるは、其用ならんとつぶやきける也。これよく公事になれたる故なるべし」とある解はよい。つまり又五郎男の公事をよく知つてゐるところを述べたものとすゝるのが穩當と思ふ。但し、全然反對の解としては塚本氏は「近衛殿が膝突を忘れた事は、又五郎にちやんと分つてゐる。従つて外記を召すのは膝突を取寄せる爲めとも分つてゐる。分つてゐるのを分つてゐる通り推測してつぶやくだけでは面白味が薄い。それを一寸皮肉つて、「何だ外記をお呼びになるよりまづ以て膝突をお呼びになつて然るべきだらう」と滑稽のやうに言つた所に、如何にも老衛士のおもかげが活躍してゐる」といふのであるが、ここはこのやうな皮肉を書いた

とすべきであらうか。そこに疑點がある。○忍びやかに——こつそりと。大きな聲でいつて人に聞えるやうでは失禮であるから、極小さな聲で言つたものである。勿論、聞いた人は相當あつたに違ひない。○つぶやきける——小聲で獨語を言つた。「ける」は、「ける事は」の意。○をかしかりけり——面白かつた。

第百三段

大覺寺殿にて、近習の人どもなぞくをつくりて解かれける處へ、くすし忠守参りたりけるに、侍従大納言公明卿、「我が朝の者とも見えぬ忠守かな」と、なぞく々にせられけるを、「唐瓶子」と解きて笑ひあはれければ、腹立ちて退出にけり。

口譯 後宇多院の御所である嵯峨の大覺寺殿で、側近の人だちが、謎々を作つて解いて居られたところへ、醫者の忠守が参られたので、侍従大納言公明卿が、「我が朝のものとも見えぬ忠守かな」といふことを、謎々になされたのを、或人が「唐

語釋 ○大覺寺殿——京都の西郊嵯峨村の中央、大澤池の西にあり。後宇多法皇の御所である。

後宇多法皇は愛してゐられた遊義門院が亡くなられてからは、多く嵯峨に居られたことは増鏡によく見えてゐる。増鏡うら千鳥の巻に、「院もそれゆゑ(遊義門院崩御のため)御ぐしおろして、ひたぶるに聖にぞならせ給ひぬる云々、御ぐしおろし給ひて後は、大方女房は仕うまつらず、男ぞおりて御臺などもまゐらせ、萬に仕うまつる云々」。同秋のみ山の巻の文保二年の所に、「法皇

瓶子」と解いて、その座にゐた人だちが笑ひ合ひなされたので、忠守は大に御立腹になつてその座から出てゆかれた。

(後宇多)都に出でさせ給ひて、世の中しるしめさる。龜山殿はさる事にて、近頃は、大覺寺殿のほとりに御堂建てて籠りおはしましつゝ、いよ／＼密教の深き心ばへをのみ勤め學ばせ給へば、おのづから京に出でさせ給ふことなく、又参り通ふ人も稀なるやうにて、神さびたりつるを、引きかへ事しげき世に行ひも懈怠し給へば、むつかしくおぼさる、同卷文保三年のところに、「大覺寺殿には、ひきかへ馬車の立ちこみたるを御覽じて、法皇よませたまひける、われ住めばさびしくもなし山里も朝まつりごとおこたらずして」又、秋のみ山の卷の正中元年四月のところに、「法皇は今は大覺寺殿にのみおはしませば云々」とあるのは、法皇が京の大覺寺殿にゐらせられたことを證するものである。但し從來の注釋書は、大成本の「ここは嵯峨の大覺寺をさすにはあらず。九重の内の院の御所とみるべし。たとへば後白河院の御隠居所を法住寺殿といひしに、内裏にての御所も法住寺殿といひし類也」といふのによつて、「但しここは禁中の御所」であるとの解があるが、あまり根據のないものと思はれる。○近習の人々——御側近く仕へて居る人たち。○なぞ／＼——今日「なぞ」といふもの。謎とも、何曾とも書く。「なんぞ」「なぞ」の意で、何ぞ／＼と問ひ掛けてその意を答へしめるより起つた語。つまり分りにくい問題を提出して、その解をなさしめるのである。これは古くからあつたもので、枕草子に、「なぞ／＼あはせしける所に」とあり、拾遺集雜の曾根好忠の歌に、「なぞ／＼物語しける所に、わが事はえもいはしるの結び松千年を經とも誰か解くべき」とある。○くすし忠守まゐりたりけるに——「くすし」は醫師のこと。阿智使主の子孫で、歸化人である。代々醫術を以て朝廷に仕へた。忠守より十世ばかり前の康頼の時に、姓丹波宿禰を賜つてから、丹波を稱することになつた。忠守は典藥頭長有の子。

丹波氏系圖に、「歌人、典藥頭、宮内卿、法名舜阿」とあり、姓氏錄には、「正四位下」とある。歌人として有名であつた。増鏡、秋のみ山の卷に、「元亨元年八月十五夜とよ、常より殊に月おもしろかりしに、うへ(後宇多)萩の戸に出でさせ給ひて、云々。例の唯うち／＼御歌合あるべしとて、侍從の中納言爲藤召されて、俄に題たてまつる。左、内のうへ、春宮大夫公賢云々、右に藤大納言爲世云々、忠守などいふくすしも、この道のすきものなりとて召し加へらる」とある。○侍從大納言公明卿——「侍從」とは、中務省の屬官。常に主上に近侍し、規諫を掌るもの。多くは他の官から兼任したもので、大中納言、參議の人が兼任する場合が多い。ここは公明卿が大納言を本官とし、侍從を兼官としたものである。さて「公明」は藤原實仲の子で、嘉暦元年(一九八六年)に侍從となつてゐる。然して後宇多院の崩御になつたのは元亨四年六月(一九八四年)である。故にこの公明がなぞ／＼をされたのは、公明がまた侍從にならないときである。ここに侍從大納言公明卿とあるのは、公明の最後の官名で書いたものとせねばならぬ。またこのなぞ、なぞは後宇多院が上皇にてゐられたときのことであつたとせねばならぬ。それは後宇多帝が上皇になられたのは、弘安十年で、このとき公明五歳のときにあたるからである。公明の傳記は、弘安九年從五位下、正應二年從五位上、同四年正五位下、永仁四年從四位下、同年若狭權守、同五年左少將、同七年從四位上、正安二年兼讚岐守、徳治三年藏人頭、正和五年修理大夫、元應元年三十九歳にて參議となつた。嘉暦元年正三位權中納言で侍從となり、翌二年從二位、元徳二年中納言正二位となり、正應元年十一月一旦侍從を止め、翌五年に又侍從となり、延元元年五月に權大納言となり、侍從、大藏卿、左京大夫、大判事に於て九月十一日年五十六にて薨去す。大成本によ

ると、建武三年五月十一日薨去となつてゐる。○我が朝のものとも見えぬ忠守かな——日本の國のものとは見えない忠守だなあといつて謎にされたのである。即ち今日の語でいふと、日本のものと見えぬ忠守とかけて何と解くといふところである。主として忠守は前述の如く歸化人の子孫であるところから斯くいつたものである。「なぞく」にせられけるを」は、傳幽齋本、正徹本には、「なぞく」にせられけり」とある。○唐瓶子——「瓶子」は、今日の酒を入れる徳利のことである。「唐瓶子」とは、貞丈雜記七に、「唐瓶子之事鎌倉年中行事云、正月朔御座に御二重御唐瓶子、同銚子提有之云々。唐瓶子とは金にてこしらへたる瓶子なり。又は木にて作り、黒ぬりにしたるもあり、かねはこしらへ唐めきたる故、唐瓶子と云ふなるべし。外には子細なし。」とある。借てこの謎を唐瓶子と解いたわけは、平家物語に、「忠盛又御前の召に舞はれけるに、人々拍子をかへて、伊勢瓶子はすがめなりけりとぞはやされける」といふ、平忠盛の事を時の朝臣たちが誇つた記事がある。是れは平氏のまだ勢力のなかつた頃伊勢に居たことから、伊勢平氏といふのと伊勢の國から産出する陶器の瓶子を伊勢瓶子といふのにつけ、その瓶子は素瓶（すきやまのかめ）。「一説には酢を入れる瓶だといふ」と、忠盛の妙（すま）ををかけて嘲つたのである。さてここでは、その忠盛を忠守にし、忠守の先祖は歸化人であつたところから、「伊勢瓶子」の代りに、「唐瓶子」といつたのである。○と解きて——これはその座の或一人が謎を解答したのである。○笑ひあはれければ——その席に居た人たちが皆笑つたから。○腹立ちて——四段に活用して「腹立ちて」となつてゐるが、自動詞でなくて、他動詞である。古い時は四段にのみ活用してゐる。今ならば、「腹を立てて」となるところである。宇治拾遺物語あたり（鎌倉時代の初めから）より、他動詞にけり」とある。

になるときは下二段に活用するやうになつた。○退出にけり——出てゆかれた。増補鐵槌本には、「退出に」を、「マカンデに」とよみ、文段抄や大成本等には、「マカンデに」「シリソキに」と二通りのよみをつけてゐる。正徹本には、「マカリいでにけり」とあり。傳幽齋本には、「まかり出にけり」とある。

第百四段

口譯 荒れ果てた、誰も見る人もない住居に、女が物忌か何かの事情で、世間を遠慮し人目を避けることのある頃で、淋しく閉ぢ籠つてゐたのを、或人が訪問なさうといふので、夕方月の出る頃、薄黒い時に、そつと尋ねなされたところ、犬

荒れたる宿の目なきに、女のはばかり事あるころにて、つれづれと籠りたるを、或人とぶらひ給はむとて、夕月夜の覺束なきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のことくしくとがむれば、げす女の出でて、「何處よりぞ」といふに、やがて案内せさせて入り給ひぬ。心ぼそげなるありさま、いかで過すらむと、いと心ぐるし。あやしき板敷にしばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの若やかなるして、「こなた」といふ人あれば、たてあけ所せげなる遣戸よりぞ入り給ひぬる。

語釋 ○人目なきに——見る人もなく、尋ね来る人もない所に。これは世間から離れた淋しい處

がわん／＼と仰山に吠え立てたので、召使の女が出て来て、「どちらからお出で下されましたか」といふ、その女にそのまますぐ取次ぎをさせて、或人はその女の家の中にお入りになつた。家のさまを見るといかにも心淋しきうなる有様で、どうしてまあ暮してゐる事かと、まことに氣毒な思ひがされる。粗末な板張の縁側に暫く立つてゐられると、物馴れて、しとやかな若々しい様子で、「どうかこちらへ

で、そのあたりを通る人もなく、訪ねて来る人も殆どないのをいふ。「なきに」は、「なき處に」といふことである。○はばかる事——世間に遠慮し憚ること。物忌か何かで忌み憚つてもつてゐたのである。壽命院抄に、「物いみなど也」とある。これによると、畏れ憚むことで、心身を清淨にし、行ひを慎むをいふ。そのために世を避けてこのやうな淋しいところに住んでゐたのかもわからぬ。正徹本には、「女のはばかるころにて」とある。○つれ／＼と籠りたる——爲すこともなく物淋しく、家の中に閉ぢこもつて暮らして居ること。「籠りたる」は文段抄の文によつたのであるが、傳幽齋本や、正徹本や、光廣本などには「籠りゐたる」と「ゐ」の字が入つてゐる。このある方がよいと思ふ。文段抄などは脱したものであらう。○とぶらひ——訪問すること。訪ねること。○夕月夜——夕方に月の出る頃をいふ。舊曆の十五日以前で、日の暮方に月の出る頃である。但しここは夕暮頃をさすのでなく、やや夜に入つてからの頃をさすものと思はれる。○覺束なきほど——「覺束なき」は、夕月は満月のやうに光が強くないから、月があつても薄くて物の形などもはつきりとしなことをいふ。「ほど」は時間を示すので、時分のこと。古今集羈旅に、「月づく夜おぼつかなきを玉くしげふたみの浦はあけてこそ見ぬ」とある。○忍びて——「しのびて」とは、人目をはばかつて、こつそりとの意。○こと／＼しく——大層らしく。仰々しくひどく。犬は何か怪しいものでも来たものと思つて、けたたましく吠えたたのである。○とがむれば——この語はもと、怪しみ問ふことで、ここでは犬が何か怪しいものが来たと思つて、吠え立てたのである。その聲を聞いて、何事かと召使の女が出て来たのである。○げす女——賤しい女のこと、即ち召使の女をさす。今の女中にあたる。○何處よりぞといふに——どちらからお

お入り下さい」といふ侍女なる女があるので、遣戸のあけたでもすらりとゆかぬ、ガタガタした古い遣戸をあけて家の中にお入りになつた。

越しになられましか、どなた様でゐらつしやいますかと尋ねる召使の意。○やがて案内せさせて——すぐその女に取次ぎをさせて。「やがて」は、すぐそのままのこと。「入り給ひぬ」は門内にお入りになつたのである。○心ぼそげなるありさま——これは一寸門内に入つたときの感じである。折から薄暗いときではあり、世ばなれした淋しい處に、人も少なくて住んでゐるさまが、いかにも心細く淋しさうなさまだといふのである。○いかで過すらむ——こんな淋しいところに、どうしてその日／＼を暮してゐるのだらう。「過す」は、毎日々々を暮すことをいふ。○いと心ぐるし——誠に氣毒に思はれる。見る或人の方で、女の事を氣毒に思ふこと。○あやしき板敷——粗末な板の間。「あやしき」は、粗末な、みすばらしいこと。「板敷」は、板の間であるが、板張の縁側をさしたものである。伊勢物語に、「あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて」とある。ここはまだ女の家の内部に入つてしまはず、ちよつと入口の所まで来て、板敷の所に立つて居たといふのである。○しばし立ち給へるを——一寸暫くの間立ち止つてゐられるのを。○もてしづめたるけはひ——しとやかな様子。これは前のげす女でなく、内から出て来た侍女のいかにも落着いた、上品にしとやかなるさまをいつたもの。物ごしに「こなたへ」といふ侍女の、聲つきから、振舞をあらはした語である。○若やかなるして——若々しい様子で。如何にも若々しい様子の聲でといふことになる。「なるして」は、「なるけはひして」の意。この「けはひ」は、音聲、言葉つき、動作などを概括していつてゐる。「して」は、にてとか、以つてといふこと。○こなたといふ人あれば——どうぞこちらへお入り下さいといふ人があるので。この「人」は勿論侍女をさしてゐる。○たてあけ所せげなる遣戸——戸の閉て開けがうまく行かず、ガタ／＼とす

る遣戸のこと。これはこの家がもう既に古くなつて、家の柱や敷居などの破損して、戸のあけたてがスラリとゆかぬさまをいつたもので、「所せし」は入口狭く窮屈なるさまをいつたものでない。遣戸（ヤリド）は今の戸障子などの如く左右にあげたてする戸。

内のさまはいたくすさまじからず。心にくく、火はあなたにほのかなれど、物のきらなど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。「門かどよくさしてよ。雨もぞ降る。御車みくるまは門の下したに、御供おんともの人はそこ〜に」といへば、「今宵こよひぞやすきいはぬべかめる」と打ちささめくも、忍びたれど、程なければ、ほのぎこゆ。

語釋 ○内のさま——部屋の内部の有様をさす。○いたくすさまじからず——屋外の荒涼たる有様であるのに對して、部屋の内部の有様はあんまりひどく荒れてもゐないこと。「すさまじ」は、荒廢して興趣のないこと。荒れずさんでゐないこと。○心にくく——心ゆかしく。奥ゆかしく。「火はあなたにほのかなれど」の語にかかる副詞である。「すさまじからず心にくく」の意にする人もあるが、それはよくない。○火はあなたにほのかなれど——燈火を側近くに置かず、部屋の向ふの方にずうつと離れて置いてあつて、明りは薄暗くぼうつとしてゐるがといふのである。あまりま近く明るくともされてゐるよりは、この遠くにほんのりとしてゐる方が情趣があるのである。

口譯 さて家の内部の様子はどうであるかといふと、これは屋外から見た程ではなく、あまりひどく荒れてはゐない。いかにも奥ゆかしく、燈火は向ふの方にあつて薄暗いが、衣服、調度、部屋の飾りの美しさなども見えて、客があるからといつて俄に慌ててたいとも思はれず、普段からたしなみとしてたい

ある。○物のきらなど見えて——「物」とは特にこれとさしてゐるのでなくして、其處に置いてある調度類を廣くさしてゐる。「きら」は「きらめく」のきらであるが、きら／＼と輝いてゐるといふのでなくして、その部屋にあるあらゆる調度の色つやをさしてゐる。灯によりて衣服調度類のほんのりに見える色つやをさしていつたものである。第九十一段の「よるづの物のきら」参照。○俄にしもあらぬにほひ——客があるといふので今急に焼いたのでない香のかほりをいふ。即ち常々ふだんからたいあつた香のかほりをいふ。第三十二段の「わざとならぬにほひしめやかにうちかをりて」とあるのと同じおもむきである。○いとなつかしう住みなしたり——「なつかし」は、奥ゆかしく親しみの感じあるさま。然してこの「いとなつかしう」は、上の「俄にしもあらぬにほひ」にの句を受けてゐるのでなくして、「にほひ」の下に「がして」などいふ語が略されてゐるので、「いとなつかしう」は、別に部屋の中にある、調度、衣服、燈火などすべて部屋の中の有様を概括して、それらのものがいかにもゆかしく親しみのある感じを興させるやうな住居の有様であるといふのである。○門よくさしてよ——門をよくしめて下さいよの意。これはその家の女房が、下部の女どもに言ひつけてゐる語。○雨もぞ降る——「ぞ」は、疑問の助詞「や」とやや同じに使つたもので、「雨もや降らん」の意。雨が降るかも知れませんかといふこと。「も」は強意の助詞で、「も」と「ぞ」とが結合すると「……であるかも知れない」「……であらう」といふことになる。金葉集、春に、「春雨にぬれてたづねむ山ざくら雲のかへしのあらしもぞ吹く」新古今集、戀の「玉の緒よたえなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする」などは同じ用法である。文段抄に、「雨もや降らむといふ事ながら、慥に降る事と見る時

のだから、こわいこともなくゆつくりと寝られさうである」と、小さな聲でささやいてゐるのも、この家は狭い家であるから主客のゐるところにかすかに聞えてくる。

にいふてには、也」とある。○御車は門の下に——「車」は、この文の初めにあつた或人[○]で即ち客人の乗つてきた牛車である。雨が降つて来るであらう、雨が降つて、牛車がぬれるとよくないから、門の屋根の下に引き入れておきなさいと、やはり女房が下部のものにいひつけるのである。○御供の人はそこ／＼に——「そこ／＼に」は、「どこそこに」といふこと。御供の方は、どこそこへ御通しして休んで戴きませうと、やはり侍女どものいひつける語である。これは實際の場合であるならば、そこそこにと具體的にいふべきところを、簡単に略式に記述したのである。○今宵ぞやすきはぬべかめる——何時もゆつくりした安眠は出来なかつたが、今晚はしつかりした男の方もぬらつしやるので、ゆつくりと安眠が出来さうだといふのである。「やすきい」は、「安き眠」で安眠のことをいふ。「い」は眠るといふことの名詞。「ぬ」は奈行下二段活用の動詞で、ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。と活用する。この語は今日の口語の「ねる」(眠る)といふ動詞に相當する。「いぬ」といふ下二段の動詞は、この「い」と「ぬ」とが重なつて出来た語で、時によると、その兩語の中間に助詞が入つて、「いこそねられぬ」「いもねず」などいふ。かく兩語の間に助詞が入るのは、下に打消の語が来る場合に起るのである。只今の本段は、「は」が中間に入つた場合である。「ぬべかめる」は、「ぬべかめる」の略で、「寝べくあるめる」で、眠ることが出来さうだといふことである。さてこの言葉は誰の言つた言葉であるかといふことについて二説ある。まづ塚本哲三氏の徒然草解釋二八九頁に、「御供の人々はそこ／＼にといへば、といふ原文の趣から見ても、これは御供の人の言葉と見るのが自然であらう。即ち殿様はそちちとおあるきになる、お泊りになつても暗い中にお立ちになる、仲々吾々は安眠もならぬ——そ

れが平安朝の一般の風で、下文の夜ぶかく急ぐべき所のさまにもあらねば少したゆみ給へるにといふのとよく呼應する——然るに今夜は斯うした都離れた所だから、殿様も御ゆるりなされよう、今夜こそ吾々も熟睡が出来さうだといふのである」と解かれてある。これはなか／＼考へられたよい解ではあるが、然し當時の公卿などが女のあたりを泊り歩いたことは、さほど忙しくあつたらしいものであつたとは思はれない。又、正徹本や延徳本などでは、「いへば」の語が、「いへ」となつてゐるやうな點から考察しても、ここは、女房の侍女達の語とする方がやはり穩當と考へられる。文段抄には、「壽抄云、野同、こよひは心やすく寝べきなりと内衆のささめくなり。季吟云、日比はあれて人めなき所なれば、寢がたかりしに、こよひは此人のとまり給ひてこころやすきをよるこべるなるべし」といつてゐる古來の説がよい。○うちささめく——小さな語でささやき私語するのをいふ。がや／＼とささめく意ではない。○忍びたれど——外部に聞えないやうにこつそりと言つては居るが。○程なければほのぎこゆ——「程」はこの女の家の廣さを言つたものである。即ち狭い家であるから、主客の居る部屋の方にうす／＼ぼんやりと聞えてくるといふのである。

さて此のほどの事ども、こまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鳥も鳴きぬ。こしかたゆくすゑかけて、まめやかなる御物語に、此の度は鳥もはなやかなる聲にうちしきれば、明けはなるるにやと聞き給へど、夜深く急ぐべき所

口譯 さて女に暫く逢はずにゐた間のことを、いろ／＼とこまごま話してゐられるうち

に、夜はだん／＼と更けて行つて、一番鶏も鳴いた。今迄のこと、これから行く末々の事に渡つて、眞面目になつてしみりとして話してゐる間に、今度は鶏も勢よくはれやかな聲で頻りに鳴き立てるので、それをお聞きになると、もうすつかり夜が明けるのかと思ひなされはするが、然し今日は何も暗いうちから急いで歸らねばならぬ、人目多い都でもなく、人少い片田舎のことであるから、少し

のさまにもあらねば、少したゆみ給へるに、ひましろくなれば、忘れがたき事などいひて立出で給ふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけぼの、艶えんにをかしかりしをおぼし出でて、桂かつらの木の大きなるがかくるるまで、今も見送り給ふとぞ。

語釋 ○此のほどの事ども——暫く別れてゐた間の事をいふ／＼と。○こまやかに聞え給ふ——こま／＼と詳しく男が女に話したる。「こまやかに」は「濃やかに」の意ではないと思はれる。○夜ぶかき鳥——まだ夜が容易に明けなく鶏のこと。即ち一番鶏のこと。「鳥」とあるのは、「鶏」をさしてゐる。○こしかたゆくすゑかけて——過去のことから、未來の事にまで及んでの意。「こしかた」は、來し方かたの意で、過去から今日に至るまでの間をさし、「ゆくすゑ」は、今日からずつと未來にわたつてのこと。「かけて」は、その兩方にわたつての意。○まめやかな御物語に——輕卒な話でなく、しみりとした、眞面目な話をなさつてゐられるうちに。○此の度は——前の「夜ぶかき鳥」に對して今度はといつたので、二番鶏の鳴いたことをいひ出すのである。○鳥もはなやかなる聲に——鶏も二番鶏（明けがた近き鶏の聲）の鳴聲は元氣で、はつきりとした聲で頻りに鳴くから。○うちしきれば——頻りに鳴くので。○明けはなるにやと聞き給へど——主客の男が、二番鶏の鳴き聲を聞いて、さては夜もすつかり明けてしまつたのかと聞きなされるが。○夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば——ここは片田舎の人目もない所である

ゆつくりと落着いておいでなさるうちに、部屋の間が明るくなつて來たので、今夜のやうな嬉しい思ひをした事はない。この樂しかつたことは何時までも忘れ難い事だなどいつて、そこを立ち出でなされると、向ふの樹木の枝も、庭の草木も珍らしく一面に青々として、目ざめるやうな初夏四月頃の夜明けのおもむきは、如何にも美しくおもむきのあつた情景であつた。それで牛車にお乗りになつ

ので、まだ夜が明け離れない中に、急いで出なければならぬやうな場所でもないの意。若し都の中であつたならば、夜の明けないうちに歸らぬと人目が多くて困るのである。○少したゆみ給へるに——心が少々ゆるんで、ゆつくりとして居られるが。女とのわかれをつらく思つて、ぐづぐづして居られるのである。○ひましろくなれば——戸の隙間などが明るくなつてきたから。○忘れがたき事などいひて——今晚のやうな嬉しい思ひをしたことがない。今夜の樂しかつたことはいつまでも忘れぬなど男がいつたのである。斯うした場合に、男が斯くの如き語をいふは、女を喜ばせる常套語である。○梢も庭も——この家の附近や庭の大きな樹木の梢や庭の草どもも。○めづらしく青みわたりたる——「めづらしく」は、愛づらしくで、美しい初夏の新緑のさまをいふ。「青みわたりたる」は、新緑の頃の明方の美しさをいつたもので、ずつとあたり一面に新緑で青く見えるのである。○卯月ばかりのあけぼの——陰曆四月頃の夜明けがたの。○艶えんにをかしかりしを——美しくおもむきのあつたことを。○おぼし出でて——思ひ出されて。車に乗つてしまひなされてからも、或人が思ひ出しなされてといふのである。そしてその思ひ出される感情の中には、朝の女の家の情景ばかりでなく、昨夜から、今朝に及んだ艶なることどもも含まれてゐる。○桂の木——これはこの女の家の附近にあつた大きな木である。桂はカツラ科の落葉喬木、樹皮は灰色を帯ぶ。葉は圓形または廣卵形で、先端鈍形、基部心臟形をなし對生す。托葉は披針形、早落性である。雌雄異株。早春、葉に先だち紅色の單性花を開く、材は建築材、家具材として使用される。楓をメカヅラといふに對し、桂はヲカヅラといふ。ここは源氏物語花散里の「門近なる所なれば、少しさし出でて見入れ給へば、大きな桂の木の追風に祭の頃おぼし出でられて、

てからも、その面白い
光景、さうした一夜の
面白かつた情調を思ひ
出しあそばされて、そ
この桂の大きな木がか
くれて見えなくなるま
で、車がずつと遠ざか
つてからも、ちつと見
返つてゐられたのであ
る。

そこはかとなくけはひをかしきを、ただ一目見しやどりなりと見給ふに云々」とあるのをもととして書いたものと言はれてゐる。○かくるるまで——自分（或人）の乗つてゐる牛車がだん／＼と遠く離れ去つて行くに従つて、桂の木の姿が漸次小さくなつてゆき、はては見えなくなるまで振返つて見るといふのである。「君が住む宿の梢をゆく／＼もかくるるまでかへり見しはや」といふ大鏡や拾遺集にある菅原道真の歌のおもむきである。○今も見送り給ふとぞ——このころは古來疑問視され、諸説のあるところである。「艶にをかしかりしをおぼし出でて……今も見送り給ふとぞ」とあるために、古注では、「それをあとから思ひ出して今でもそこを通りかかる」と、その桂の木を見送る」と解してゐる。それでも意味は通じないこともないが、どうも面白くない。ここは文法的にのみ文を解しようとせず、文の前後の趣から起つて来る自然の情を主として考へ、その夜の情感を追念して描寫したものと見て、その夜の睦び物語、初夏の夜明け方の艶なる情景、それを車に乗つてから、しみ／＼と思ひ出し、大きな桂の木が見えなくなるまで見返つたと解したい。どうも「いま」（今）の語を除き、「給ふ」は「給ひき」とならねばならぬところである。又「見送り」は「見返り」とならねばならぬ。是のやうな不自然な文となつたのは、つまり兼好が自己の經驗を書いたものと考へられる。それを「或人」といふ語によつて自己を隠くして書いてゐるうちに、文末に來りて他人の物語の如くしたい一念から終りになつて、「或人」の物語のやうに書いて來たものの、何だか描寫が自己を語つてゐるやうになつたので、急に他人のことを語るやうにかく書いた爲めに、文に無理が起つたものであらう。

第百五段

北の屋陰に消えのこりたる雪の、いたうこほりたるに、さし寄せたる車のながえも、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、くまなくはあらぬに、人ばなれなる御堂の廊に、なみ／＼にはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物がたりするさまこそ、何事にかあらむ、つきすまじけれ。かぶしかたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬにほひのさとかをりたるこそをかしけれ。けはひなど、はつれ／＼聞えたるもゆかし。

口譯 家の北かげに消え残つた雪が、寒さで非常に固く氷つてゐて、そこへさし寄せてある牛車の轍も、霜が眞白にきら／＼と輝いてゐる。明け方の月は澄み渡つて照してゐるが、而し明るく照らさぬ暗いところもないといふ程ではない。どことなく薄暗いさまである。かうした中に、人氣（ヒトゲ）を遠く離れたところにあるお寺

語釋 ○北の屋陰——家の北の方で、陰になる所をさす。南の方は太陽があたりるので、雪は早く消えてしまふが、北の方は太陽があたらないので、何時までも雪は消えないのである。○いたうこほりたるに——「いたう」は、「いたく」（痛く）の音便。甚だしくの意。消え残つてゐる雪が寒さの爲に固く凍つてゐる所への意。○さし寄せたる——凍つた雪のある所へ車を近づけて置いたのである。「さし寄せ」は、側へ近寄せること。○車のながえ——「車」は勿論牛車のこと。

の廊下に、普通の身分の人ではなく、何れ相當の身分の方と見える男が、女と長押に腰を掛けて話をしてゐる様子である。それは何事を語り合つてゐるのであらうか、話は絶々とつづいてなか／＼終りさうにもない。女が頭を少し傾けてゐる様子など、彼女の身分といひ、器量、品位といひ、如何にもよい女と見える。さうして折々、女が着物に焼きこめた香りがさつと香り漂つてくるのは趣がある。二人

「ながえ」は、轆こといふ字を書く、車の前方へ出た二本の木で、牛を繋ぐところである。この「ながえ」は、ちかに地上に置いたのでなく、小さな机のやうな臺、即ち榻(シヂ)に載せて置いたのである。牛車の轆は決して地上に下すことはない。○霜しもいたくきらめきて——轆の表面に置かれた霜が、有明の月の光に照らされて、きら／＼と輝いてゐて。○有明の月——陰曆十六日以後の月をいふ。この頃の月は、夜がすつかり明けても、月は空に残つてゐるのである。但し、ここはすつかり夜が明けた朝をさすのでなく、夜明け方近き頃をさしてゐる。○さやかなれども——はつきりと明かに輝いてゐるけれども。「さやか」は、明らかなこと。○くまなくはあらぬに——くま(隈)は光の物に遮られて、暗いところをさす。「月光が隈なく照らす」といへば、月の光が隅々まで行渡つて照らすことで、少しも暗いことがないがといふのである。然し此所は、「くまなくはあらぬ」となつてゐるから、それが打消になつてゐる。故に、そのあたりはそれほど明るくはなく、多少光のゆきとどかぬ處もあるといふのである。即ち、今は月がよくさえ渡つてゐるとはいふものの、満月の頃でなく、有明の月の頃であるから、月光が少々薄暗くなつてゐる所もあるといふのである。この解については古來三説あり、壽命院抄に、「月はさやかなれども、木陰にてこぐらくみゆる也」と。句解には、「さへかえる空のけしきに月をみわたすさま／＼げなれども、さすが春の月のしるしとおぼるなる處あるをいへり云々、愚意には此説まさりたるやうに覺え侍る。猶尋ぬべし」と。又、文段抄には、「月は明白ながら所々に雲などもありしなるべし。かのくまなきをのみ見る物かはといへる例の景氣也」と。○人ばなれなる——人氣ひとけ離れたるの意。そのあたりに人家もなく、又、世人の尋ね来るやうなこともないことをいふ。○御堂

の壁じく語りあつてゐる話の様子が所々、途切れ／＼に聞えて來るのも、何だか心がひきつけられるやうな慕はしさがする。

の廊——「御堂」は、お寺の廊下をいふ。ここは塚本哲三氏が、「昔は貴人たちが、都の片ほとりに寺を建て、そのそばに立派な家を立てて、隠居所ともし、別荘ともしたもので、これもさうした住所の趣をいうたものだらう」とある。これについて佐野氏は反對の意見を述べてゐられるが、やはり塚本氏のやうに考へられると思ふ。○なみ／＼にはあらずと見ゆる男——普通の身分ではないやうに見える男。即ち相當の身分でありさうに見える男。公卿様のやうに見える人といふのである。「さし寄せたる車」は、この男が乗つて來たのである。○女と——女と一緒に。○なげし——長押。母屋は庇の間より床高く、庇と母屋との境に横長く厚板を張る。これを長押といふ。後世、下長押しもながしといふもの。今日普通に長押といふと、鴨居の上の横木であるが、これは勿論それでない。この長押は、當時にあつては相當に高く、且つ幅も廣くあつたものと思はれる。松の落葉三に、「なげしは、母屋と庇ひさしとの中のへだての上下にあるものにて、下なるは幅廣くぞありける。西宮記十四の卷に、跪長押下。兩三度膝行。昇長押。同記十九の卷に、獻けん盃者跪於長押上。獻之とあり。ノボルといひ、上にもゐたるを見て、せばからぬほどを知るべし。母屋は庇よりはいたく高かりしなり。さる故に、なげしも高くぞありける。源氏物語、夕顔の卷にも、例ならぬ事にて御前近くもえまぬらぬつつましさに、なげしにもえのぼらずと見えて、庇より母屋に在るのみ長押にのぼるといへり。母屋のかぎり高きほど知られたり。大鏡六の卷には、御病いたうせめて云々。御簾のとにみざり出させたまひしにも、長押をおりわづらはせたまひてとあり。これにていよ／＼さなめりと思はる」とある。○尻かけて——腰をかけてといふこと。○何事にかあらむ——何の事であるのやら、何を話してゐるのやらといふことで、下の話につづく

文である。小さな聲で話してゐるので、どのやうなことを話しあつてゐるのか、その話の内容がわからないといふのである。○つきすまじけれ——盡きさうにもない。いつまでたつても話が終りさうにもない。「つきす」は佐戀の動詞で、「盡く」の意である。源氏物語橋姫の巻に、「何やかやとつきすまじかりければ」とある。○かぶしかたち——日本書記の神代紀下に、「頗傾」をカブシと訓じたるを證として、頭を傾けたる容態をあらはすものとするのが通説である。古事記に「やまとのひととすすきうなかぶし、」四季物語に、「烏帽子うち傾きたるかぶしかた」とある。即ち傾けてゐる女の顔のさまで、女が顔を傾けてなつかしげに男の話聞いてゐるさまをあらはしてゐる。古注適當ならず。○いとよしと見えて——いかにもよきさうな女に見えて。「よし」との語は、積極的によいといふことで、ただよきさうな女に見えるといふのでなく、月光は薄暗く、稍離れてはゐるものの、女の身分といひ、器量といひ、品位といひ、どうも何から何までも、いかにもよい女のやうに見えるといふのである。○えもいはぬにほひの——何ともいへないよい匂ひ。女が着物に焼きこめた香である。○さとかをりたる——時々さつとあたりに香り深うて來るのは。○をかしけれ——面白い。趣が深い。○けはひ——男と女とが話しあつてゐるその話の様子をいふ。○はつれ——端々とか、所々などの意。二人の話はごく小さな聲ではあるが、時々二人の話が途切れ／＼にその一部分づつが聞えてくるといふのである。○ゆかし——氣がひきつけられるといふ氣持の語。それに對して何となく興味をおぼえて、もつと／＼深くその事情を知りたいとの意の語。男女二人は一體何事を囁いてゐるのであらう。又、これから二人はどうするであらうかと、その事が知りたくて興趣を感じたことを、この文の作者は「ゆかし」

の語を以て表現したのである。この段の文は、兼好法師集の、「冬の夜荒れたる所の簀子に尻かけて、木だかき松の木の間より隈なく洩りたる月を見て、曉まで物語し侍りける人に、思ひ出づや軒のしのぶに霜さえて松の葉わけの月を見し夜は」とあるときの事情を描いたものでないかといはれてゐる。

第百六段

口譯 高野山にみられた證空上人が、京都へ上られた時、細道で向ふから馬に乗つてやつてくる女に出逢ひなされたところが、女の馬の口取の男が、手綱を下手に引いて、上人の馬を道の傍の堀へ落してしまつた。證空上人は大變立腹してそれを

高野の證空上人、京へのぼりけるに、細道にて馬に乗りたる女の行きあひたりけるが、口ひきける男あしくひきて、聖の馬を堀へおとしてけり。聖いと腹あしくとがめて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼より優婆塞はおとり、優婆塞より優婆夷はおとれり。かくの如くの優婆夷などの身にて、比丘を堀へ蹴入れさする、未曾有の惡行なり」といはれければ、口ひきの男、「いかに仰せらるるやらむ、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ。非修非學の男」とあららかにいひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣

皆めて、「これはとんでもない亂暴事ぢや。釋迦の四部の佛弟子ではな、比丘よりは比丘尼が劣り、比丘尼よりは優婆塞が劣り、優婆塞よりは又優婆夷は劣つてゐる。そのやうに劣つた優婆夷（即ち女の身分で）などの身分で、比丘たる吾證空を堀の中に蹴込ませるといふのは、實に前代未聞の悪行である」といはれた所が、その口取の男が、「何と仰せられる事やら、とんとそのわけが分りませぬ」といふ

色しきにて、馬うまひきかへして逃げられにけり。たふとかりけるいさかひなるべし。

語釋 ○高野の證空上人——「高野」は紀州高野山のこと。證空上人の傳は未詳である。三井寺の内供智興の弟子、證空とする説と、黒谷上人傳に見える法然の弟子證空とする説がある。又、千載集の作者にも證空上人の名が見える。然しここに見えるのは、寶物集三巻に見える證空阿闍梨らしく思はれる。寶物集の話の筋は、師智興が重病となつたときにその身代りとなつて苦しむのを、智興悲しみに堪へず再び、我が身に振りかへんと祈り、遂に師弟共に病の癒える話で、その純真な證空と性格がやや似てゐる。傳幽齋本には「高野のせうくう上人」とあり、正徹本には、「高野のせうくわう上人」とある。○京へのぼりけるに——高野山から京都の方へ上つて來たのである。○女の行きあひたりけるが——「女の」は、女がの意。女が向ふからやつて來て上人に出逢つた所がの意。今日の文なら、證空が主格となつて、女に行き逢つたと書くべきところを、かく書くのは古文の一つの書き方である。第八十七段の「奈良法師の兵士あまた具して逢ひたるに」といふも同じ書き方である。○口ひきける男——馬の口取の男。これは女の乗つてゐる馬の口を取る男をさす。○あしくひきて——女の乗つてゐる馬の手綱を、口取の男が悪く引いて。細い道であつた爲に證空上人の乗つてゐる馬と、女の乗つてゐる馬とが、行き違ひになると、女の方の口取の男の馬の引き方が悪かつたので、その馬が上人の馬にぶつかるやうになり、遂に上人の馬が堀に落ちたのである。○聖の馬——「聖」は僧のことで、證空上人の乗つてゐられた馬

ので、證空上人はなほ一層、息づかひを荒く怒つて、「何だといふのだ、この無學文盲の奴め」と、あら／＼しく言つて、これは極端な悪口をしたと氣がついたやうなさまで、上人は自分の馬をもと來た方向へ引返して逃げもどられてしまつた。これはまことに尊い口論といふべきである。

をさす。○堀へおとしてけり——この細道は堀に沿うて居たので、上人の馬が驚いたはずみに、ちよつと横に寄つて道ばたの堀に落ちてしまつたのである。○腹あしくとがめて——「腹あしく」は、立腹して。おこりつぽく氣短の意。第四十五段の「腹悪しき人」参照。○こは希有の狼藉かな——これはとんでもない亂暴なことである。「こは」は、これはの意。「希有」は、滅多にならぬといふことであるが、こはけしからぬとか、とんでもないといふ意。狼藉は亂暴なこと。漢語本來の意は亂りがはしい意であるが、それから轉じて、理不盡に他を犯す意にいふ。○四部の弟子はよな——「四部の弟子」とは、釋迦の弟子を分つて四つとする。即ち、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四種である。これを又、四部衆、四衆ともいふ。「よな」は、な。あ、ねいといふやうに念を押す意をあらはす語。○比丘——梵語、Bhikṣu 乞士と譯す。出家して具足戒を受けた者。即ち男の僧をいふ。吉藏の法華義疏に、「比丘者名爲乞士、上從如來、乞法以練神。下就俗人、乞食以資身。故名乞士」とある。○比丘尼——梵語、Bhikṣuṇī 女子の出家して具足戒を受けた者。男僧に對して女僧をいふ。今日ただ「尼」といつてゐる。法華文句二上に、「尼天竺女人通名也」とある。以上二つを出家の二部といふ。○優婆塞——梵語、Upāsaka 在俗のまま佛門に歸依してゐる男。漢譯して、清信士、近事男といふ。つまり五戒を受け三寶に近親する在家の男子。○優婆夷——梵語、Upāsikā 譯して清信女といふ。在俗のまま佛門に歸依する女をいふ。以上二つは出家の二衆と呼ぶ。○かくの如くの優婆夷などの身に——四部の弟子を分けていふと、優婆夷などといふものは、比丘に比べるとこんなに劣つた身分のものである。斯くの如き下等な身分の優婆夷などの身で以つての意。こは馬に乗つた女を優婆夷といひ、それに對

して證空、自身の事を、自ら比丘びくといつて居るのである。○堀へ蹴入れさす——吾證空を堀の中に、口取の男をして蹴入れさせるのはの意。實際は女が自分の馬をして蹴入れさせたわけではないが、かく大袈裟に言つたのである。○未曾有の悪行なり——前代未聞な大變な悪い行爲である。次の「いはれければ」は、傳幽齋本や正徹本には、「いひければ」となつてゐる。○いかに仰せらるるやらむ——何と仰せなさるのでありませうか。證空上人があまり立腹して、むづかしいことをせきこんで怒つたので、口取の男には、上人のむづかしい言葉の意味がわからなかつたのである。○えこそ聞き知らね——これは「え聞き知らず」で、聞いても何の事だか、さつぱりわかりませんといふこと。○なほいきまきて——なほ一層いきり立つて。「いきまきて」は、怒つて息づかひが荒くなることをいふ。○何といふぞ——上人に叱られて平身低頭すべき口取の男が、意外に「上人は何と仰せられるのかさつぱりわかりません」などと反問したものだから、上人の方では更に癢に觸つて、「何だ小癢な」と、又反問されたのである。○非修非學の男——佛道の修業もせず、學問も修めぬ馬鹿な男といふことで、口取の男を馬鹿野郎といつたのである。○きはまりなき放言しつ——極端な悪言を言ひ散らした。「きはまりなき」は、極端な。非常なといふこと。「放言」は、勝手なことを言ひちらすことで、雑言。悪口のこと。○思ひける氣色にて——上人は腹立ち紛れに罵倒したが、これは少々言ひすぎたと思つたらしい様子にて。○馬ひきかへして逃げられにけり——上人は自分の來た方向へ馬の頭をむけて、逃げ歸へられたといふのである。これは、上人は一寸言ひすぎたので、僧の身として斯くの如き口取の男と喧嘩したことが悪かつた、恥づかしいと思つて逃げ歸られたものである。まして相手は女であるから、尙更弱

き者相手に叱つたのが恥づかしかつたであらう。口取の男がどんなことをするかと思つて逃げたのではない。○たふとかりけるいさかひなるべし——「いさかひ」とは、喧嘩。口論のこと。上人の態度がいかに純真な所があつて、見苦しい喧嘩にまでいたらなかつたのを「尊い」といつたのである。

第七百段

女の物いひかけたる返事かへりごと、とりあへずよき程にする男はありがたきものぞとて、龜山院かみやまのんの御時、しれたる女房ども、若き男達をとこたちのまるる毎ごとに、「時鳥ときすずや聞き給へる」と問ひて試みられけるに、なにがしの大納言とかや、「數かずならぬ身は、え聞き候はず」と答へられけり。堀河ほりかはの内大臣殿は「岩倉いわくらにて聞きて候ひしやらむ」と仰せられたりけるを、「是こゝは難なんなし。數ならぬ身、むづかし」など定めあはれけり。

語釋 ○女の物いひかけたる返事——「女の」は、女おんなの意。女が男に對して何か問ひかけたときの返事を。○とりあへずよき程にする男——すぐと適當な返事をする男は。「とりあへず」は、

口譯 女が何か物をいひかけた時、すぐさまに適當によい返事をすする男は、なか／＼世の中に少いものであるといつて、龜山帝の御時、ふざけた女官だちが、若い君達が參内なさる度毎に、「あなたは時鳥の鳴き聲を、今年はお聞きになりましたか」

と問うて、男がすぐよい返事をするものかと、ためして見られた時に、某大納言とかいふ人は、「私のやうなつまらぬ者は、まだ聞いておれません」と返答なされた。又、堀河内大臣殿はこの女官の間ひに對して、「私はたしか岩倉村で時鳥の聲を聞いたやうです」と仰せられたのを、「この堀河内大臣の御返答は非難すべき所のないよい返事である。某大納言のいはれたやうに「數ならぬ身」などいふ返答

その場ですぐに。即座に。早速のこと。「よき程にする」は、女の間ひに對して、男がよい具合に適當に返事をなすこと。○ありがたきものぞ——「ありがたき」は、仲々得難い。珍しい。稀なといふこと。減多に無いものであるよといふこと。本段の最初からこまでは、女房たちがお互に語りあふ言葉である。○龜山院の御時——龜山天皇の御在位の時代をいふ。文應、弘長、文永年間にあたる。○しれたる女房ども——ふざけた女房どもといふこと。「しれたる」は、「しる」といふ動詞から來たもので、「しれもの」(痴者)の「しれ」に同じくして、馬鹿なとか、愚かなといふことであるが、ここは轉じて、「ざれたる」の「ざる」と同意に使つたもので、ふざけたとか、いたづら者といふこと。「女房」は龜山院に仕へてゐた宮中の女官である。○若き男達のまゐらるる毎に——年若き公卿や君達などが宮中に參内なされる度毎に。「らるる」は敬語の助動詞。「まゐる」(參る)は、「罷る」の反對にして、賤しい所から禁中など尊い所へ行くことをいふ。○時鳥や聞き給へる——女房達が男に向つて、あなたは時鳥をお聞きになりましたかといふこと。○試みられける——男がどのやうな答をするかをためしたのだ。然も男がどんな知識であるか、人物であるかをためしたのでなく、女に對する態度がどのやうであるかをためしたものである。○なにがしの大納言とかや——何大納言とかいつた男はの意。この大納言は女房どもの質問に對して失敗した人であつたから、兼好がわざとその姓名を隠して出さず、何大納言などとぼかしたのである。文段抄には、「とかや」とあるが、光廣本や傳幽齋本には「とかやは」とあり、正徹本には「なに大納言とかやは」とある。「は」の字ある方がよい。○數ならぬ身——物の數にも入らぬ程の私は。つまり私のやうなつまらぬ者は。この大納言は女どもの前であるので、

はどうもきざでいやなものである」といふやうに批評し合はれた。

女の機嫌をとるために斯く卑下していつたのである。○え聞き候はず——よう聞きませぬ。とても私どもの耳には時鳥の聲が入りませんといふこと。○堀河内大臣——源具守。第九十九段の堀河相國基具の長男である。文永十一年(廿六歳)にて權中納言、弘安七年權大納言、正應三年正に轉じ、永仁三年一月辭任、同六年還任。延慶三年又辭任、正和二年内大臣となり、同五年正月十九日出家、即日薨去。年六十八。具守が内大臣であつた當時の大納言は藤原實泰、權大納言では、源通重、藤原師信、同公茂、同家定、同内經、同房實、源雅長、藤原冬氏、同冬教である。前の大納言とあるのは、是等の人の中のいづれかであると思はれる。○岩倉にて聞きて候ひしやらむ——さあ判然とは存じませんが、何でも岩倉で聞いたやうでありますの意。岩倉は山城國愛宕郡岩倉村で、具守の山莊のあつたところである。○是は難なし——この堀河内大臣の答は非難すべきところがない。それは少しも氣取つてもゐられず、女の前だからと飾つたところもないのを女房達が褒めてゐるのである。○數ならぬ身むつかし——なにがし大納言の返答にいはれた「數ならぬ身云々」の語はうるさい、いやだといふのである。つまりそのやうな殊更に卑下した返答はいやだと女房がいふのである。「むつかし」は、うるさい、いやだの意。○定めあはれけり——女房どもがお互に批評し合つた。

口譯 すべて男子は、女に笑はれないやうに振舞はれるやう、育て

すべて男をば、女に笑はれぬやうにおほしたつべしとぞ。淨土寺前關白殿は、幼くて、安喜門院のよく教へまゐらせさせ給ひける故に、御詞など

上げるべきものだといふ事である。浄土寺前關白殿は、幼少の折から安喜門院がよく御教育申上げたから、御言葉遣などが堂々と立派なもので女から笑はれなさることがない」と、或人が仰せられたとかいふことである。山階左大臣殿は、「たとひ賤しいしもべ女に見られるのでも、誠に氣まりが悪く、自然にいろいろと氣づかひがせられるものである」と仰せられました。若し女が一人も居ない世の中で

のよきぞと人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は、あやしの下女の見奉るも、いとほづかしく心づかひせらるるところおほせられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、ひきつくるふ人も侍らじ。

語釋 ○おほしたつべしとぞ——「おほす」は、育てる、成長させるの意。育て上げるのがよいといふことである。これは當時世上でかくいはれてゐる語を書いたものである。○浮土寺前關白殿——藤原家の九條師教。關白忠教の子。母は太政大臣公相女。正應元年十三歳にて權中納言、永仁元年十八歳内大臣、同四年右大臣、正安元年左大臣、嘉元三年關白氏長者、延慶元年に花園院の踐祚によつて攝政となり、同年辭職。元應二年薨去、年四十五。(一説に四十四、四十八ともいふ)巴心院或は淨土寺とも號す。○安喜門院——淨土寺太政大臣藤原公房の女。藤原有子といふ。母は太宰大貳範能女。後堀河院女御。女院記に曰く「承元元年誕生、貞應元年十月二十日從三位、同二十三日爲女御代、同年十二月十七日入内(年十五)、同月廿八日女御、同二年二月二十五日中宮(年十六)嘉祿二年七月二十九日皇后宮、安貞元年二月二十日安喜門院と申、寛元四、九、二十四爲尼(年四十、法名眞清淨)弘安九、二月六日御ことあり、八十。○御詞などのよきぞ——安喜門院のやうな方に育てられたので、自然言葉などが上品になつてきたのだと。○人の仰せられけるとかや——「人の」は、或人の意。或人が言はれたとかいふことであるの意。これは兼好が間接に聞いたことであるから、「とかや」と疑問の形になつてゐる。○山階左

あつたならば、着物のきこなしも、冠のかぶり方も、どうあらうとも構はず、體裁などちやんと整へる人はありますまい。

大臣殿——西園寺藤原實雄。太政大臣公經の子。正嘉元年四十一歳内大臣。翌右大臣、弘長元年左大臣、同三年辭任。文永十年八月出家、間もなく薨去。年五十七。洞院左大臣ともいひ、京極、玄暉、顯親三門院の父。○あやしの下女——「あやし」は身分の賤しきこと。「下女」は下々の女のこと、下女(今日いふ)のことではない。○見奉るも——しもべ女が我れ即ち山階左大臣を見るのも。つまり左大臣がしもべ女に見られるもの意。さて左大臣自身が言ふ言葉に、「見奉る」と敬語を使つてゐるのはをかしいが、これは筆寫兼好法師が、左大臣に對する敬意からして、自然に敬語が加つてかく書かれたわけである。第六十六段の「この枝につけてまゐらすべきよし」第百段「まがりをまゐらせよ」など同一の用法である。○いとほづかしく——先方のしもべ女に對して、こちらの左大臣の方がまゐりがわるいのである。たとひ賤しい女であつても、その女に見られるのは、男はどうも大變恥づかしくまゐりがわるいといふのである。○心づかひせらるる——自然に何かと氣がおける。自然いろ／＼と氣づかひがされる。「らるる」は自然可能の助動詞である。○女のなき世なりせば——もし女が一人もゐないといふ世の中であつたならば。○衣紋も冠も——「衣紋」とは、裝束の着附。もとは襟を胸で合はせたところ。襟の合せ目をいつた。それが轉じて衣服の着様、着こなしのことになつた。今鏡に、「大將どのは殊の外にえもんをぞ好み給ひて」とある。従つて、「冠も」は、冠のかぶり方である。○いかにもあれ——どうでもあれ、それはかまはない。衣裝がよごれて居ようが、冠がゆがんで居ようが、そんなことはどうでもよいといふのである。○ひきつくるふ——つくるひ整へること。なほし整へること。つまり衣裝や冠の體裁をちやんとよくすること。

口譯 このやうに男子に恥づかしがられる女といふものが、どんなにえらい立派な者であるかと思ふと、どうして女の本性は皆ひがんでゐる。人はどうでもよいが、自分だけはいやうにといふ利己的の考が深く、慾張りが甚だしく、物事の道理を知らず、すぐに邪惡の迷ひに心が早く移り、口先がなか／＼うまくて、一向差支のない事でも尋ねるときは語らず、それでは常に用意深く言葉を慎んで

かく人に恥ぢらるる女、いかばかりいみじき物ぞと思ふに、女の性は皆ひがめり。人我の相ふかく、貪欲甚だしく、物の理を知らず、ただ迷の方に心もはやくうつり、詞もたくみに、苦しからぬ事をも、問ふ時はいはず。用意あるかと思れば、又あさましき事まで、問はず語りにいひ出す。深くたばかりかざれる事は、男の智慧にもまさりたるかと思へば、その事、跡より顯はるるを知らず、すなほならずして拙きものは女なり。その心に隨ひて、よく思はれむ事は、心うかるべし。されば何かは女の恥づかしからむ。もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりなむ。只迷をあるじとして、かれにしたがふ時、やさしくもおもしろくも覺ゆべき事なり。

語釋 ○かく人に恥ぢらるる女——かくの如くに男から恥づかしがられる女。「かく」は前段にあげた文意を受けてゐる。「人」は、男をさす。○いかばかりいみじき物ぞと思ふに——どんなにえらく立派なものであるかと思ふと。○女の性は皆ひがめり——女の本性はいづれも皆ひがみねちけてゐる。○人我の相ふかく——「人我の相」とは、人の相と我の相。利己心をいふ。相は心の有様、性である。人は人、我は我と區別して、自己を大切にし、人を軽く考へる性質。即ち自

ゐるかと思ふと、とんでもないやうな事まで、問ひもしないのに口を出して喋る。深くうはべを偽り飾つてゐる事は、男の智慧にも優つてゐるかと思ふと、そのうはべを飾つてゐることが、すぐあとから露見するのに気がつかない。すなほなくて、實につまらぬのは女である。斯うした女の心に従つて、女によく思はれようとすつものは、馬鹿々々しくつまらぬ事である。さればどうして女に恥づ

分だけよければ、人はどうでもよいといふ考へをいふ。「ふかく」は、強といふほどの意。人身は五蘊の假合なるを悟らず、人に常一の我體ありと固執する惡見で、法我見に對する語。○貪欲甚だしく——慾ばる心の強烈なるをいふ。○物の理を知らず——物事の道理がわからないで。○ただ迷の方に心もはやくうつり——何か事があると、すぐ心が迷ひ(邪惡)の方に赴いてしまふ。○詞もたくみに——口先でうまいことをいつて、表面をごまかすことが巧妙である。○苦しからぬ事——言つたとて何の差支ひもなく、心苦しいこともないことを。○問ふ時はいはず——他人から問ひ尋ねられると、秘密事のやうにして語らない。○用意あるかと思れば——深い思慮があつて、無駄事は口を開いて言はぬかと思つて女を見ると。○あさましき事まで——思ひがけないあきれた事まで。即ち當然秘密にすべきことまで。○問はず語りにいひ出す——他人から問はれもしないのに、自分の方から言ひ出すをいふ。○深くたばかりかざれる事は——甚だしく他人を詐り欺き、さらぬ體に外面をつくるひ、言葉を飾つてゐること。傳幽齋本には、「かざれること」は、正徹本「かざれること」延徳本「かざれること」は「とある。以上の證により「事は」、「言葉」であつたかとも推定される。○男の智慧にもまさり云々——女の智慧は男の智慧よりもすぐれてゐるかと思へると。○その事、跡より顯はるるを知らず——「その事」は、「深くたばかり飾れる事」をさす。女が人を欺き、表面を飾つてゐることが、すぐその後から露見するの、女自身はそれに気がつかない。○すなほならずして拙きものは——正直でなくして、ねちけてゐてくだらないものは。「拙きもの」は、つまらぬもの。くだらぬものをいふ。○その心に隨ひて——女の喜ぶやうに機嫌を取つて、女からよく思はれること。「その心」は、女の心を

かしいことがあらう、何も恥づかしいことはないのだ。若し又本當に賢明な女が世にあつたとしたら、そんな女は何となく親しみがなく、面白いところのないものであらう。只迷の色情を主體として彼の女の心に従ふ時、女といふものが優美にも面白くも思はる事である。

さす。「隘ふ」は、女が喜ぶやうに機嫌をとること。○心うかるべし——心愛いことであらう。馬鹿々々しくいやなことであらう。○何かは女の恥づかしからむ——「何かは」は、どうしての意。「女の」は、「女が」の意で、女に對して恥づかしと思ふことをさす。どうして女に對して恥づかしいことがあらうか。ないといふのである。「はづかし」とは、他人に對して、自己の劣つて居ることを氣まり悪く思ふこと。○もし賢女あらば——假りに賢明な女があつたならば。これまで書いて來た女は、あさはかなものであると書いて來たのであるが、世の中にはたまに賢明な女が若し萬一にあるとしたならばといふのである。○それも物うとく——「それも」は賢女をさす。その賢女も何の親しみもなく。○すさまじけれ——素然として何の興もないものであらう。これも賢女について言つてゐるのである。學徳教養もある賢女といふものは、うとましくすさまじいものであるとは、源氏物語帯木の卷に、式部丞の談として、「まだ文章生に侍りし時、賢き女のためしをなむ見給へし。公事をも言合せ、私さまの世に住まふべき心おきてを、思ひめぐらさむ方もいたり深く、才の際なま／＼の博士はづかしく、すべて口あかすべくなむ侍らざりし。それは或博士の許に學問など侍るとて、まかり通ひし程に、あるじのむすめども多かりと聞き給へて、はかなきついでに言ひよりて侍りしを云々、いとあはれに思ひうしる見、寢覺のかたらしにも身の才つき、おほやけに仕うまつるべき道々しきことを教へて、いと清げに消息文にも假名といふものを書きませず。うべ／＼しう言ひまはし侍るに、おのづからまかり絶えて、そのものを師としてなむ、わづかなる腰折文作ることなど習ひ侍りしかば、今にその恩は忘れ侍らねど、なつかしき妻子とうち頼まむに無才の人、なまわるならむ振舞など見えむに、恥づかしくなむ見

えし云々。さていと久しくまからざりしに、ものたよりに立寄りて侍れば、當のうちとけ居たる方には侍らで、心やましき物越にてなむ逢ひて侍りし。ふすぶるにやと、をこがましくも又よきふしなりとも思ひ給ふるに、このさかしびとはた輕々しきもの怨じすべきにもあらず、世の道理を思ひとりて恨みざりけり。聲もはやりかにて言ふやう、月頃風病重きに堪へかねて、極熱の草藥を服して、いと臭きによりてなむ、え對面たまはらぬ。まのあたりならずとも、さるべからむ雑事等はうけたまはらむと、いとあはれにうべ／＼しく言ひ侍り云々」とあるのと同じ趣きである。○迷があるじとしてかれにしたがふ時云々——色慾の迷、色情といふものを重要なものとして、彼即ち女人の言ひなりになること。○やさしくもおもしろくもおぼゆべき事なり——女人といふものは優美なものだとも、面白いものだとも思はれるのである。

第百八段

口譯 世の人々を見ると、僅かの時間を大切に
にする人はない。このやうな人は時間の惜むに足りないといふ道理をよく知つてゐる爲で

寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人のためにいはば、一錢かろしといへども、これをかさぬれば、貧しき人も富める人となす。されば商人の一錢を惜しむ心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期忽にいたる。されば道人は、遠く日月を惜しむべからず。唯今の一念空しく過ぐることを惜しむべし。もし

あらうか。それとも又暗愚にして、時間の大切にすべきものであることを知らないのであるか。時間の觀念など超越して、時を惜まないでゐる悟道に入つた人に對しては、何もしふことは別にないが、暗愚にして時の大切なことを知らずに怠つてゐる人の爲に言ふならば、一錢といふ金は極く僅少な金額ではあるが、この一錢を積み重ねてゆくならば、貧しき人であつたのも、遂に富んだ人となるの

である。それであるから商人は、僅か一錢の金でも大切にすることが切實である。それと同じわけで一瞬時といふ僅かな時の経過は、吾人は気がつかずに過ぎてゐるが、この一瞬時を次から次へとすこして止まなければ、忽ちに臨終の時季が迫つてくるのである。だからして佛道に志さうとする人は、ぼんやりと遠い先々の月日を惜むやうなことであつてはならぬ。唯今の一瞬時をむだに過ごすことを

人來りて、「我が命、明日は必ず失はるべし」と告げ知らせたらむに、今日の暮るる間、何事をかたのみ、何事をかいたまむ。我等が生ける今日の日、何ぞその時節にことならむ。一日のうちに飲食、便利、睡眠、言語、行歩、やむことを得ずして多くの時を失ふ。そのあまりの暇いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟して時をうつすのみならず、日を消し月を亘りて一生を送る、尤も愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲のおもひを觀ぜしかば、惠遠、白蓮の交りをゆるさざりき。しばらくもこれなき時は、死人におなじ。光陰何のために惜しむとならば、内に思慮なく、外に世事なくして、止まむ人は止み、修せむ人は修せよとなり。

語釋 ○寸陰——ごく僅かの時間。太陽の動くのに従つて、それによつて出来る物の陰が次第に移動する、その移動が一寸位動く程の極僅かの時間といふことである。○これよく知れるか愚なるか——「これ」は、上文を受けて、寸陰を惜まない人をさす。「よく知れるか」は、時間を大切に惜まない人は、悟道の極地に達して、時の觀念を超越し、時は惜むに足らぬといふことを知

つてゐるかの意。「愚なるか」は、時間は大切にしなければならぬことが、馬鹿なためにわからないのか。「知れるか」が、光廣本や野槌本には、「知れるが」とある。○愚にして怠る人のためにいはば——「よく知れる人」即ち悟道の極地に達して、時を超越してゐるやうな人に對しては、何も言ふ必要がないからして言はないけれども、時の大切なるをわからずにぼんやりと暮してゐる人の爲めに言ふならば。○一錢かるしといへども——「一錢」は、穴のあいた錢、昔の寛永通寶の如きもの一文のことである。今日の「一錢」といふことではない。第六十段の「錢二百貫」の條參照。「かるし」は重量について言つたのでなく、ごく輕少な金錢であるといふのである。○これをかさねれば——この一錢(即ち一文)の金錢を積みかさね寄せ集めると。○商人の一錢を惜しむ心切なり——商人が僅か一文のお金でも大切にすることをほげしい。「商人の」の「の」は主格をあらはす助詞にして、「が」の意。「心切なり」は、「心は切なり」の意。「切なり」とは、痛切であることで、強烈とか、はげしいことをさす。「心切なり」は、傳齋本にも、正徹本にも「心ねんごろ也」とある、古い時代にはかくあつたものと思はれる。○刹那おぼえずといへども——些細な一瞬時の経過といふものは、さほど大切なものと思はずすすけれども。○これを運びてやまざれば——刹那「即ち一瞬間」は極めて短いものであるが、このわづかな時間を次から次へと経過して止まなければ。「これ」は刹那をさし、「運ぶ」は時間の運行を意味してゐるので、移し過して、続け送つての意。○命を終ふる期忽にいたる——命を終はる時、即ち臨終の時がすぐに到來する。「終ふる期」は、正徹本には、「終する期」傳齋本には、「終る期」延徳本には「修する期」とある。○道人——佛道に入つて悟を開いた人。又は悟を開かうと修業中の人を

惜まねばならぬ。若し或人が訪づれてきて曰く、「汝の命はもう今日限りであるぞ。明日は必ず死ぬであらう」と、告げ知らせたならば、今日の一日が暮れるまでの間に、何事をか頼みとし、何事をかなさうか、とても頼みとされず、何事もする心にならぬ。我等が今日の生きてゐるこの一日は、どうしてこの場合と違はうか、少しも違つてゐない。一日といふと随分長い時間のやうでもあるが、この一

いふ。ここは恐らく後者の意。即ち、得道の人、又修道の人。釋氏要覽上に、「智度論云。得道者名爲道人。餘出家者未得道者亦名道人。」とある。○遠く日月を惜しむべからず——「遠く」は、次の唯今に對する語であつて、ただばんやりと遠い將來の漠然とした大きな月日、即ち時間を大切だと思ふやうなことがあつてはならぬ。○唯今の一念空しく過ぐることを惜しむべし——「一念」は刹那の譯語。唯今の一瞬間をいたづらに過すことを惜むやうにしなければならぬ。○我が命——告げられる人自身の命。來りて告げ知らせる人から言ふと、「汝の命」となる。○明日は必ず失はるべし——明日は必ず死ぬであらう。「る」は受身の助動詞であるが、命が無くなることを受けるといふので、殺されるの意でない。○告げ知らせたらむに——自分に告げ知らせた時には。○今日の暮るる間——今日の日が終る間。即ち今日の一日が過ぎ去つて明日が来るまでの間をいふ。○何事をかたのみ何事をかいたまむ——どのやうな事をたのみとし、どのやうなことをするであらうか、何事もたのみとせず、何事をもなさないであらうの意。「何事」といふのは、富とか、地位、父母、家柄、名譽、事業をさしたものである。「たのみ」はたよりとすること。「いとなむ」は、行ふとか、爲すこと。「たのみ」は延徳本には、「たのしみ」とある。○その時節——明日はお前は死ぬよと宣言されて、その死を待つてゐる間をさす。「何ぞ……異ならむ」で、どうしてその場合に異つてゐようか、少しも變る所がないといふこと。○便利——大便小便のこと。○言葉——他人と話し語ること。言葉の意ではない。○行歩——歩くこと。○やむことを得ずして多くの時を失ふ——「飲食」以下「行歩」に至る五つのことは、人間としてどうしても爲さざるを得ないことであるから、斯うした事のために、吾等はやむを得ずに多くの

日の中には、飲食すること、便所へ行くこと、眠ること、話をすること、歩くこと、かうしたのつびきならぬことで、多くの時間を失ふのである。それ等のことををなした残りの時間はいくらない間に、何の役にも立たない事を爲したり、むだなことを語り合つたり、何の役にも立たぬことを考へて、大切な時間をすごしてゐる。そればかりでなく、斯うして日をすごし、月を送つて、遂に自分の一生涯

時間を失ふのである。○そのあまりの暇いくばくならぬうちに——飲食、便利等のためにやむを得ないで費して、なほ残りの時間はいくらない間に。○思惟し——シユキとよむ。考へ思ふこと。○時をうつす——時間をすごすこと。即ち時間を費す事である。「時」は、子刻、丑刻等で一日十二分したものをさす。時の集つたものが日であり、日の集つたものが月である。○日を消し月をわたりて——「消す」は、費すこと、即ち過すことである。「わたる」は、經過すること。○一生を送る——一生涯を終ること。○謝靈運——支那南北朝時代の晉の人、文章家として顔延之と共に江左第一の人と稱せられた。宋に仕へて元嘉年間に永嘉の太守となつた。祖父謝玄の封爵を襲ぐ、されど常に不平を懷き、是れをまぎらすために非常に豪奢な生活をなし、多數の門生奴僕を率ゐ、山川を跋渉した。後亂を起し、元嘉十年刑に死す。年四十九。○法華の筆受——「法華」は法華經のこと。「筆受」とは、經文を翻譯の際に、譯場に於て譯主の言を受けて漢語に筆録する役である。我が國に傳つてゐる妙法蓮華經は鳩摩羅什譯で、これは羅什の弟子僧叡が筆受を勧めたとなつてゐて、謝靈運が筆受となつてゐないが、當時妙法蓮華經翻譯の際に二千餘人の才學の人が譯場に入出したとあるから、筆受も僧叡一人にあらずして、靈運も加つてゐたのかもわからぬ。そのときは靈運廿一、二歳である。但し、野植には、謝靈運が筆受をつとめたのは涅槃經であらうとなし、「三體詩、黃滔遊東林寺詩、翻譯如會見、白蓮開滿池、註、廬山記、謝靈運即東林、翻涅槃經云々」と見えてゐる。故にここは是をさすので兼好の記憶の誤かとも思はれる。筆受については、長水楞嚴疏に、「筆授或云筆受謂以此方文體筆其所授梵本緝綴潤色令順物情不失正理也、」雲樞模象記曰、「譯者最初易梵爲華也、譯語者成其章句、」

を終るのである。考へればまことに暗愚なことである。

謝靈運は法華經の筆受の役であつたが、彼の心の中には常に、花鳥風月を愛賞する思ひを抱いてゐたので、惠遠の白蓮社の交りは許されなかつた。假令、暫くでも、この一瞬時を惜む心がなかつたならば、その人は生きてゐても、死人同様である。然らば時間は何のため大切にするのかといへば、心内にはくだらぬ事を考へ思ふことな

く、外界に對しては世俗のくだらぬことに煩はされることなく、かくの如き清淨な悟道の境地にて、ただ何もなさず無爲清寂な心境でゐようと思ふ人は、それでよいのである。又積極的に内に思慮なく、外に世事なき境地にて、いよ／＼佛道を修業しようと思ふ人はさうするのによいのである。右の二者は何れも同じく佛道修行になるのである。

也、筆授者潤其辭致也、而證譯者總爲參詳校正也」とある。ここに、「筆受なりしが」とあるのは、それほど佛教に造詣があり、志が深かつた人であるといふのである。○風雲のおもひを觀ぜしかば——「風雲の思ひ」の語の解については古來二説ある。大成本によると、「(一説)風雲の思ひを靈運は詩人文人にてある間、花鳥風月をもてあそびて詩文の思ひに時をうつすと見る人あり。(二説)さには侍らず。風雲の思ひとは、臣下として君を思ふ義なり。周易に雲は龍にしたがひ、風は虎にしたがふとありて、龍虎は君の象、風雲は臣の象とする故なり。靈運は晉の臣たりしが、宋の代になりしを無念に思ひ、常に其怨みをむくひて二度晉の天下になさんとたくむを風雲の思とはいふぞ、新注」とあるのである。何れにとりてもよろし。正徹本や延徳本によると、「風雲の興を觀ぜしかば」とあるから、是れによると花鳥風月にあこがれたことを意味するものとなる。通鑑綱目に曰く、「宋元嘉十年謝靈運有罪誅。靈運好爲山澤之遊。從者數百人伐木開徑。百姓驚擾或表其有異志。靈運詣闕自陳。上以爲臨川內史。靈運遊放自若。爲有司所糾遣使收之。靈運執使者興兵逃逸。作詩曰。韓亡子房奮。秦帝魯連恥。追討擒之。上愛其才。降死徙廣陵。已而棄死。」と。これによると、どうもこの「風雲の思ひ」は、花鳥風月に憧れて、詩文を嗜む意と考へられる。然し、宋書に記すところは、「初爲武帝太尉參軍。宋受晉禪。遷太子左衛率。自以未參權要。常懷憤惋。文帝徵爲祕書監。遷侍中。賞遇甚厚。然唯以文義相接而已。靈運意不平。多稱疾不朝。」とあるが、これによつて考へると、龍が風雲を得て雄飛するが如く、機會を得て榮達せんとする欲望をあらはしたものと考へられる。○惠遠——エランとよむ。支那東晉時代の高僧。大覺禪師といふ。俗姓賈氏。年廿一歳にて道安

の般若經を講ずるを聞きて豁然として大悟す。これより嘗て修めた儒教や老莊の學を捨てて佛門に入り、太元十一年廬山に東林寺を建てて、僧徒百二十三人と居り、白蓮華社を作る。義熙十二年寂す。年八十三。○白蓮の交りをゆるぎざりき——謝靈運がこの白蓮社の同人になりたいと言つたが、惠遠は拒絕して、入れなかつたといふのである。「白蓮」といふのは、白蓮華社のこととで、略して「白蓮社」又は「蓮社」とも、白蓮ともいふ。これは、惠遠を中心として集る僧徒百二十三人が、無量壽佛の像前に於て、專念淨土祈願をなしたものの團體の名稱にて、その名稱の起りは、當時東林寺には多くの白蓮を植ゑてあつたのでこの名をつけたといふ。事文類聚前集卷三十五に、「謝靈運求入淨社。遠師以心雜止之。」とある。○これなき時は——この「これ」は何をさすかといふことについては諸説あるけれども、「光陰を惜む心と見る」のが妥當であらう。整齊抄に、「光陰ヲ惜ミヌル心ナキトキハ也」とあるはよろし。○内に思慮なく外に世事なく——「内」は心内をさす。「外」は「心以外」のことにして、心のうちには世俗に關する氣苦勞なこゝとや、立身出世のやうな野心もない。又、身や世俗に關しては浮世の俗務がないといふのである。「世事」は、傳幽齋本には、「政こと」延徳本には「政事」正徹本には「政道」とある。然しこれは流布本の方がよろしい。○止まむ人は止み修せむ人は修せよ——萬事空と觀念し、俗界の諸縁を放下して、無爲寂靜にして達觀してゐるのも一つの悟りである。然し又、進んで佛道を修行しようとする人は、修行するがよい。大局から見れば、右の兩方共に佛道の修行になるといふのである。

第九段

口譯世人から有名な木のぼりだといはれた男が、或人を指圖して、高い木にのぼらせて、木の末のあたりの枝を切らせた所が、高い所でひどく危なさうに見えてゐた間は、何ともいはないで、或人がいよ／＼枝を切る用事もすんで、下りてくる時、軒の高さ程になつてから、「失敗するなよ。よく氣をつけておりなさい」と、言葉をいひか

高名かうみやうの木のぼりといひし男おとこ、人をおきてて、高き木にのぼせて、梢を切らせしに、いとあやふく見えしほどは、いふ事もなくて、おるる時に、軒長のきだけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛びおるるともおりなむ、いかにかくいふぞ」と申し侍りしかば、「其の事に候。目くるめき、枝あやふきほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちはやすき所になりて必ず仕る事に候」といふ。あやしき下藤げらふなれども、聖人せいじんのいましめになへり。鞆たづもかたき所を蹴出けいだしして後、やすくおもへば、必ず落つると侍るやらむ。

語釋 ○高名の木のぼりといひし男——「高名」は、ここでは、有名なとか、評判なといふこと、つまり「木のぼりの名人と世間から言はれた男」の意。「いひし」は、世人が「言つた」といふこととで、その男からいへば「いはれた」といふことになる。○人をおきてて——「おきてて」(捉て)は、下二段の動詞で、指圖してといふこと。もとは、命ずるとか、定め命ずること。「人を」の

けたのを聞いて、自分は、「もうこのやうな軒の高さ位になつては、飛び下りたところを下りられるだらう。それをどうして氣をつけよなどいふのだ」と申しましたら、「さあ、そのことでもありますよ。高い所に登つて目がまはり、枝が細くて折れさうで危ない間は、登つてゐる當人自身が恐れて用心してゐますから、こちらからは何とも申しません。兎角、失敗といふものは、何でもない所になつてか

人は恐らく弟子をさしたものであらう。○のぼせて——のぼらせて。あげさせて。○いとあやふく見えしほどは——高い木の高所に上つてゐて、ひどく危く見えの間は。○いふ事もなくて——別に何といつて注意することもなくして。○軒長ばかりになりて——その弟子が高い木の上からだん／＼と下りて、軒の高さ位の所まで下りてきた時になつて。○心しておりよ——よく氣をつけて過あまちをしないやうにして下りよ。「心して」は、注意してとか、氣をつけてといふこと。○かばかりになりては——これ位な高さの所まで下りてはの意。「かばかり」は、これくらゐのこととで、軒の高さをさしてゐる。是れ以下の文は筆者兼好法師の言つた語として見たがよいかと思ふ。勿論第三者の言としても考へられるが。○飛びおるるともおりなむ——飛び下りた所で下れることが出来ようとの意。飛び下りたとて何でもないといふのである。「おるるとも」は、正徹本は、「おるとも」となつてゐる。文法上からいへば正徹本が正しい。○いかでかくいふぞ——どうしてそのやうに、もう低い所になつてから氣をつけよなどといふのか。「かくいふぞ」は、正徹本には、「かくばかりいふぞ」とある。○その事に候——いやそのことですよ。さあそこなんです。自分の言はんとする所、注意しようとする所は、あなたがお尋ねになるそのことなんですよの意。○目くるめき枝あやふきほど——木の高い所に上り、目まひがしたり、細い枝の上で、何時折れるかわからないやうな危険な間は。○おのれがおそれ侍れば——「おのれ」は、木に登つてゐる當人の意。即ちはたから言はなくても、その當人自身が落ちはしないかと心配し用心してゐるから。○申さず——用心せよなどは注意はしない。○あやまちはやすき所になりて——「あやまち」は、失敗のこと。失敗といふものは、たやすい何んでもないやうな所になつて。

ら必ずしでかすものであります」といつた。この高名の木のぼりの男は、つまらぬ下賤な者ではあるが、その言ふ所が、古聖人の訓戒にかなつてゐる。蹴鞠もやはり同様で、むづかしい所がうまく蹴つて出られて後に、もう大丈夫だと思つて安心すると、きつと鞠を落とすとかいふことであります。

○必ず仕る事に候——きつとやるものである。きつとするものである。「仕る」(ツカマツル)とは、やる、するの敬語。○あやしき下賤——賤しく身分の低い者。「あやしき」は、身分の賤しいこと。「下賤」とは、下賤の者。身分低級の者。○聖人のいましめにかなへり——その言ふ事が聖人の教訓によくかなつてゐる。易經の繫辭下傳に、「君子安而不忘危。存而不忘亡。治而不忘亂。是以身安而國家可保也。」といふやうな精神をさして、「聖人のいましめ」といつたものであらう。○鞠——ここは蹴鞠(ケマリ)のことをさす。蹴鞠は靴で鞠を一方では蹴上げ、一方では承けて遊ぶ。鞠は地に落さぬやうにする。この鞠は革で圓く作る、徑七八寸、内に空氣を満たして括るのである。遊ぶ其場を鞠坪(マリツボ)又は、懸(カカリ)と云ふ。方六間、或は八間。十二間などで、四方に竹の圍ひを作り、四隅に櫻(良)、柳(異)、楓(坤)、松(乾)を植ゑる。(尺素往來による)之を四本懸(シホンガカリ)といふ。その装束、蹴法にはいろいろの儀則がある。○かたき所を蹴出して——鞠を落さずうまく蹴ることがむづかしい所を、「かたき所」といつたのである。「蹴出す」とは、そんな困難な場所から、うまく都合のよい場所に蹴つて出るとの意。○やすくおもへば——もう大丈夫だと安心すると。○必ず落つると侍らむ——きつと鞠が落ちるといふことである。「らむ」は婉曲叙法。即ちこのあたりの意は、蹴にくい骨の折れるところは、鞠が地上に落ちないやうにと警戒して一心にやるので、却つてうまくゆくが、そこがすむとあとは、もう樂なところと安心してしまひ、そこに油斷が生じて、そのために何んでもないやさしい所で、却つて鞠を落して失敗するものであるとの意をいつてゐる。

第一百十段

雙六の上手といひし人に、その行を問ひ侍りしかば、「勝たむとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手か疾く負けぬべきと案じて、その手をつかはすして、一めなりとも、遅く負けべき手につくべし」といふ。道を知れる教、身を治め國を保たむ道もまたしかなり。

口譯 雙六の達人だと言はれた人に、その雙六の勝負に勝つ方法を尋ねましたところが、「相手に勝たうと思つて打つてはならぬ。相手に負けまいと思つて打つべきである。どの方法でやると早く負けるだらうかと考へて、その負けさうな手段を使はないで、一目であつても遅く負けるやうな手段を使ふがよい」といふ。是れはまこと

語釋 ○雙六——古くは、スゴロクといつたが、後世はスゴロクといふ。雙六に盤雙六と紙雙六との別あり、前者は古くより行はれ、後者は近代の製作に係り、その方法亦自ら異なる。ここにいふは盤雙六にして、是れは支那より傳來したるものにて、その年代は詳かでないが、持統天皇紀三年十二月の條に、「丙辰禁斷雙六」とある。以てその以前に既に流行してゐたことを伺ふことが出来る。當時は専ら博奕の具に供せられしを以て禁ぜられたもので、續紀孝謙天皇天平勝寶六年十月乙亥の勅にもこのことが見えてゐる。されど物を賭し、財を輸さざるに於ては、弄ぶを許されたものと見え、帝王、公卿、宮媛等の間には盛に行はれし事は、源氏物語、枕草子、大鏡、榮華物語、蜻蛉日記等に數多散見してゐる。さて盤雙六の形狀並に方法を按ずると、盤は縱七、八寸、横一尺餘、高さ四、五寸位の木盤にして、其の面に雙方に十二づつの目を盛り、之を十二

に道理に叶つた教へであつて、身を修め國を平和に保つ方法でも、この雙六の場合と同じである。

の馬(共に黑白の二種あり)を配置し、二箇の采を竹筒の中に入れ、互に振り出して、采の目のままに馬を進め、早く敵の線中に入りたるものを勝とす。○上手といひし人——雙六の上手といはれた人。「高名の木登りといひし男」と同じ書方である。○行——テダテとよむ。手段。方法のこと。ここでは勝つ手段のことをさしてゐる。○問ひ侍りしかば——問ひたづねたところ。ここは筆者兼好法師が問うたのである。○勝たむとうつべからず——相手に勝たうと思つて打つてはならぬ。○負けじとうつべきなり——なるべく相手に負けまいと思つて打つ方がよい。右の二つのことは結局同一の事のやうであるが、然し相違があるのである。といふのは勝たうとあせるときは、自己の弱點にも氣づかず敵のことばかり考へるといふこともあらうし、又そこに無理が生ずるのである。これがため却つて失敗する。されど負けまいとするときには、自己の身分相應にして用意周到なる準備をなし、自己の實力といふものに始終氣をくばるのである。これが遂に勝ちにいたることになる場合が多い。○いづれの手か疾く負けぬべきと案じて——どういふ雙六の相手を負かす手段をとつた方が、早く負けるであらうかと考へて。「手」は勝負事について、相手方を負かす手段や方法、計策をいふ。「案じ」は、考へること。○その手——負けさうに思はれる手段をさす。○一めなりとも——「一め」は、一目のことである。但し、ここにいふ目といふのは、采の目のことで、振出した采の目の數によつて、雙六の馬を進めるので、その一の數であつてもよい。○手につくべし——そのやうな手段をとるがよい。○道を知れる教——雙六の上手な人だと言はれた人が言つた語は、よく物の道理を辨へ知つて居る教であつて。○身を修め國を保たむ道——自己の行ひを修養し、國家を平和に保つてゆく方法手段をいふ。大學にある修

身治國平天下」の思想をさしてゐる。○しかなり——さの通りである。さうである。修身治國平天下の方法も、要するにこの雙六に勝たうとする際の手段と同じである。

第百十一段

「圍碁、雙六このみて明かし暮らす人は、四重五逆にもまされる悪事とぞ思ふ」と、或聖の申しし事、耳にとどまりていみじく覚え侍る。

口譯 「圍碁や雙六をたしなんで、毎日々々を過ごす人は、四重五逆の罪にも過ぎた悪い事だと思ふ」と、或高僧が申された事が、常に耳の中に残つてゐて忘れられず、えらい立派なことをいつたものだと思つてゐます。

語釋 ○圍碁——單に碁ともいふ。支那にては桀臣烏曹作るといふ。或は堯王圍碁を作り、子丹朱に教ふと、或は舜王作りて、子商均に教ふといふ。されど遠く印度に起つた遊戲であるとなす。我が國にては天平七年吉備眞備、歸朝の時始めて碁雙六を携へ歸るといふが、持統天皇三年十二月に碁雙六を禁止する記事が見えてゐるから、その時分既に傳來してゐたことがわかる。源氏物語、大和物語、古今著聞集、今昔物語によると貴族の間には盛に弄ばされ、賭物することが行はれ、碁聖と呼ばれる寛運が宇多院と圍碁して金の枕を得たことが見えてゐる。その後武人の間にも行はれてゐた。○明かし暮らす——夜を明かし、日を暮らす意で、つまり毎日々々をすごしてゆく人をさす。○四重——次の五逆と共に佛教では大罪としてゐる。四重罪の略。淫戒、盜戒、殺人戒、大妄語戒の四戒を犯すものをいふ。○五逆——殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧の五つの大罪。○或聖——聖僧のこと。聖(ヒジリ)は、單に僧のことをいふが、

ここは聖僧即ち高僧の意ととるのがよい。○耳にとどまりて——それを聞いてから、何時までもそのことを記憶してゐることをいふ。○いみじくおぼえ侍る——そのいふことが、いかにも立派な敬服すべきことだと思ひます。「侍る」は正徹本には「侍り」とある。

第百十二段

明日は遠國へ赴くべしと聞かむ人に、心閑になすべからむわざをば人いひかけてむや。俄の大事をもいとなみ、切に歎くこともある人は、他の事聞入れず、人の愁、喜をもとはす。とはすとて、などやと怨むる人もなし。されば年もやう／＼たけ、病にもまつはれ、況や世をも遁れたらむ人、又これに同じかるべし。

語釋 ○遠國——遠方の國。文段抄や大成にトヲキクニとあり、正徹本に「とほき國」とあるから、かくよんで置く。即ちランゴクのよみによらない。○赴くべしと聞かむ人——そのやうなことをいふのを、こちらで聞く人の方を主とした書きかたである。つまりここは「赴くべしと言はむ人」といふことである。○心閑になすべからむわざ——心を落着かせてゆつくりとしなければならぬやうな事柄。○人いひかけてむや——誰か或人が、旅立たうとする人に對して言ひかけよ

口譯 明日は遠方の國へ旅立たうとする人に對して、ちつと落着いてしなればならぬやうな事を、誰が言ひ掛けるでありませう。誰もそのやうなことはしない。又何か突發的な病死葬送の如き大事を行ふとか、或はひどく悲歎に沈んでゐるとかいふ人は、それ以外の

事は耳を傾けて聞きもせず、他人の愁や喜びをも見舞はない。見舞はないからといつて、なぜ見舞はないのかと恨む人もない。こんな譯であるから、年も段段と老いた人や、いつも病氣勝ちな人や、或はまして世を遁れて佛門に入つたやうな人は、やはり亦これと同じ事で、世間並につきあひなどをする必要は少しもないのである。

うか、言ひかけることはあるまい。「人」とは、誰か或人をさす。○俄の大事をもいとなみ——何か突發的に起つた重大事を處理する。即ち病死葬送の如き突發的な大事をさすものと思はれる。「いとなみ」は、處理するとか、處置する、行ふこと。○切に歎くこともある人——ひどく悲歎することのある人。「切に」は、ひどく、はげしくの意。○他の事を聞入れず——「他の事」とは、上文の突發的の一大事や悲歎してゐる事以外の事をさしてゐる。「聞入れず」は、たとひ他人が何を言つてもそれに耳を傾けない。○人の愁喜——他人の憂ひ事や喜び事をさす。「愁喜」は、文段抄には、「シウキ」大成本には、シウキ又ナゲキヨロコビと假名がついてゐるが、野植に「ウレへ、ヨロコビ」と假名がつき、正徹本、傳幽齋本には、「うれへ悦」とあるから、それに従ふ。○とはすとて——尋ねない。見舞をしない。○とはすとてなどやと——これは「とはすとて、などやとひ給はぬ」との意。見舞はないからといつて、なぜ見舞ひなさらぬのかとの意。「などや」は、どうして、なぜの意。○年もやう／＼たけ——だん／＼と年も取り老人となり。○病にもまつはれ——自分が病氣につきまとはれることで、始終病氣勝ちであるのをさす。「まつはる」は「まつふ」といふ四段の動詞が受身になつてゐるので、つきまとはれるとか、からまられるといふこと。○況や——老年になつたとか、病弱であつた場合にでも、世間との交際などはしなくてもよいのである。故にましてや世を遁れて出家した者などは、猶更世間との交際などはしなくてもよいといふのである。○世をも遁れたらむ人——俗界から縁を切つた人、即ち遁世した人。出家した人。佛門に入つた人。上文の「年も」といひ、「病にも」といひ、「世をものがれ」といつたのは、三つ共に對立した形になつてゐるので、同一の人間が三つの場合を持つてゐると

いふのではない。○又これに同じかるべし——この「これ」は、文初の「明日は遠國へ云々」から、「などやと怨むる人もなし」までのところをさしてゐる。即ち、年もやう／＼たけた人とか、病にまづはれてゐる人とか、世をも遁れたらむ人とかいふやうな人々は、明日遠國へ旅立たうとする人や、俄の大事をいとなむ人や、切に歎く人などと同様に、世間との交際をしなくても、何とか非難されることはあるまいといふのである。

人間の儀式、いづれの事かさがりがたからぬ。世俗のもだしがたきに随ひて、これを必ずとせば、ねがひもおほく、身もくるしく、心のいとまもなく、一生は雑事のざいじ小節せうせつにさへられて、空しく暮れなむ。日暮れ途遠し。吾が生しょう、既に蹉跎さたたり。諸縁しよえんを放下はうげすべき時なり。信をも守らじ、禮義をも思はじ。此の心をも得ざらむ人は、物狂ものぐるひともいへ、うつつなし、情なさけなしとも思へ。そしるともくるしまじ、譽ほむとも聞き入れじ。

語釋 ○人間の儀式——世間一般の規定的な行事をさしてゐる。即ち年始、中元、寒暑時の往訪の如きより、冠婚、葬祭などに關する禮儀をいふ。つまり、普通の世のおつきあひをさしてゐる。○いづれの事かさがりがたからぬ——どの事か避けにくくなからうか。即ち何も彼も皆避け難いものである。○世俗のもだしがたきに隨ひて——世間の習はしといふものは、可なり面倒なもので、

口譯 世間のおつきあひは、どれ一つとして避けにくいものはない。そこで世間普通のやうにして、それは黙して居られぬといふ習はしに従つて、どこ／＼までもそのおつきあひをやつて行くといふことになる、自然にあれこれと欲求や願望することも多く、從

つて身體も忙しくなつて苦しくなり、心忙しくて靜かに落着く暇もなく、自分の生涯はつまらぬ義理立ての爲めに妨げられ、つまらなく終つてしまふ。自分は日の暮れたやうに老衰して餘命も幾何となく、理想にはまだ前途遠のきまである。斯く吾が生涯は既に時を逸し、志を失つて、進むこともなくとぼとぼとつまづき失敗してゐる。今こそ世俗の萬事のかかはりを放棄すべき時である。もはや

どうもうつちやつておくといふわけにも行かないのにつれての意。「世俗」は世のならしをいふ。「もだしがたし」とは、黙つては居られない。即ち打捨てて置かれない。「隨ひて」は、それに従つてといふことで、「ままた」と同じく、何々につれてといふことになる。○これを必ずとせば——「これ」は、上文にある人間の儀式をさす。「必ずとせば」は、きつと爲し遂げなければならぬとすれば。○ねがひもおほく——ああもしたいといふ願望や欲求が多くなること。○身もくるしく——あそこの御見舞に行かねばならぬ。こちらのお祝ひにも行かねばならぬ。こちらの會合にも出ねばならぬ。又これ／＼の用事にも行かねばならぬといふことになり、身體が靜かに休まる暇がなく、従つて身體を苦しめることになる。○心のいとまもなく——あれやこれやと世の中の雑事に心を使ふので、氣忙しくしてゆつたりと心の落ちつくことがない。○雑事のざいじ小節——「雑事」は、つまらぬいろ／＼な事柄。「小節」は、些細な節義のこと、で、世上のくだらぬ義理をさす。○さへられて——ささへられて。さまたげられて。「さふ」は、障ふと書き、下二段の動詞。それに受身の助動詞「らる」がついたものである。「さふ」は「ささふ」と同意にして、せくとかさまたげること。「さへられて」は、正徹本や傳齋本には、「まづはれて」とある。○日暮れ途遠し——「日暮れ」は、年既に老いたること。「途遠し」とは、修行未だ成らず、期待する所の前途なほ甚だ遠きことをいふ。○吾が生既に蹉跎さたたり——「吾が生」は、「吾が生涯」のこと。「蹉跎」は、つまづきて進み得ざること。不遇にして吾が望みを爲し得ないことをいふ。自分は今も年老いてしまひ、餘命幾何もないのに、已の志望は爲し遂げられず、とう／＼一生を不遇で終らなければならぬと歎いたのである。この句については、佩文韻府

世上の約束をも守るまい、禮義をも眼中に置
くまい。この萬事を放
棄して、道のために一
途に邁進するといふ意
味の分らないやうな人
は、吾を氣狂だともい
へ、本心を失つた喪心
者とも、薄情者とも思
ふなら何とでも思へ。
吾は人が誘つても苦に
はしまい。譽めてくれ
ても耳に入れない。も
はや世間の毀譽褒貶な
どはどうでもよい。

などには、「唐書白居易傳に、日暮而途遠、吾生已蹉跎」とあげてゐるが、首書本や、句解、文
段抄、大成本には、「諸上善人詠白居易傳に、日暮而途遠、吾生已蹉跎」とあるのを擧げてゐる。
○諸縁——色、聲、香等、總て心識の對象たる世事をいふ。即ち、吾人の心を動かす、さまざまの
の外界の事物、事件をいふ。第七十五段の「縁」の條參照。○放下すべき——なげすてるべき。
拋棄すべき。第二百四十一段の「萬事を放下して」と同意である。○信をも守らじ——「信」は、
約束を履行することをさす。論語學而第一の「與朋友交、言而有信」の信である。信即ち約
束をも守るまい。即ち道を得るためには、世俗の小節などにかかはつて居られないからして、萬
事の交渉を放棄して、約束などは守るまいといふのである。「じ」は、根據ある意志にての打消
推量の助動詞。○禮義をも思はじ——世上の禮義のことなどは考へまい。○この心を得ざらむ人
は——この意味のわからぬ人。道を爲し遂げるためには、信をも守るまい、禮義など眼中に置か
ないといふことの意味が分らない人は。○物狂ともいへ——氣狂つてゐる人と言ふなら言へ。○
うつつなし、情なしとも思へ——「うつつなし」とは、本心が無い。喪心してゐる。「情なし」
とは、思ひやがない。薄情である。即ち正氣の沙汰でない、薄情なやりかたであると思ふなら
思つてもよい。○そしるともくるしまじ——世人が何と言つて自分を誘らうとも、自分はそれを
苦にはしまい。○譽むとも聞き入れじ——前とは反對に、世人がたとひ自分をほめても、そのほ
める言を聞いて嬉しいとは思はぬ。

第一百十三段

口譯 よはひ四十歳を
越えた人が、好色めい
た事がたま／＼人に知
られずこつそりとある
のは、それはどうも仕
方がないことである。
然し、臆面もなく言葉
に出して、男女間の情
事、或は他人のさうし
た方面のことを言ひ戯
はむれるのは、實に不
似合で見苦しいことだ
ある。大體に於て、閉き
にくく、見苦しい事は、
老人が若い者の中にま
じつて、若い者を面白
がらせようとして物を
言つてゐることであ

四十にもあまりぬる人の、色めきたる方、おのづから忍びてあらむは、い
かがはせむ。ことに打出でて、男女の事、人のうへをもいひたはるこそ、
似げなく見ぐるしけれ。大かた聞きにくく見ぐるしき事、老人の若き人に
まじはりて、興あらむと物いひるたる、數ならぬ身にて、世の覺えある人を、
へだてなきさまにいひたる、貧しき所に酒宴このみ、客人に饗應せむとき
らめきたる。

口譯 よはひ四十歳を
越えた人が、好色めい
た事がたま／＼人に知
られずこつそりとある
のは、それはどうも仕
方がないことである。
然し、臆面もなく言葉
に出して、男女間の情
事、或は他人のさうし
た方面のことを言ひ戯
はむれるのは、實に不
似合で見苦しいことだ
ある。大體に於て、閉き
にくく、見苦しい事は、
老人が若い者の中にま
じつて、若い者を面白
がらせようとして物を
言つてゐることであ

四十にもあまりぬる人——四十歳を越した人。四十歳を昔から初老といひ、この年頃か
ら、人は老境に入るのである。「人の」の「の」は、「が」の意。○色めきたる方——好色の方面の
事。○おのづから忍びてあらむは——たま／＼好色めいた事があつても、それをこつそりと隠し
て、人にわからぬやうにして居るならばの意。「おのづから」は、たまたま／＼とか、稀にの意。「忍
ぶ」は、人に知れないやうにしてゐること。即ち隠して居ること。○いかがはせむ——どうしよ
うか、どうにも仕方がない。まあこつそりと隠して居るなら、それで構はない。○ことに打出で
て——言葉に出してしやべること。「こと」は、言の意。○男女の事——戀愛好色に關する事。
○人のうへ——他人の情事に關した事ども。○いひたはるる——言ひ戯れること。文段抄、首書、
大成、弘賢本、野槌などは、「いひたはるる」とあるが、光廣本、嵯峨本、傳幽齋本、正徹本に
は、「いひたはぶるる」とある。○似げなく見ぐるしけれ——その四十歳を過ぎた年には似合は

る。又、自分は身分低くつまらぬ身でありながら、世に名望高く評判よき人をごく親しい間柄のやうに言つてゐることである。又、貧乏な家でありながら酒盛りを好み、お客に御馳走しようとして、派手なもてなし方をするのである。

ないといふ感じがして見苦しい。○大方開きにくく見ぐるしき事——最初に言つた四十男の情事は勿論であるが、大體次にあげるやうな二、三のことも、同様に開きにくく、見苦しいことだといふのである。○興あらむとものいひたる——「興あらむと」は、「興あらしめむと」の意。若い人々を面白がらせようとして話してゐること。以下に……たる、……たる、……たる、……たる、とあるのは枕草子の筆法そのままである。○数ならぬ身——賤しい身分の者。つまらぬ者。○世の覚えある人をへだてなきさまにいひたる——世間で名望あり評判高い人を、いかにも親しいやうに、親密な間柄であるやうに言つて居ること。○客人に饗應せむと——お客に御馳走しようとして。「と」は、とての意。○きらめきたる——はでやかに華美なもてなしをすること。「きらめく」は、光り輝くことで、盛んに飾り立てることであるが、こははでなもてなし方をするにいふ。

第百十四段

口譯 今出川の大臣殿が、嵯峨へおいでになつた時に、有栖川の邊の、水の流れてゐる所で、牛飼のさい王丸と

今出川のおほい殿、嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに水の流れたる所にて、さい王丸、御牛を追ひたりければ、あがきの水、前板までささとかかりけるを、爲則、御車のしりに候ひけるが、「希有の童かな。かかる所にて御牛をば追ふものか」といひたりければ、おほい殿、御氣色あしくな

いふ男が、大臣殿の乗つてゐられる御車を走らせた所が、牛の足掻の水が、車の前板までさつと掛つた。それを見て、爲則は御車の後方にお伴をして乗つてゐたが、「さい王丸は、とんでもない奴である。このやうな水の流れてゐる所で、御牛を追ひ馳らせるといふ事があるものか」といつた所が、大臣殿は御機嫌を悪くして、「貴様が牛車を進ませることには、さい王丸よりすぐれてはよく心得てゐま

りて、「おのれ車やらむ事、さい王丸にまさりてえ知らじ。希有の男なり」とて、御車に頭をうちあてられにけり。この高名のさい王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。此の太秦殿に侍りける女房の名ども、一人はひざさち、一人はことつち、一人ははうはら、一人はおとうじとつけられけり。

語釋 ○今出川のおほい殿——「おほい殿」は、大殿と書き、大臣の尊稱である。この今出川の大臣については、壽命院抄に、「菊亭兼季公也。西園寺太政大臣實兼公の三男也」とあるので、その後の注釋書は皆これによつてゐるが、増鏡の「山の紅葉」には、この實兼の父、公相を「今出川のおほきおとど」と書いてあるから、この公相をさすものとした方がよい。兼季とすると時代が違つてくる。且つ公相の女孀子は今出川院と申し、龜山帝の後であつたのもこのためであらう。公相は文永四年四十五歳にて歿し、さい王丸と年代が合ふのである。○嵯峨へおはしける——嵯峨へ行かれた。嵯峨は京都の西郊、太秦から嵐山に至る迄の稱。昭和六年に京都市に合併された。「おはす」は、居られるといふ意であるが又、この段のやうに行かれるの意にも使はれる。

○有栖川のわたり——「わたり」は、あたりとか附近といふこと。即ち有栖川といふ川の近所といふこと。この有栖川は現存しない川であるので古注釋にもはつきりとしてゐない。文段抄には、「兩説あり、顯昭云、ありす川は齋院のおはします本院のかたはらに侍る小川なり。又云、ある人のいはく太秦より洪輪へまゐる道にある小河なり。此草紙に嵯峨へおはしけるにとあれば、後

い。然るにさい王丸を叱るとは、貴様爲則こそとんでもない奴だ」といつて、爲則の頭をおさへて、御車にぶつけなされた。この牛を使ふことについて評判のよきさい王丸は、太秦殿の召使で、殿の御召料の御牛飼であるのだ。さてこの太秦殿に仕へてゐた女房たちの名どもに、珍しい名がつけられてゐた、一人はひざさち、一人ははら、一人はおとうじとつけてゐられた。

の説の有巢河ここにはかなふべきにや」とある。さて筆者所蔵の古寫地圖「花洛往古圖」によると、有栖川といふ同名の川が京の北と西にある。北にあるのは堀川の上流にして舟岡山の東方を流れてゐて、舟橋といふ橋が架つてゐる下流を有栖川としてゐる。次に西にある有栖川は桂川の上流で渡月橋の下流にあたつて、東の方へ分れてゐる支流で、齋宮の野宮のあたりを流れてゐる川に有栖川といふのが載つてゐる。本書にいふ有栖川はこれをさしたものと思はれる。○さい王丸——これは牛飼の名前である。牛飼(牛飼童の略)とは、必ずしも少年ばかりとは限らず、三四十歳の者もあつたが、すべて頭は垂髪にして子供らしい形をして居た。又、名前は必ず「何々丸」といつて、「丸」の字をつけたものであつた。駿牛繪詞に、「後嵯峨院は末代の明王、何事も昔に恥ぢず、めでたき花やかなる御事にておはしましたしに、御隨身、御牛飼までも、すぐれたるともがら林をなして侍りき。寛元四年御脱履のはじめ、西園寺太政大臣殿(公經)もとより牛馬の御沙汰世にすぐれておはしましたければ、御隨身、御牛飼も彼御方よりめし進ぜられ侍りき。孫太郎、鷹法師、賽王丸等也。是等かたへに超えたるともがらにて侍りき」と。ここにいふ「さい王丸」は多分、この賽王丸であつたと思はれる。當時然も下賤の者の名であるから、その呼ぶ發音があるのみで、字で書くことは重んぜられなかつたから古注釋書の如く、齋王丸とも書いてゐる。○御牛を追ひたりければ——水の流れてゐる所に來て、牛が躊躇して進まないで、牛飼が牛の尻を鞭で打つて追ひ立てたのである。すると牛は驚いて水の中にさぶりと入つたのである。○あがきの水——「あがき」は、牛や馬が前脚で地を搔くやうにすること。ここは水の流れてゐる所で追はれたので、その拍子に足で水を搔いた爲め、水がサツト散つたのである。○前板——

牛車の屋形の前に横に渡した板をいふ。○ささとかかりけるを——「ささと」は、水の軽くしげく注ぎかかるさまにいふ。○爲則——お供の人の名であるが、いかなる人物かは不明である。○御車のしりに候ひけるが——御車の後の所に乗つて居たが。「しり」(尻)とは、車の後の所をいふ。○希有の童かな——とんでもない奴だ。けしからぬ奴だの意。「希有」は、まれにある、珍しいの義からして轉じて、けしからぬ、とんでもないとの意となる。牛飼は年を取つても丸額で、髪を長くして童のやうにしてゐたので、年齢に關はず、一般に「童」と呼んだのである。○かかる所にて御牛をば追ふものか——このやうな水のたまつてゐる道で牛を追立てるものであるかと、なじりとがめたのである。○御氣色あしくなりて——今出川の大巨殿(公相)が、御機嫌がわるくなつて。○おのれ車やらむこと——「おのれ」は、汝とか、貴様といふのにあたる。卑しめていふ第二人称の代名詞。「車やらむこと」は、牛車を動かして進めること。つまり車を操縦すること。○さい王丸にまさりてえ知らじ——牛車を動かして進めることについては、汝はさい王丸以上に知り得ないであらうの意。然るに小言をいふとは何事だとの意。○希有の男なり——前に爲則がさい王丸を「希有の童かな」というたその言葉をそのまま繰返して、「さういふ貴様爲則こそけしからん男だ」と言はれたのである。○御車に頭をうちあてられにけり——爲則の頭をおさへて、車のどこかへコツンとぶしつけられたのである。「あてられ」の「られ」は、大殿のなされた動作に對する兼好の敬稱である。○この高名のさい王丸——「高名の」は「有名な」といふこと。今出川の大巨がこれ程に言はれたそれ程まで有名な牛飼の名人さい王丸はの意。○太秦殿の男——「太秦殿」については、壽命院抄に「關白道隆公の孫流也。信清公也。號坊門、

又號「太秦内府。」とあつて、後の注釋書は皆これによつてゐるが、この人とすると尊卑分脈に、「建保三年二十八出家、同四年三十四薨、號「太秦内府」とあつて、さい王丸と時代が合はない。「男」は召使はれる男といふこと。正徹本には、「うづまさのおとこ」とある。殿の字がない。○料の御牛飼ぞかし——「料」は召料の意。即ち太秦殿の召料の牛を飼ふ牛飼だといふこと。さて橋本一氏は新註つれん草に於て、ここを「男料の牛飼」とよみ、男子乗用専門の牛飼の意かといひ、沼波氏は、「天子の御料牛を飼ふもの」といつてゐられるがいかと思ふ。○太秦殿に侍りける女房の名ども——太秦家に使はれて居た侍女どもの呼名である。前文が、正徹本は「太秦の男」とあるが、するところの文が變になる。やはり正徹本は誤脱であつて、殿の字があつたものである。○ひざさち、ことつち、はうはら、おとうじ——これは文段抄によつて書いて置いたが、諸本によつて假名には多少の異同がある。いづれも牛に關係のある名のやうに見られてゐるが意味は不明である。或は全然牛に關係なくして、女房どもにこのやうな奇妙な名を好んでつけたのかもわからぬ。参考のために大成本に擧げてゐる諸説をあげると、「膝幸とは牛はひざのつよきがよきなれば、ひざさちと云也。さちは幸なり。よきこころ也。牯種はこつてい也。男牛也。つちはふとく丸くして種はやうなるがよき心なり。(盤) ことづちは蹄をほきにしてたつしやなる牛を云。(説) 胞腹とは牛は腹の大きなるがよければ、大きなる腹と云心なり。をと牛は乙牛也。(盤) 牛は始めに生るより後に出生するを用いるなり。(説) 今武士の名馬の奔走あるがごとく、いにしへの公家衆にはよき牛を御祕藏ありしと見へたり。太秦殿は殊に淺からず牛をもてあそび給ふ故にや、めしつかはる女房の名まで、牛になぞらへて付玉ふ成べし。(貞)」とある

が、句解に、「太秦殿の名をいひ出で、その次手にうづまさどのにめしつかはれし女房の名、ことやうなりしを書きつらね、次の段に、いろおし、梵字、漢字などの異名、異行の者をしるさん爲の張本とし、又その次の段にいたりて萬事に付異名をこのむはよからぬ事也と、はじめて其意趣を吐露せる也。段うつりの下心如し此、眼をつけて見るべき事也とぞ」とあるのは、正しき見方と思はる。

第百十五段

口譯 宿河原といふ所で、ぼろ／＼が澤山集つて、九品の念佛を申して居つた所が、そこへ他から入つて來たぼろ／＼が、「若し此の中にいろをし房と申すぼろがおいでになりますか」と尋ねたところが、その集つてゐたぼろぼ

宿河原といふところにて、ぼろ／＼おほくあつまりて、九品の念佛を申しけるに、外より入來るぼろ／＼の、「もし此の御中にいろをし房と申すぼろやおはします」と尋ねければ、其の中より、「いろをしここに候。かくのたまふは誰ぞ」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師ながしと申しし人、東國にていろをしと申すぼろにころされけりと承りしかば、其の人にあひ奉りて、恨み申さばやと思ひて尋ね申すなり」といふ。いろをし「ゆゆしくも尋ねおはしたり。さる事侍りき。ここにて對面し奉らば、道場をけがし侍るべし。前の河原へまゐりあはむ。あなかしこ、わ

ろの中から、「いろをし
はここに居ります。斯
く仰せられる貴殿はど
なたでありますか。」と
答へると、「しらす梵字と

申す者である。私の師
匠の斯く／＼と申した
人が、東國にているを
しといふぼろに殺され
たと聞きましたから、
そのいろをし房にお逢
ひ申して、お恨みを申
したい（仇打ちをした
い）と思つて、お尋ね
申すのである」といふ。
するといろをし房は、
「それはまあようこそ
尋ねておいで下されま

きざしたち、いづかたをも見つぎ給ふな。あまたのわづらひにならば、佛
事の妨に侍るべし」といひ定めて、二人河原へ出であひて、心ゆくばか
りにつらぬきあひて、共に死ににけり。

語釋 ○宿河原——壽妙院抄に「津の國にあり」といひ、攝津名所圖會(五)にも、宿河原につい
て曰く、「宿久莊しほくのしやうにあり、延喜式、和名類聚等に出づ。元龜年中、羽柴筑前守秀吉公の御陣所な
り。宿河原は川邊、武庫、八田郡にもあり」といひ、太平記卷八、「摩耶合戦事、附酒部瀬河合
戦事」の條に、「赤松は手負生捕の首三百餘、宿河原に切懸けさせて、又摩耶の城へ引返さんと
しけるを云々。その夜やがて宿河原を立て、路次の在家に火をかけ云々」とある。古來の注釋書
はいづれもこの攝津國の宿河原としてゐるが、武藏國桶樹郡登戸村の大字に宿河原の地名がある。
小田急の登戸驛の附近にあたる。恐らくここにいふ宿河原は、武藏國の宿河原をさすものと考へ
られる。本段の「おのれが師なにがしと申しし人、東國にているをしと申すぼろに殺されけり」と
承りしかば、其の人にあひ奉りて、恨み申さばやと思ひて尋ね申すなり」とあるのによつても、
武藏國あたりの東國なる宿河原であつたことが考へられる。○ぼろ／＼——本文中にある通り、
單にぼろ(暮露)ともいひ、又、「ぼろんじ」「梵字」「漢字」ともいふ。語義は、嬉遊笑覽に、
「ぼろ／＼とは、徒然草に梵論と云ふ名のぼろ見えたれど、それよりの名にもあるべからず、今
もいふ詞にて、物の朽ちやぶるやうの事にいへるこれなり。今物語に、門の下に法師のまこと

した。そのやうな事が
ありました。然し此處
でお目にかかつては、
神聖な修行の場所を汚
すであらう。前の河原
に出でてお逢ひいたさ
う。どうぞ決して、傍
輩違よ、どちらをも御
援助下さるな。大勢の
迷惑となつては、佛事
の邪魔でありませう」
と、しつかりと言ひ、
固く約束をして、二人
は河原にて思ふ存分さ
しちがへて、共に死ん
でしまつた。

に怪しげなるが、頭はおつかみにおひて、紙ぎぬのぼろ／＼とある打着たる、暮露と書くは假名
なり」とあるが宜しいと思ふ。野植に、「ぼろ／＼の草紙(筆者注、明恵上人「高倉天皇の承安
三年に生れ、六十歳にて寂す」の作)と云一卷あり。虚空房と云もの身のたけ七尺八寸、力つよ
し、繪かき紙衣に一尺八寸の太刀をはき、ひるまきの八角棒をよこたへ、一尺五寸の高足駄(ダカ
アシダ)をはき、髪ながく、色くろくして、ぼろと云ものになり、一人の美女を妻とし、同行三
十人諸國をありくといへり。其後に薦僧(コモサウ)と云僧とも見へず、俗とも見へず、山伏と
も見へず、刀をさし、尺八をふき、背に蓆を負ひ、道路をありき人の門戸に立て物を乞ひもらう。
これぼろ／＼の流れなりと云ひつたへたり」とあるのによつて大體その風俗がわかる。要するに
後世の虚無僧の類、武士の果などで、僧とも山伏ともつかず、女をつれ、髪を半ば切り、尺八を
吹く、一種の乞食僧だが、任侠で、京阪より東國に多く住んでゐたやうに思はれる。○九品の念
佛——句解に、「九品の淨土に生れん爲の念佛成べし」とあるやうに、阿彌陀佛の説いた極樂淨
土の往生に九品の階級があつて、それからその淨土を九品の淨土といふ。その淨土を欣求する爲
めの念佛を「九品の念佛」といふやうになつたといふ一説と、又一説には、九品往生の階級にか
たどつて九度調度をかへて念佛する事ともいふ。即ち参考本に、「九品の念佛といへる事は、い
かさま子細あるべし。法照禪師の五會の念佛といふも、五會法事讚を見侍れば平上去入をわかち
て、五度調子をかへて稱名する事也。今の世の淨土宗の念佛に、緩急のはかせを申も、其ながれ
とかや。されば、此九品念佛も彼暮露の宗門にて、九品往生の階級にかたどりて、九度調子をち
がへて、念佛する事にては有まじくや云々」とあるのはそれである。○外より入來るぼろ／＼の

——ぼろどもが集つて念佛を唱へて居る所へ、外から又一人の暮露が入つて来たそのぼろがの意。「の」は主格の助詞。「入来る」は、「入來たる」とよむべきであるかも知れぬ。○此の御中——大成本には「御」の字なし。○いろをし房——これは文段抄の字による。大成本には、「いろおし坊」とあり、下文には「いろをし」となつてゐる。○いろをし房と申すぼろやおはします——いろをし房といふぼろは居られますか。○誰そ——文段抄、正徹本には單に、「誰」とのみあるが、然し多分「タツ」とよんだものと思はれる。誰ぞの義である。○おのれが師なにがしと申し人——「おのれが師」は、拙者の師匠といふこと。「申しし人」は、傳幽齋本、正徹本、光廣本、大成本、文段抄は、「申し人」とあるが、「申しし人」とよむべきであらう。句解本、正徹本には、「申す人」とある。○東國にて——この語によつて、しら梵字はもと西國のもので、師の殺された譬をむくゆる爲に、わざ／＼武藏まで来たのであらう。虚無僧（鷹僧）の本據は、西國では京都の妙安寺、東國では下總小金の一月寺、武藏青梅の鈴法寺であつたが、暮露の時代には、彼等は多く東國に住んでゐたやうである。○いろをしと申すぼろにこそされけり——いろをしと云ふ暮露に殺された。延徳本には、「いろをしといふぼろに」とある。○其の人にあひ率りて——師匠を殺した人、即ちいろをしといふお方にお逢ひして。○恨み申さばや——おうらみを申したい。うらみを晴したい。延徳本「恨を」とある。○ゆゆしくも尋ねおはしたり——「ゆゆしくも」は、よくもまあとよるこびほめた語である。仇にめぐり逢ひながら、遁げも隠れもせず、むしろそれを喜んでゐる所に、俠客的のさまがあらはれてゐる。「尋ね」は、おとづれの意。○さる事侍りき——そのやうに、貴殿の仰せられるやうに、確に殺したことがありました。○對面

し奉らば——お目にかかるならば。ここで出逢つて勝負を決すること。○道場をけがし侍るべし——「道場」は、佛道を説き、佛事を修める所をいふ。即ち修道場の意。佛事を營む清淨なこの場所、お互に決闘して血を流すやうなことがあつては、ここを汚がすことになる。○前の河原へまゐりあはむ——前の河原へ行つて、其所で決闘をいたしませうといふこと。「まゐりあふ」は、「行きて逢ふ」ことを丁寧にいふものである。「あふ」は、やはり勝負を決することをいふ。○あなかしこ——決して。ゆめ／＼。「あな」は、嗚呼で、「かしこ」は「畏し」で、ああ、恐れいりますがの意。ここでは願はくば決してといふことで、左右に對して制止してゐる。○わきざしたち——傍輩とか、同行衆といふやうな意味の語。この語はあまりない珍しい語である。○いづかたをも見つぎ給ふな——「いづかたをも」は、いろをし房と、しら梵字の二人の中のどちらをもの意。「見つき給ふな」は加勢なざるな。即ちどちらをも助け給ふなと援助無用と斷るのである。○あまたのわづらひにならば——皆さん方多くの人達の御迷惑になるならばの意。「わづらひ」は迷惑の意。○佛事の妨に侍るべし——佛道修業の邪魔になります。○いひ定めて——しつかりと言つて、堅く約束して。この「いひ定めて」は、「前の河原へ参りあはん云々」から、「佛事の妨に侍るべし」までの詞に掛つてゐる。○心ゆくばかり——思ふ存分に、心の満足するまで。○つらぬきあひて——刺し通し合つて。○死ににけり——文法上正しくは、「死にけり」とあるべきところである。大成本や傳幽齋本は、「死にけり」とあるが、正徹本や光廣本には、「死ににけり」とある。

口譯 このぼろ／＼といふ者は、昔はなかつたのだらうか。近頃の時代に、ぼろんじ、梵字、漢字などといった者が、その起り始めてあつたとかいふことだ。このぼろ／＼は、俗世を捨てたやうであつて、然も執念深く、佛道を願つてゐるやうであつて、然も喧嘩刃傷を専らとしてゐる。實にほしいままな振舞であり、殘虐な有様でありながら、死を輕んじて、少しも死といふことに拘泥せざる點が、勇ましく末練がましいところがなく、さつぱりしてゐると思は

ぼろ／＼といふ者、昔はなかりけるにや。近き世にぼろんじ、梵字、漢字など云ひける者、其のはじめなりけるとかや。世をすてたるに似て、我執ふかく、佛道をねがふに似て、鬪諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして、少しもなづまざるかたのいさぎよくおぼえて、人の語りしままに書きつけ侍るなり。

語釋 ○近き世——文段抄、大成本には「近世」とあるが、傳幽齋本には、「近き世」とある。近世と書いても、近き世とよむべきであらう。ここは室町時代をさしてゐる。○ぼろんじ、梵字、漢字——兼好當時は「ぼろ／＼」といひ、古くは、「ぼろんじ」(梵論字)といひ、梵字などともいひ、遂に彼等の服裝よりして、襦袢の意の「ぼろ／＼」となつたものと推定される。次に「漢字」といふのは一寸をかしいが、これは梵論字、梵字などと漢字をあてて言つたといふ意であるかも知からぬ。○世をすてたるに似て我執ふかく——俗世を捨てて出家したならば、何の執着もない筈であるのに、世を捨てたやうにして、その實は執念深いといふのである。○鬪諍を事とす——喧嘩ばかりしてゐる。「事とす」とは、そればかりを専らの仕事としてゐること。○放逸無慚——「放逸」は我儘勝手で、ほしいままなこと。「無慚」は、恥づべきことを恥ぢとしないこと。轉じて殘虐なことをいふ。ここは後者の意。○死をかるくして——死を輕んずること。即ち死を何とも思はないこと。○なづまざるかたの——「なづむ」は、とらはれる。拘泥することを

れて、人からこの話を聞いた通りに書きつけた次第である。

いふ。ここは死にとらはれないこと。○いさぎよくおぼえて——きれいで卑怯でないと思はれて。「いさぎよし」は、勇ましく末練がましい所のないこと。○人の語りしままに——人から聞いたその通りに。

第一百十六段

口譯 寺の名、又はその他のすべての物に、名稱をつけるのに、昔の人は少しも穿鑿をせず、ただありのままに平易に名づけたものである。然るにこの頃では、深く考案して、いかにも自分の才の働きをあらはさうとしたやうに聞える名前がつけてあるのが随分多くあ

寺院の號、さらぬ萬の物にも、名をつくる事、昔の人はすこしも求めず、ただありのままにやすく付けけるなり。此の比はふかく案じ、才覺をあらはさむとしたるやうに聞ゆる、いとむつかし。人の名も、目なれぬ文字をつかむとする、益なき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異説をこのむは、淺才の人の必ずある事なりとぞ。

語釋 ○寺院の號——寺の名前のこと。「號」は、ガウともよむが、ナとよむがよいかと思ふ。○さらぬ萬の物——寺院以外の他の何物でも。「さらぬ」は、しかあらぬで、さうでない。その外の。○求めず——強いて穿鑿をしない。何かよい名をつけようと、古典などの中から強ひてさがし出さない。○ありのままに——事實の通りに名をつけ、別にむづかしく考へてつけないこと。○やすく付けけるなり——平易に、手輕に名前をつけたのである。○ふかく案じ——どこ／＼ま

る。それは實に煩はしくいやなものである。人の名前でも、普通世に見馴れない字をつけようとするのは、つまらないことである。命名ばかりでなく、その他の何事も珍しい事を求めたり、普通と異つた説を好んだりするのは、才學の淺薄な人の必ずする事だと人はいつてゐる。

でも熱心に考へ工夫して。○才覺——才の働きのこと。名づける人が、自己の才能をあらはさうとして居るやうに思はれるのがある。○むつかし——わづらはしく厭だ。○目なれぬ文字をつかむとする——「目なれぬ文字」とは、普通にはあまり見馴れない文字をいふ。「つかむとする」は、「つけむとする」と同意。つけようとする、それはの意。「つかむとする」は、平家物語、妓王に、「或は妓一、妓二とつき、或は妓福、妓徳など附く者もありけり」の如く、四段の自動詞を、他動詞に通用した慣用である。○益なき事なり——無益な事である。つまらぬことである。○何事もめづらしき事をもとめ、異説をこのむは——何事でも普通と異つた珍奇な事を好み求めたり、普通と異つた説を好むものは。「何事も」といふのは、命名ばかりでなく、言語でも、動作でも、趣味でも何事なりともといふこと。○淺才の人の必ずある事なりとぞ——「淺才の人」とは、才學の淺薄な人。人のの「の」は、主格の意を示す「が」の意。「必ずある事」は、必ずする事といふ意。「なりとぞ」とは、兼好が自分の意見をわざと人の話のやうに書いたのである。「或人仰せられし」などあるのと同じ書き方である。

第一百十七段

口譯 自分の友達とするによくない者が七つある。一には官位高く

友とするにわろき者七つあり。一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒を好む人、五にはたけく勇める兵、六には虚言する人、七には欲ふかき人。よき友三つあり。一には物くるる

友、二にはくすし、三には智恵ある友。

身分のよい人。二には若い人、三には病氣がなくて身體の丈夫な人、四には酒を好み飲む人、五には勇猛にして心の勇んでゐる人、六にはうそを言ふ人、七には慾の深い人。善い友が三つある。一には物を呉れる友、二には醫者、三には智慧のある友である。

語釋 ○高くやんごとなき人——官位高く身分高貴な人をいふ。かかる人は、こちらが身分なきため、窮屈な思ひをしたり、詔ふやうになつていやであるから、友達とするには、わるき友であるといふのである。大體本段は論語季氏篇の、「孔子曰、益者三友。損者三友。友直、友諒、友多聞、益矣。友便辟、友善柔、友便佞、損矣」とあるのに做つたのである。○若き人——若き者には血氣の勇といふこともあらうし、又、年齢に於ても甚だしい相違があり、そのために思想や趣味についても懸絶する所あり、強ひて若き者と氣を合さうすると不愉快を感じるからである。○病なく身つよき人——無病頑健な人は、他人の病氣に對しても、又その他何事についても、同情や思ひやりが無いからである。○酒を好む人——「飲む」と言はずして、「好む」と言つたところの差異に着眼しなければならぬ。「飲む」は養生の爲めであるが、「好む」は亂に至るからである。第八十七段の「具覺坊」のやうになつたり、「第七十五段」のやうなことになるから、いけないと言ふのである。○たけく勇める兵——勇猛なる武士。暴虎馮河の勇に陥り易いからである。又、第八十段にもあるやうに、兼好は元來、武士といふものは好まなかつたやうである。或は、兵には優雅なところの少きを嫌つたのかもわからぬ。○虚言する人——兼好は第七十三段に、「げにしく、ところしくちおぼめき、よくしらぬよしして、さりながら、つま

あはせて語る虚言は、おそろしき也」とあるやうなことをさしてゐる。○くすし——薬師(タスリシ)で、醫者のこと。大切な人命を救つて貰はれるからである。又第二十段に、「唐の物は

薬の外はなくとも事かくまじ、第二百二十二段に、「醫術を習ふべし」、第二百二十三段に、「人皆病あり……醫寮を怠るべからず、薬を加へて四つのこと求め得ざるを貧しとす」とあるのと同一の趣旨である。「わろき友」の一つとして、「病なく身つよき人」を言ひ、「善き友」の一つとして、「くすし」をあげてゐるのや、前述の各段の語句から推察すると、當時の兼好は病弱であつたかと思はれる。

第一百十八段

口譯 鯉の吸物を食つた日は、鬢がぼさ／＼と亂れないといふことだ。鯉は膠にもつくものなので、ねばり氣があつて髪もそのために亂れぬものと思はれる。さて鯉だけは立派な魚であるため、天子の御前でも切られるの

鯉こひのあつもの食くひたる日は、鬢びんそそけずとなむ。膠にかにもつくる物なれば、ねばりたる物にこそ。鯉こひばりこそ、御前ごぜんにてもきらるる物なれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉きじさうなき物なり。雉、松茸まつだけなどは、御湯殿みゆどのの上にかかりたるも苦しからず。その外は心うき事なり。中宮ちゆうぐうの御方おんかたの御湯殿みゆどのの上のくろみ棚たなに、鷹かりの見えつるを、北山きたやま入道殿にふだうどのの御覽ごらんじて、歸らせ給ひて、やがて御文おんぶんにて、「かやうの物さながら其の姿にて、御棚ごたなにゐて候まをひし事、見みならはず、様さま悪あしき事なり。はかばかしき人のさぶらはぬ故ゆゑにこそ」など申まをされたりけり。

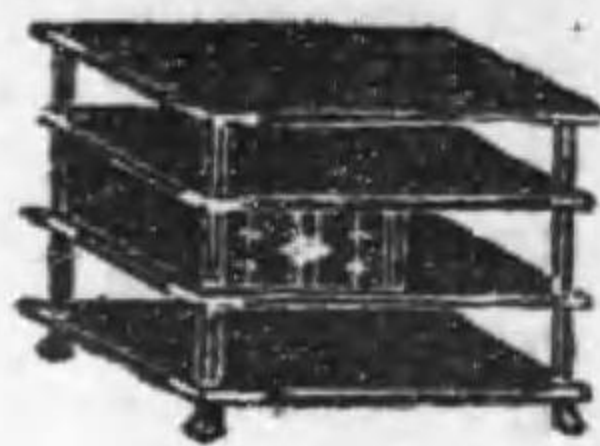
で、まことに尊い魚である。鳥では雉がならびないすぐれた鳥である。雉や松茸などは、御湯殿の上といふ室に懸つてゐても差支ひがない。それ以外の物のあるのは厭ふべき事である。中宮のお住ひの御湯殿の上の黒み棚に、雁かりが置いてあつたのが見えたのを、北山の入道殿が御覽になつて、自分のお邸にお歸りになると、すぐに御手紙てがみを使者に持たせて、中宮の所へ、「斯様の雁がそのままの姿

語釋 ○鯉のあつもの——「あつもの」は、羹の字を書く。熱物の義にして吸物のこと。ここは鯉の汁で、今いふ「鯉こく」のことである。○鬢そそけずとなむ——撫でつけてある鬢髪がほつれないといはれてゐる。「鬢」とは、頭の左右の側面の髪をいふ。ここでは頭髮の代表として言つてゐる。「そそく」とは、けばたつとか、亂れること。「なむ」の下に「傳へ侍る」などの語が省略されてゐる。○膠につくる物なれば——「膠」とは、獸皮、獸骨、魚皮等より製出したる粘着料。和名抄十五の膠漆具に、「膠音交、和名爾加波、……本草云、煮牛皮作之」とある。故に動物の皮を煮て作るの、ニカハといつたものであらう。魚の皮から取つたニカハはニベといひ、鰻といふ魚の鰻(プエ)を材料として作る。鯉の皮などもその材料となつたのである。鰻は和名抄に「爾倍、一云久知」とある。○ねばりたるものにこそ——「こそ」の下に、「あらめ」などの語が省略されてゐる。膠を作る材料に鯉がなるのであるから、鯉自身にねばり氣があつて、その影響で鬢も亂れないのだらうと想像したのである。○鯉ばかりこそ——鯉だけは。(他の魚は左様ではないが)支那では古來、鯉を魚の王と稱してゐた。○御前にてもきらるるものなれば——これだけは天子の見てゐられる御前で切られるものであるから。「御前」は、天子の御前をさす。鳥羽院の御所(白河殿)に崇徳天皇が行幸なされた時に、藤原家成卿が御前にて鯉の庖丁をなしたことが、古今著聞集十八に出てゐる。○やんごとなき魚なり——尊い魚である。○鳥には雉さうなき物なり——「魚では鯉」であるのに對して、鳥では雉が尊い鳥であるといふのである。「さうなき」は、雙無ふたなしきにて、ならび無なき、比類ひれいなき、無雙むさうの、第一の意。四條流庖丁書に、「如何なる白鳥成とも、上をすべからず。雉の鳥に必可かならず限」とある。○御湯殿の上——湯

で、お棚の上にあつた事は、これまで見た事がありません。如何にも見つともない事でありませう」など申されたのであつた。

沸し場のこと。(但し清涼殿のうちにある)。又、貴族の家にもあつた一室の名。湯など沸し、食膳などの器物を置き、女房之に候す。この語は辨内侍日記に多く見えてゐる。貞丈雜記十四に、「御湯殿の上といふは、是は御厨子(臺所の事)の近くに、御湯殿の上と云ふ座敷あり、是は吞湯を初として諸事に用ゆべき湯を沸し置く所也。湯をあび給ふ湯なども、此湯殿の湯を選び持行く也。湯をあび給ふ所を湯殿と云ふ。此湯あび給ふ所の湯殿と、湯をわかす所の湯殿とまざる故、湯をわかし置く所を湯殿の上と、上の字を付けて云ふ也。湯あび給ふ所、湯殿の上の間と云ふ心也。湯あび所と湯わかす所とは、御座敷はるかにへだたる事なれども、湯あび所の湯は、湯わかす所より運び入る故、湯わかす所は、湯あび所の上と云ふ心也。上といふは畢竟は本といふに同じ心なり。されば湯をわかす所を御湯殿の上と云ふ也。御湯殿の上は吞料の湯もわかす所なれば、御厨子所につづきてある故、御湯殿の上には、食物なども置く也云々。魚鳥の類は、鶯殿と云ふ所に納めおく物なれども、外より到來なり、又只今調味に使ふべき魚鳥は、御湯殿の上にも假りに置く也」とある。○かかりたるも苦しからず——「御湯殿の上」といふのが室名であるから、その室に懸けてあるのも差支ひないといふのである。「かかるとは、懸けてあること。」「苦しからず」は、差支ひがない。構はないこと。○その外は心うき事なり——前にあげた雉や松茸以外の物は、厭ふべきことである。宜しくないといふのである。○中宮——次にある北山入道殿の事から推察すると、常磐井相國實氏の二女、藤原公子の方とされてゐる。この方は後に東二條院と申した。建長八年女御となり、康元二年(廿六歳)にて中宮、正元十年院號、正應六年尼となり、嘉元二年七十三歳にて崩御。一説には常磐井相國の姉、姉子、(母は共に大納言隆衡

黒み棚



の女)ともいふ。この方は後醍醐院の後で、後深草、龜山兩院の御生母にあたり、仁治三年(十八歳)六月女御となり、八月中宮、寶治二年院號、文永九年尼となつて、正應五年六十八歳にて崩御あそばされた。○くろみ棚——黒棚(クロダナ)の敬稱。「厨子の類をいふ。クリヤダナの轉ぜしなるべし。室町時代以後諸家の婚禮に用ふるものなり」と和訓栞にある。又嫁入記には、「くろだなどは、ちがひだなのことなり。以上三重なり。上下は板をひたわたしにあるべし。中はたかくひきく違てこしらへ候。何にても、てくさの物をおく也。御厨子とは、この棚の下を四方塞ぎて、前戸をして、からじやうおろすやうしたるをいふなり」と。一説としては、文段抄に、「黒く色付たる棚なるべし。又貴人の御座には御厨子あり。其次の間に黒棚といふ物有也。それは雁などおくべき物にはあらず」とある。○北山入道殿——常磐井相國實氏のこと。第九十四段参照。「入道の」は、「入道が」の意。○歸らせ給ひて——實氏が中宮の御殿から、自分の邸にお歸りになつて。○やがて御文にて——「やがて」は、早速。「御文にて」は御手紙を書いて使者に持たせ送つて。○かやうの物——こんな雁の如き物を。○さながらその姿にて——雁そのままの姿で。雁の形がわからぬやうに料理してあるとか、又は何かで包んであるとかでなく、雁そのままの形であるをいふ。「さながら其の姿にて、御棚にゐて候ひし事、見ならはず」ところ、傳幽齋本は「さならはず」とある。○御棚にゐて候ひし事見ならはず——「ゐて」は、居つて。御棚の上に置いてあるのを、それが居たといふやうに書いたのである。「見ならはず」とは、今まで嘗て見た事がない。○様悪しき事なり——見つともないことである。○はか／＼しき人のさぶらはぬ故にこそ——「こそ」の下に「あらめ」などの語が略されてゐる。中宮の側近には、しつ

かりした者が附いて居ないから、こんなことになるのだらう。「はか／＼しき人」とは、物のわかつたしつかりした人をいふ。

第一百十九段

鎌倉の海に、かつをといふ魚は、かの境にはさうなき物にて、此の比もてなすものなり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚、おのれら若かりし世までは、はか／＼しき人の前へ出づる事侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍りしものなり」と申しき。かやうの物も、世の末になれば、上さままでも入りたつわざにこそ侍れ。

語釋 ○鎌倉の海に鯉といふ魚——鎌倉の海にゐる鯉といふ魚は、「鎌倉」は、今日も有名な神奈川県鎌倉である。「海に鯉」の書き方は、第五十二段の「仁和寺に或法師」と同じ書き方である。右参照されたし。○かの境——あの邊。即ち鎌倉地方をさす。○さうなきもの——この上もないもの。この上もなく結構なもの。雙無き物と書く。○此の比もてなす物なり——「もてなす」は、もてはやす。賞玩するの意。第七十八段に、「いひひろめもてなす」とあると同例。この「もてなす」は、「彼の境」の語を受けて、鎌倉地方と解すべきであらう。一説には、「近頃京

口譯 鎌倉の海にゐる鯉といふ魚は、あの鎌倉地方ではこの上ない結構なものとされてゐるもので、彼地の近頃の人の賞玩するものである。それも鎌倉の或老人の申した話では、「この鯉は、私達の若かつた時代までは、ちやんとした高貴の人の前に供へられる食膳に上ることはありません

でした。頭は下賤な家來どもも食はず、切つて捨てたものであります」といつた。このやうに嫌はれてゐた鯉も、世の末になると、上流社會の食用にまで用ゐられるものである。

都のあたりでも珍重する」といふのもある。○それも——それ程まで珍重する鯉もといふこと。○鎌倉の年寄の申し侍りしは——「年寄」は老人のこと、作者兼好が鎌倉にをかけて、この鯉を珍重するを見ても知つたに違ひないが、鎌倉の或老人が語つたのにはの意。○おのれら若かりし世までは——「おのれら」は、老人達が自らいふのである。傳幽齋本や正徹本には、「おのれらが」とある。○はか／＼しき人——ちやんとしつかりした人。ここでは身分や家柄のよい人をさす。○前へ出づること——食膳に上るやうなこと。○かやうな物も——こんな鯉の如きものも。○世の末になれば——世の末になると。斯ういふ末世澆季になると。○上さままで——上流社會。高貴な家庭。「さま」は方といふ意。所謂、上つ方のこと。ここは鎌倉地方に於ける高貴な方々をさすものである。○入りたつわざにこそ侍れ——入り込むことである。上流階級の食用になるをいふ。

第一百二十段

唐の物は、薬の外はななくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書きもうつしてむ。もろこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみとり積みて、所せくわたしもてくる、いとおろかなり。「遠き物を寶とせず」とも、又、「得がたき貨をたふとます」とも、文にも侍る

口譯 支那から産出さるるものは、薬以外は我が國に無くとも不自由もあるまい。書物などは、この日本に澤山

傳來して流布してゐるから、必要なときには書き寫すことも出来よう。支那船が困難危険な航路に、無用のものばかり澤山に積込んで、ぎつしりと一杯に運んで持つて来るのは、實に愚なことである。「遠方にとれる珍奇な物を賣としない。」とも、「得難い寶を尊ばない」とも、書物には書いてあるとかいふことである。

とかや。

語釋 ○唐の物——當時支那から日本に舶來された物。唐は、カラともモロコシともよんでゐる。下文に「もろこし船」とあるから、モロコシともよみたいが、正徹本には「から物」とある。○藥の外はななくとも事かくまじ——藥だけは仕方がないが、藥以外の物は支那の物が渡來しなくとも不自由はあるまい。これも兼好が病弱であつた爲かと思はれる。「なくとも」は正徹本には「みななくとも」とある。○書ども——これは支那の書物、即ち漢籍をさしてゐる。されど漢譯佛典も入つてゐる。○この國に——この日本の國に。○多くひろまりぬれば——漢籍が何部も流布してゐるから。○書きもうつしてむ——書き寫す事も出来よう。當時は印刷でなく、書寫した寫本が主であつた。○もろこし船——支那の船。勿論、支那の船ばかりでなく、日本の國の船で、支那から歸つてくる船をも含んでゐる。○たやすからぬ道——航海容易ならぬ道中。危険な航路。○無用のものどものみ——役に立たぬ無益のものばかり。當時賚澤品などを支那から取寄せたものであらう。○とり積みて——「とり」は接頭語にして、積込んで。○所せくわたしもてくる——「所せく」はぎつしりと澤山に。もとはあたり狭いくらゐにとの原義から、その數のおびただしきをいふ。「わたしもてくる」は、渡して来るのは、運んで持つて来るのは、海路であるから、「渡し」といつたのである。○遠きものを賣とせず——遠方に出來た珍しい物を賣として貴ばないといふこと。尙書卷七、旅獒篇に、「不賣遠物。則遠人格」の語を引いたもので、原文の意は、遠國の寶を望んで、その國人から奪ひ取るやうなことをせなければ、自然と遠國の民が來り

服従するものであるといふのを、兼好は前掲のやうな意味の語として轉用したものである。○得がたき貨をたふとまず——容易に求められないやうな寶物を珍重しない。老子卷一不尙賢章に、「不貴難得之貨。使民不盜。」とあるによる。○文にも侍るとかや——「いふ」の語を補つて解するとよい。文は書籍のこと。古書にも書いてあるとかいふことですの意。文は、さきの尙書や老子をさしてゐる。「侍る」は文法上は「侍り」の方が正しい。

第二百一十一段

口譯 家に飼育する物では、牛や馬である。その牛馬を綱で繋いで苦しめるのは可愛相であるけれども、この牛馬は家に無くては仕方がないものであるから、どうも仕方がない。犬は夜を番し、盜を防ぐ任務が、人間より優

る。

第二百一十一段

やしなひ飼ふものには馬、牛。つなぎくるしむるこそいたましけれど、なくてかなはぬものなれば、いかがはせむ。犬はまもり防ぐつとめ、人にもまさりたれば、必ずあるべし。されど家ごとにある物なれば、ことさらにもとの飼はずともありなむ。その外の鳥獸すべて用なきものなり。走る獸は檻にこめ、くさりをささぐれ、飛ぶ鳥は翅をきり、籠に入れられて、雲をこひ野山をおもふ愁、止む時なし。其のおもひ我が身にあたりて忍びがたくば、心あらむ人、是をたのしまむや。生を苦しめて目をよろこばしむるは桀紂が心なり。王子猷

つてゐるから、この犬は必ず家に居なくてはならぬ。然しこの犬はどこの家にも飼つてゐるものだから、殊更に求めて飼ふにも及ぶまい。右にあげた、牛馬、犬以外の鳥獸はすべて無用なものである。若しそのやうな鳥獸を飼ふとなると、走る獸は、檻に押込められたり、鎖をつけられたり、飛ぶ鳥は翼を切られたり、籠の中に入れられたりして、不自由であるため、自由の天地に憧憬して空の雲を慕

が鳥を愛せし、林にたのしむを見て逍遙の友としき。とらへ苦しめたるに
あらず。「凡そめづらしき禽、あやしき獸、國に育はず」とこそ文にも侍
るなれ。

語釋 ○やしなひ飼ふものに馬牛——家に養ひ飼ふものには、先づ馬と牛とがある。それは……といふ書き方になつてゐる。これは例の枕草子にある「木の花は梅。濃くも薄くも紅梅、櫻の花びらおほきに葉色濃きが枝細くて咲きたる云々」とある筆法である。○つなぎくるしむるこそいたましけれど——馬や牛を繋いで苦しめるのは、かはいさうであるが。「いたまし」は、ふびんだ、いたはしい、可愛相だといふこと。○いかがせはせむ——どうしようか、何とも仕方がない。やはり飼育する外に仕方がない。○まもり防ぐつとめ——夜を守り、盗を防ぐ任務。○必ずあるべし——家には必ずなければならぬ。○家ごとにある物なれば——犬はどの家にも飼育されてゐるものであるから。○ことさらにもとめ飼はずともありなむ——わざ／＼犬を求めて飼育しなくてもよからう。「ことさらに」は、わざ／＼。「もとむ」は、貰ふなり、買ふなり、何れにしても求め入れること。○その他の鳥獸——右の馬、牛、犬の三種を除いて、その他の鳥獸。○走る獸——野や山を走り歩く動物。○檻にこめ、くさりをさされ——檻箱の中に入れられ、鎖で身をつながれること。「こめ」は中に押込められること、「さされ」の「さす」は四段の動詞にして、もと錠をおろす義。「れ」は受身の助動詞で、上の「こめ」にもかかる。即ち「檻にこめられくさりをさされ」の義。○翅をきり籠に入れられて——これも前の句と同様に、「翅をきられ、籠

ひ、野山を思ふなげきの止む時はない。その可愛想な鳥や獸の思ひを、我が身に押しあてて見て、それが堪へがたいとしたら、同情ある人は、どうしてつながられたり、籠の中にある鳥獸を見て心を樂まうや樂まない。生物を苦しめて自分の目を樂ませるのは、かの殘忍暴虐な夏の桀王、殷の紂王の心と同じものである。王子猷が鳥を愛したのは、鳥が林に自由を樂しく遊んでゐるのを見て、自分がゆつ

に入れられて」の義。「翅をきられる」とは、籠に入れる代りに翅を切られるのである。籠は古はコとよみ、後世の場合カゴとよむ。○雲を戀ひ野山をおもふ愁——鳥は空の雲のあたりを飛びたくて雲を戀慕し、獸は野山を駈けたく愁ひ歎くこと。○其のおもひ我が身にあたりて——鳥獸が空中や山野を自由に活動したく愁ひなげいてゐる氣持を、自分の身に引きあててみて。○忍びがたくば——堪へられないやうであるならば。○心あらむ人は是をたのしまむや——「心あらむ人は、同情ある人。思ひやりのある人をいふ。「是」は、鳥獸を檻や籠の中に不自由なさまに飼育することをさす。「たのしまむや」は、さういふことを樂しみとしようかしないの意。○生を苦しめて——生物を飼育して、籠や檻の中に不自由に苦しめて。○目をよるこばしむる——鳥獸を眺めて人間が目よるこばすこと。勿論、耳を樂しませることも入つてゐる。○桀紂の心なり——桀紂のやうな暴虐殘忍な心である。支那夏の桀王、殷の紂王は殘虐な暴君であつた。○王子猷——支那の晋代の人。王徽之で、字は子猷といふ。王羲之の子である。風流を以て知られた人であつた。性、竹を愛し、己が住む處に必ず竹を植ゑ、「何可一日無此君」といつたといふ。それで竹のことを此君といふ故事が起つた。この王子猷が鳥を愛せし事は、和漢朗詠集、章孝標の竹詩に、「阮籍嘯場人歩月。子猷看處鳥棲烟」とあるによつたものとされてゐる。○鳥を愛せし——鳥を愛せしことは……次のやうであるの意。○林にたのしむを見て——鳥が林に樂しく遊んでゐるのを見て。(籠の中に飼育して樂しむのではない) この「林」は恐らく竹林であらう。○逍遙の友としき——逍遙は優遊してゐる貌で、のんきにゆつたりと散歩することや、或又、悠々自適、のんきな氣持で居ることもいふ。こは何れの場合にも心樂しませる友としたのである。

たりとした生活の友とした。決して鳥獸を捕へて苦しめたのでない。「一般に珍禽奇獸は國中に飼育せぬものだ」と書物に書いてあるのである。

○凡そ——すべて。大體。一般にの意。さてこの「凡そ」を、「」の中に入れるか、外へ出して置くべきかについている／＼論ぜられてゐるが、兼好自身の當時の考へとしては、「凡そめづらしき禽云々」となつてゐたと思ふ。○めづらしき禽あやしき獸——「めづらしき」も、「あやしき」もつまるところ同義にて、珍禽奇獸のこと。尙書卷七、旅獒篇に、「犬馬非其土性不畜、珍禽奇獸不育于國」とある句によつたもの。○文にも——「文」(フミ)は書物のことで、尙書をさしてゐる。「も」は強意の助詞。

第二百二十二段

口譯 人の才能は、四書五經等の書物の知識に明かで、孔孟聖人の教へを心得てゐるのを第一とする。次に手習ひが大切である。この手習ひは専門として修めなくとも、やはりこれを習ふべきである。

人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手かく事、むねとする事はなくとも、是を習ふべし。學問にたよりあらむためなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ人をたすけ、忠孝のつとめも醫にあらざるべからず。次に弓射、馬に乗ること、六藝に出せり。必ず是をうかがふべし。文武、醫の道、まことに缺けてはあべからず。これを學ばむをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味を調へ知れる人、大なる徳とすべし。次に細工、萬の要おほし。

それは學問する上に便宜があるからである。次に醫術を習ふがよい。自分の身を養ひ、人を助け、忠孝をつとめるのも、醫術でなくてはならぬ。次に弓術、馬に乗ることは、六藝の中にも出てゐる。必ず是れを一通り習ふべきである。以上文武醫の道は、本當にその何れを缺かしてもならぬ。是等の道を學ぶ人をば、無益なる事をす

此の外の事ども、多能は君子のはづる處なり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすといへども、今の世にはこれをもちて世を治むる事、漸くおろかなるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きにしかざるがごとし。

る人とはいはれない。次に食物は人間の大切なものである。よく調

語釋 ○人の才能は——人の修得すべき才智藝能は。○文あきらかにして——書物(四書五經の類をさしてゐる)によく通曉してゐること。○聖の教——聖は孔子、孟子の聖賢をさし、教は儒教をさしてゐる。○手かく事——「手」は、文字又は筆蹟のこと。つまり習字のこと。文字を上手に書くことをいふ。○むねとする事はなくとも——「むねとする」とは、專一とする。第一の大切な事とする事。文段抄に曰く、「初段にも手など拙からずはしり書きといへり。まづ手のつたなきは萬の用にもたちがたく、其人がらまでいやく押しはからるものなり。されどもこれを宗として、能書の名をとるほどにと思はば、一生ただ筆硯の間に暮れて、他の學問をも傍にすべきものなれば、只俗ならぬほどにこれを習ひて、學問のたよりとすべしとなり」と。○學問にたよりあらむためなり——學問をする上に便宜がある爲めである。主として書寫、起稿などの便宜をさしたものと考へてよい。○醫術——兼好はこの方面によほど心を用ゐてゐた。第一百七段の「くすし」、第二十段の「藥の外は云々」の如し。○身を養ひ人をたすけ——醫術を知れば、身の養生を知つて健康が保たれることをさす。「人をたすけ」とは人の病氣を治療し、人命を

理の仕方を心得てゐる人は、大きな利得とすべきである。次に細工の術を心得て置くべきである。是れは萬事の役に立つことが多い。この文武醫、調理、細工以外の事どもに、多能なるは修徳の君子の恥辱とするところである。詩歌に巧みであり、音楽にすぐれてゐるのは、高尚深遠の道であつて、古は人君も人臣もこれを重要視したといつてゐるけれども、現代の時勢に於ては、この詩歌、音楽をもつ

救助すること。○忠孝のつとめも醫にあらざれば有るべからず——人君に仕へるにしても、親に孝養をなすについても、醫術でなくても叶はない。小學に、「伊川先生曰。病臥於牀。委庸醫。比之不慈不孝。事親者亦不可不知醫。」とある。このやうな文句によつて書いた思想であるが、一寸極端な書き方になつてゐる。○弓射——ユミイとよむ。弓を射ること。「射」は也行上一段の動詞の連用形（名詞法）で、ここは名詞になつてゐる。○六藝に出せり——六藝の中に射、御、書、數、謂之六藝。とある。禮は禮儀、樂は音楽、射は弓術、御は馬術、書は書道、數は算數をいふ。○うかがふべし——様子を覗いて見るべし。即ち一通り學ぶべしとの意。○まことに缺けてはあるべからず——文武醫の三つはいづれも重要なものであるからして、本當にどの一つも缺けてゐてはならぬとの意。○いたづらなる人といふべからず——無駄な事をする人といふことは出来ない。○食は人の天なり——食物は人民の生命をつなぐ最も大切なものである。「天」は、萬物を支配する最高最貴なもので、「人の天」とは、人間にとつて最も大切なものの意。「食」は食物。「人」は人民の意。この語は、帝範、務農第十に、「夫食爲人天。農爲政本。」臣範、利人篇に、「夫衣食者、人之本也。人者、國之本也」と。又、史記の酈生陸賈列傳の酈食其傳に、「臣聞知天者。王事可成。不知天者。王事不可成。王者以民爲天。而民人以食爲天」とあるのによつたもの。「人の天」は、光廣本、寛文十年本、正徳本、弘賢本には、「人の命」とある。○よく味を調へ知れる人——料理の出来る人。よく食物の調味法を心得てゐる人。○大なる徳とすべし——徳は利益、利得の意。即ち、自他のために甚だ有益である

て治世の用に供し、天下を治めようとすることは、だん／＼と迂遠なことのやうになつてきた。譬へていふと、黄金は立派なものであるけれども、鐵の實益多きには及ばないと同様である。

といふのである。○細工——細い物を製作すること。文段抄には、「小刀の細工なるべし」とある。○萬の要おほし——いろ／＼の役に立つ事が多い。傳幽齋本、光廣本、嵯峨本、弘賢本、句解本、野植本等には、「萬の」が、「萬に」となつてゐる。○この外の事ども——前に掲げた文。武・醫・料理・細工以外の事をいふ。○多能は君子のはづる所——多方面の事に堪能であるのは、修徳の君子の恥辱とする事である。論語子罕篇に、「太宰問子貢曰。夫子聖者歟。何其多能也。子貢曰。固天縱之將聖又多能也。子聞之曰。太宰知我乎。吾少也賤。故多能鄙事。君子多乎哉。不多也。」とあるによる。○絲竹に妙なる——琴を弾じ、笛を吹くこと。つまり管絃のことを「絲竹」といつたので、ここは音楽の道にすぐれて居ること。○幽玄の道——幽微玄妙な道。深遠高尚な道。詩歌管絃の、俗を化し、風を和げ、幽微玄妙なことを意味す。○君臣これを重くす——儒教の思想では、詩歌音楽は單なる遊戯や藝術でなく、是によつて其の國の風俗なり、消長を觀察したものであり、又善き詩や音楽によつて民心や國俗を導導したものである。故に昔は君臣共に詩歌や音楽を重要視したのである。「重くす」は、重んずと同一にして、重要なものとする。○今の世には——前文の「詩歌にたくみに云々。君臣これを重くす」までのところは、古代にてはの意味にて、「詩歌に云々」の語の上に、「古代には」の語を補うて見ればよいのであつて、それに對して「今の世には」と言つたのである。○これをもちて——「これ」は、詩歌や音楽のことをさしてゐる。「もちて」は、「用ゐて」の意。即ち、詩歌や音楽をもちて、治道の具となすこと。かかることは、詩經の米子序や、禮記の樂記篇などに見えてゐる。○漸くおろかなるに似たり——漸次に迂愚なものとなつたやうである。「漸く」は、だん／＼と世の中の情

勢が變つて。「おろか」は、おろそかの意にして、迂愚である。役に立たぬ。迂遠である。効果が無いの義。「似たり」は、まあそのやうであるといふこと。○金はすぐれたれども鐵の云々——「金」は、詩歌、絲竹の道に譬へてゐる。「鐵」は、文武、醫、調味、細工の道に譬へたもの。即ち、詩歌、音楽を金とすれば、文武醫の道は鐵といへよう。いくら金がすぐれてゐても、實益の點から見てもやはり鐵より劣つてゐる。結局詩歌音楽を修めるよりは、文武醫の道に力を注ぐのが現代の急務であらう。

第二百二十三段

口譯 無駄な事をなして、尊き時間をすごすのを暗愚な人とも、間違つた事をする人ともいふべきである。吾々は國家のため、又は人君のために止むを得ずして爲さねばならぬ事が多い。それ等のことを爲して、なほ餘暇といふものは、いくらでもないと思はなければ

無益の事をなして時をうつすを、おろかなる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため、君のために、止むことを得ずしてなすべき事おほし。其のあまりの暇、幾ならず。思ふべし、人の身に止むことをえずしていなむ所、第一に食物、第二に着る物、第三に居る所なり。人間の大事、この三にすぎず。飢ゑず、寒からず、風雨にかされずして、閑に過すを樂とす。ただし人皆病あり、病にかされぬれば、其の愁忍びがたし。醫療をわするべからず。薬を加へて、四の事、求め得ざるを貧しとす。此の四

かけざるを富めりとす。此の四の外をもとめいとなむを驕とす。四の事儉約ならば、誰の人か足らずとせむ。

ならぬ。人間の身にとて、止むを得ずして爲す事は、第一に食物、第二に着物、第三に住所である。人間の重大なものはこの三つより他にはない。食物に飢ゑず、着物があつてこごえず、住居があつて風雨に害されずして、心静かにゆつたりとして、世を過すのは人生の楽しみである。但し、人間には誰も皆、病氣がある。病氣に害せられると、その愁へに堪へられない。だから醫藥の治療を忘れてはならぬ。即ち衣食住の三つに、今一つ薬を加へて、この四つの事を求め得なければ貧しいのである。この四つの事に不足がないのを富め

語釋 ○無益の事をなして時をうつす——何等役にも立たない事をして、時間をむだにすごすこと。○僻事——間違つたこと。道理に合はない事。○思ふべし——これは從來「其のあまりの暇、幾ならず思ふべし」とつづけ、「思ふべし」の上に「と」の字のあるものとして解釋した本が多いやうであるが、作者兼好の心境としては、「其のあまりの暇、幾ならず」と一先づここで切つてしまひ、更に倒置法の形として、「思ふべし」と書いて、ずん／＼と文を進めて行つたものであらう。さうしてどこから返るといふこともなくなつたものと思はれる。○いとなむ所——經營し行ふこと。すること。爲すこと。○此の三にすぎず——衣食住の三つで足る。この三つである。正徹本、傳幽齋本、光廣本、弘賢本、慰草には、「三に」が、「三には」となつてゐる。○飢ゑず——前の「食物」に飢ゑずの意。○寒からず——前の「着る物」(衣)に寒い思ひをせず。○風雨にかされずして——前の「居る所」(住居)があつて、寒さに害されないこと。「をかさる」は、害されることをいふ。○閑に過す——心静かにゆつたりとした氣持で目を送るのを樂しみにする。人生の名誉や官職のために心を苦しめないことをいつてゐる。○病にかされぬれば——病氣にかかること。○其の愁、忍びがたし——その病氣の悲しみには堪へられない。○醫療——醫術によつて、病氣を治療することをいふ。當時は藥草の煎じたのを飲むことであつた。○もとめ得ざる——求めても得られないこと。○此の四かけざる——衣、食、住、醫術に不足しないこと。

る人となす。この四つ以外の事を求め爲すを驕奢となす。この四つの事を求めるにつづましやかであつたら、どんな人でも不足を感じるといふ事はあるまい。

「缺けざる」は、不足を感じないことをいふ。○もとめいとなむ——「もとめ」は、得ようと爲すこと。欲しいと願ふこと。「いとなむ」は、爲すこと。計畫しなすこと。○儉約——つづまやかにすること。贅澤をしないこと。○誰の人か足らずとせむ——誰人でも足らないとしない。どんな人でも不足を感じることは無い。但し山岡元隣の増補鐵槌に、「此四つの物だに其用に達する程求めたる人をば、誰人か來りて事足らずとせんや」とあつて、求め得る人に對し、他の人と云ふ意になつてゐる。この山岡元隣の説も一説と思はれる。

第二百二十四段

口譯 是法法師は、淨土宗門に於ては恥しからぬ學僧であるが、少しも學僧らしい態度をなさず、始終ひたすら念佛をして、心靜かにゆつたりとして世を送つてゐた有様は、まことに望ましいことであ

是法法師は、淨土宗にはおぢすといへども、學匠をたてず、ただ明暮念佛して、やすらかに世を過すありさま、いとあらまほし。

口譯 是法法師——念阿上人の直弟子。内外の學に通じ、兼好と交り、和歌を能くし、新千載集、新後拾遺等にその作歌が出てゐる。ここに書いてあるやうな人物であつた爲めに、俗世にてはやかましく言はれず。従つてその俗稱、入寂年月日等は不明である。○淨土宗にはぢす——淨土宗に於ては誰にも劣らぬ學者であつた。「淨土宗」とは、源空上人の開祖するところである。○學匠をたてず——學匠とは、佛教で佛道を學習した人をいふ。「たてず」は標榜しない。態度をとらない。ふりかざさないなどの意。○明暮念佛して——明暮は、朝夕、日夜などと同じく、絶

えずといふ意。常に念佛しての意。淨土宗では念佛を専心にすれば、極樂往生をするといふ宗義であるからである。この「念佛」は別念佛といふので、阿彌陀佛を念するのである。○やすらかに世を過すありさま——心靜かにゆつたりとして日を送つてゐる有様。○あらまほし——望ましい。さうありがたい。

る。

人におかれて、四十九日の佛事に、或聖を請じ侍りしに、説法いみじくして、皆人涙をながしけり。導師歸りて後、聽聞の人ども、「いつよりも殊に今日はたふとく覺え侍りつる」と感じあへりし返事に、或者の云く、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなむ上は」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。

第二百二十五段

口譯 人に死なれて、四十九日目の法事を營んだ時に、或僧を招いたところが、その説法が大層うまく上手であつたので、その座に居た人々が皆感涙を流した。導師が歸つて後、その説法を聽聞した人たちが、「いつの説法よりも今日は特別に有難

人におかれて、人に死なれて。人に先立たれて。今日の語にすれば、「人が死んで」の意。ここは兼好自身の事ではなく、どこかにこのやうな事があつたのを書いたのであらう。○四十九日の佛事に——四十九日は中陰で、人の死後四十九日間であるが、ここは七七四十九日目、即ち中陰最終日の法事をいふ。四十九日は、ナナナメカとよむ。又シジフクニチとよむべしとの

く思はれました」と感じあつてゐると、その挨拶に、或者が、「何と申しまして、あれほど唐の狗に似てゐますからには、ありがたいのも尤もなことだ」といつたので、しんみりした感激もさめて、滑稽なことであつた。導師に對して、そんな褒めやうがあるものでない。

説もある。拾遺集物名に、四十九日をかゝして、「秋風の四方の山よりおのがし、ふくにちりぬる紅葉悲しな」とあるを證としてゐる。○或聖——ここでは單に、「或僧」といふこと。○請じ侍りに——招待しましたところが。○説法いみじくして——佛の教を説くこと上手であつて。○皆人涙をながしけり——説法を聞いてゐた人達は皆感涙を流した。○導師——法會、講筵、葬儀などの際に、その主となる僧をいふ。前文の「或聖」をさす。元來この導師の語は、さまよへる者を佛道と云ふ正しき道に誘へ入れる義である。○聽聞の人ども——その説教を聞いて居た人人で、前文の「皆人」をさす。○いつよりも殊に今日はたふとく覺え侍りつる——説教を聞けば、それは何時であつても有難いと思ふのであるが、今日の説教は特別に有難いことと感じました。○感じあへりし——其處にゐた人々が誰も皆感心しあつた。「あふ」は誰も皆さうであることを意味す。○返事——この返事は或特定の人に對しての返事でなくして、皆の人が感心して言つて居る、それに對する挨拶の返答である。○或者——聽聞者の中の或一人である。○何とも候へ——何と言つても。何としても。○あれほど唐の狗に似候ひなむ上は——あんなに唐の狗に似てゐるからには、ありがたいのも尤もであるの意。鈴木弘恭氏の増訂徒然草文段抄に、黒川真頼氏の説として、「唐の狗は狛なり。狛は涙を常に流してゐる故に、此法師の自分から涙を流して説經したるをかくあざけりしなり」とある。○いひたりしに——言つたので。「に」は、によりての意。○あはれもさめて——感心してゐたのも消え失せて。○をかしかりけり——滑稽であつた。○さる導師のほめやうやはあるべき——そんな馬鹿な褒め方があるものか、アハ、といふところである。「さる」はそんなといふことで、「ほめやう」にかかる。「やはあるべき」は、……があらうか、あるまいとの反語となつてゐる。

口譯 又その男が、「他人に酒を飲ませうと勧めるといつて、自分がまづ飲んでおいて、それから人に酒を強ひ飲ませようとするのは、劍で人を斬らうとするのに似た事だ。劍は二方に刃のついてゐるものだから、ふり上げる時に自分の頭を切るから、人をよう切らぬのである。それと同じやうに、自分がまづ酒に酔つばらつて寝たなら、人は決して酒を召

又「人に酒すすむるとて、おのれまづたべて、人に強ひ奉らむとするは、劍にて人を斬らむとするに似たる事なり。二方に又つきたる物なれば、もたぐる時、先づ我が頸を斬る故に、人をばえきらぬなり。おのれまづ酔ひて臥しなば、人はよもめさじ」と申しき、劍にて斬りこころみたるにや、いとをかしかりき。

語釋 ○又云々。——野植には別段としてゐるが、同段としてもよからう。但し、前と同じであるか否かは判然しない。「又或者」といふところでないかと思ふ。○酒すすむるとて——中古文法としては、「酒すすむとて」とあるべきところである。○おのれまづたべて——酒を他人にすすめる前に、そのすすめる者自身が先づ飲んで。飲、食共に「たべて」といつた用例は狂言記などに多くある。○人に強ひ奉らむとする——他人に無理に飲ませようとする事。「奉る」は敬語の助動詞。「強ひ」が他人に關することであるため、敬語を使つたのである。○劍——ケンと普通よんでゐる。雙刃。太刀、刀とは違つて兩方に刃がついて居り、斬る武器と云ふよりは突く武器に近い。倭名抄に、「劍。似刀而兩刃曰劍。舉欠反」とある。正徹本、傳幽齋本には、下文の方を「けん」と書いてゐる。○二方に又つきたるものなれば——劍はもる刃で兩方に刃がつ

し上るまい」と申した。そんな事をいふが、その人は劔で斬つて見たことがあつたのだらうか、ほんとにをかしたなことであつた。

いてゐるものであるから。○もたぐる時——振り上げる時。モダグはモチアグの約。この語の古今雅俗については、第二十二段参照。○先づ我が頸を斬る故に——劔には両方に刃がついてゐるからして、他人を斬らうとして振上げると、一方の刃が自分の方に向つて居るから、相手を切る前に、自分の方を先に切るといふのである。文段抄、光廣本、野植本、は「我頸」とあるが、傳齋本、正徹本、嵯峨本、古版本、参考本、大本本、寛文本、直解本は、「我頭」とある。この方がよい。○人をばえきらぬなり——さきにもう自分の方が劔の一方の刃で切るからして、人を切ることが出来ないといふのである。○人はよもめさじ——他人はよもや召上るまい。「よも」は、現今の「よもや」といふにあたり、「めす」は召し上がることを。○劔にて斬りこころみたりけるにや——下に「あらん」の語が省略されてゐる。自分の頭を切つて試してみたことがあるのか。劔で人を斬るは両方に刃がついて居るからとて、實際自分の頭を斬つた経験もあるまいのにとの兼好の冷評である。眞面目になつて詰問してゐるのではない。○いとをかしかりき——まことにかしなことであつた。引用した話の不得要領なのを嘲笑したのである。傳齋本や正徹本には「かりき」の三字なし。

第二百二十六段

口譯 「ばくちの相手が、もうすつかり負け

「ばくちの負きはまりて、のこりなくうち入れむとせむにあひては、うつべからず。立ちかへりつづけて勝つべき時のいたれると知るべし。其の時

を知るを、よきばくちといふなり」と、或者申しぬ。

切つてしまひ、残りの金品を全部賭けて、これでのるかそるか勝負を決しようとする人に對しては、こちらは決して博奕を打つてはならぬ。形勢が逆轉して、今まで負けてゐた先方が、連戦連勝すべき時の到つた事を知るときである。斯ういふ時機を知るのを、よいばくちうちといふのである」と、或人が申しました。

語釋 ○ばくち——「博」又は「博奕」ともいふ。バクチは博打の約といふ。碁、雙六、骨牌などに金銭、又は物品を賭けて勝負を争ふ遊戯をいふ。始めて書に見えてゐるのは、日本書紀天武紀の十四年九月の條に、「辛酉。天皇御大安殿。喚王卿等於殿前。以令博戲。」とあるのがそれである。令義解に、「凡博戲賭財。謂博戲者。雙六樽蒲之屬。即雖未決勝負。唯賭財者皆是也」とある。斯く朝廷でも普く行はれたが、弊害あつた爲に、日本書紀持統天皇三年には「禁斷雙六」とあつて禁止された。その後度々禁止されたがなかく止むことなく、盛んに流行してきた。○負きはまりて——負け方が極度になつて。すつかり負けてしまつて。○のこりなくうち入れむとせむに——手もとにある金品を残さずすつかり賭けてしまふこと。「せむに」は「するに」の婉曲叙法である。○あひては——前句のつづきにて、「入れむとせむにあひては」は、「せむ人に對ひては」の意なるべし。かかる用例は、第五十二段「かたへにあひて」、第八十六段「坊主にあひて」、第八十七段「この男、具覺坊にあひて」など皆この用法である。尙古注にては、相手の義とするもの(大全説)。この説によると、「入れぬとせむに、あひてはうつべからず」となる。今一つ他に句解に、「打れんとせんにあふてはといへる義なり」とある。即ち違ひてといふ事になる。○うつべからず——博戲をなしてはならぬ。「うつ」は博奕をなすこと。○立ちかへり——逆にもどり。今迄の負けてゐた運命が逆轉して、勝つべき運命になること。○つづけて勝つべき時の——今迄は負けてゐたのが、今度は逆に、連続して勝つべき時が。○その時を知

るを——そのやうに形勢が變る時機を知ること。○よきばくち——すぐれたばくちうち人の意。この「ばくち」は、ばくちを生業とする人。博奕を打つ人をいふ。宇津保物語藤原君に、「おんみやうし、かんなき、ばくち、京わらべ……召し集めて」同、忠乞に「世の中にかしこきばくちの、せまり惑ひたるをめして」などある。

第二百二十七段

あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。

口譯 改めても有益でない事は、そのままに置いて置いて改めないのがよいのである。

語釋 ○あらためて益なき事——「益」は多く吳音にてヤクとよんでゐる。事を改めた場合の結果としては、三つの場合がある。第一は改めたが爲によくなるときと、第二は改めても普通である場合。第三は改めたが爲めに悪くなる場合とである。この中で、第一の場合にはしたがよく、第三の場合にはなきぬがよろしく、第二の場合には改めても、改めなくてもどちらでもよい場合であるが、ここはこの第二の場合には改めないのがよいといつてゐるのである。○するなり——なりは指定の助動詞。

第二百二十八段

雅房大納言は、才かしく、よき人にて、大將にもなきばやおぼしける比、院の近習なる人、「唯今あさましきことを見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹にかはむとて、生きたる犬の足をきり侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましくにくくおぼしめして、日來の御氣色もたがひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹をもたれけるは思はずなれど、犬の足は跡なき事なり。虚言は不便なれども、かかることをきかせ給ひて、にくませ給ひける君の御心は、いとたふとき事なり。

口譯 雅房大納言は學問藝能にすぐれた立派な人物で、上皇は近衛大將にもしてやりたいと思召してゐらつしやつた頃、上皇の側近の人が、「只今あきれれるほどひどい事を見ました」と申されたので、上皇は、「それはどのやうな事であるか」とお尋ねになつたところ、近仕の人が曰く、「雅房卿は、鷹の餌にしようとして、生きてゐる犬の足を切つて居りますのを、中垣の穴から見ただので御座います」と

語釋 ○雅房大納言——太政大臣源定實の長子。正二位大納言雅房。後土御門と號した。文永十年右少將、翌年左少將に轉じ、同年又右中將に遷る。弘安六年參議となり、同八年權中納言、正應元年一旦辭し、永仁三年に再任、權大納言となり、同五年正に轉じ、乾元元年四十一歳にて薨去。時に兼好二十一歳。○才かしく——學識藝能すぐれてゐること。増鏡つげの小櫛に、「土御門前の内大臣定實……御子の大納言雅房、中納言親定とていづれも才ある人にておはしき」とある。○よき人にて——善良でもあり、上品でもあり、聰明でもある立派な人といふこと。○大將にもなきばや——院が雅房を近衛大將にしてやりたいと思つてゐらつしやつた頃の意。大將と

言つたので、それをお聞きになつて、上皇は雅房を厭はしくにくくお思ひになり、ふだんの可愛がつてゐられた御寵愛も變つて、大將に昇進なさるのもなくなつてしまつた。一體雅房卿ほど學識藝能もすぐれてゐる程の人が、鷹を飼育し持つて居られたのは意外な事であるが、然し犬の足を切つて鷹に食はせたなどは跡形もない嘘である。さうした嘘を言はれるのは困つた事だが、さういふ事をお

は近衛大將のこと。職原抄に、「大將——非_レ譜第之華族者。更不_レ任_レ之。多是大納言中。譜第上藤任_レ之。於_レ執柄息者。越_レ次所_レ任也」とある。この華族とは清華のことにて、大臣大將を兼ねて太政大臣まで進まれる家柄である。○院——後宇多上皇となすのが妥當であらう。雅房が大納言になつたのは永仁三年で、それから薨去の乾元元年まで八年ある。この間に永仁六年伏見天皇が、後伏見天皇に御譲位なされ、正安三年には後伏見天皇が、後二條天皇に御譲位になつた。故に伏見院と後伏見院とが上皇にてゐらせられた。ところが當時その他に、後深草院（正元元年御譲位、嘉元二年崩御）、龜山院（文永十一年御譲位、嘉元三年崩御）、後宇多院（弘安十年御譲位、正中元年崩御）の三院がゐらせられた。右の中、後深草院、龜山院は法皇でゐらせられ、當時最も勢力もあり、政治にも關與してゐられた後宇多院とすべきである。第百三段の「大學寺殿」の條参照。大成本にも、「此院は後宇多院なるべし。此時院御所三院あり、後深草、龜山、後宇多。但し後深草、龜山は雅房大納言の時分は法皇なりし（壽）」とある。○近習なる人——近侍の臣。お側近く仕へてゐる者。○あさましき事を見侍りつ——あきれるほどひどい事を見ました。とんでもない事を見ました。○鷹にかはむとて——鷹の餌にしようとして。「かふ」とは、飼ふことで、動物に餌をやることをいふ。鷹に犬の生肉を餌とすることは、發心集五に、「鷹ヲコノミ飼ケル時、ソノ餌ニカハントテ犬ヲ殺シケルニ云々」とある。○生きたる犬の足をきり侍りつ——鷹の餌に鳥のなき時には、犬を食はせる事があるといふ。○中垣の穴——中垣とは、隣家との間にある隔ての垣根をいふ。「穴」とは、垣の隙間のことであらう。或は垣の破れたところであつたかもわからぬ。○うとましく——いとはしく、きはしく。親愛の反對にして、その者を嫉妬

聞きになつて、それをおにくみになつた上皇の御心は慈悲深いもので、まことにありがたいことである。

する心持を起すをいふ。○日來の御氣色がたがひ——院が雅房を可愛がつて、早く昇進させてやらうと思つてゐられた御厚意も變つて。「御氣色」は、顔色の事をいひ、それから御機嫌の意になつた。○昇進もし給はざりけり——雅房は官職があがつて大將になりなさらなかつた。○さばかりの人——あれほどの人といふことで、院が大將にもなさばやとおぼしめす程に學識藝能ある立派な人がの意。○鷹をもたれけるは思はずなれど——雅房ほどの立派な人が鷹なんか持つて飼育して居られたのは、意外なことであるが。「思はずなれど」は、意外だが、案外だといふこと。一説に「思慮の到らぬことだが」とする解もある。○犬の足は跡なき事なり——生きてゐた犬の足を切つて鷹にやつたといふ事は、跡形もない嘘である。「跡なき事」とは、無根の事、無實の事。○虚言は不便なれど——人が嘘を言つたので、雅房が大將に昇進出来なかつたといふことは、雅房のためには誠に具合の悪い氣毒なことであるがの意。不便とは具合が悪いとか、困つた、都合の悪いこと。それから轉じて今日の可愛相だといふ意になつた。○かかる事をきかせ給ひて——院（上皇）が、雅房がかやうに無殘にも犬の足を切つて鷹に食はせたといふ事をお聞きになつて。○君の御心——君は院即ち上皇をさし奉る。即ち後宇多上皇の御心である。○いとたふとき事なり——實に尊いことだ。院の慈悲深い御心ありがたいといふのである。「たふとき」は、現今の「ありがたい」といふ語の内容と一致する場合がよくある。

口譯 大體、生物を殺し、或は傷つたり、

大かた生ける物を殺し、いため、闘はしめて、遊び樂しまむ人は、畜生殘害の類なり。萬の鳥獸、小き蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子

喧嘩せしめたりして、それを見て遊び樂まうとする人は、畜生どもの互に食ひ合ひする類である。すべての鳥獸、小さい虫けらまで、よく氣をつけて彼等の生活状態を観ると、鳥獸どもが子を愛し、親をなつかしがり、夫婦相ひ連れ立ち、妬み怒り、慾心が多く、身を愛し、命を大切にしている事は、何等の理智もなく、只もう愚なものだけに、人間よりも更に一層甚だしい。彼等よるづの鳥獸に苦痛を與

をおもひ、親をなつかしくし、夫婦をとまなひ、ねたみいかり、欲おほく、身を愛し、命を惜しめること、偏に愚癡なる故に、人よりもまさりて甚だし。彼に苦しみを與へ、命を奪はむ事、いかでかいたまはしからざらむ。すべて一切の有情を見て、慈悲の心なからむは、人倫にあらず。

語釋 ○生ける物を殺し——鳥類動物などの生物を殺すことにて、佛教の殺生戒を指してゐる。○いため鬪はしめて——「いため」のところで必ず讀點を打ち、これは生物を苦しめ傷けることで、羽を切り足を縛つたりすることである。「鬪はしめて」は、鬪犬、鬪鶏など喧嘩せしめて樂むこと。故にここは、「殺し、いため、鬪はしめて」と三つに切つて考ふべき所である。○畜生殘害の類なり——畜生即ち鳥獸類がお互に食ひあひ、そこなふと同じである。畜生とは、人に養ひ畜はれて生を保つものことで、十六觀經疏曰、「畜生云旁行。從主畜養。爲人驅使食噉」とある。殘害はそこなひ殺しあふこと。○心をとめてありさまを見るに——鳥獸どもの生活状態に注意して、その様子を觀察すると。○子をおもひ——燒野の雉子、夜の鶴、巴猿が腸を斷つなどの類。○親をなつかしくし——鳥の反哺、羊が跪いて乳を呑む類をいふ。○夫婦をとまなひ——雌雄相連れ立つこと。同宿の鴛鴦、双飛の孔雀の類。○ねたみいかり——詩經周南に蠹斯(いなご)は妬忌せずとあるから、餘虫のねたむことを知る。又蜂はいかりて人をさし、蛇はいかりて首をあげ、蟹はいかりて戈をもたげ、蟻螂いかりて斧をあげる類で、虫や鳥にも喜怒哀楽の情あるを

へ、命を取るやうなことをするのは、實に可愛相な事ではないか。まことに可愛相なことである。すべて世のよるづの鳥獸生物を見て、あはれみの心の起らないやうな者は人間でない。

いつたもの。○欲おほく身を愛し——鳥獸も欲望は多く持つてゐるし、己が身を大切にもしてゐること。○偏に——一途に。全く。○愚癡なる故に——おろかであるから。○人よりもまさりて甚だし——人ならば理性といふものを持つてゐるから、憤怒の情を抑制することもあるが、鳥獸には理性がないからして、本能の赴くの任かせて、ねたみ、怒り、愛し、身を大切にすること、人間よりも一層強烈であるといふのである。○彼に苦しみを與へ——「彼」は鳥獸をさしてゐる。正徹本、傳幽齋本には、「彼に」の二字なし。○いかでかいたまはしからざらむ——どうして可愛相でなからうか、可愛相なことである。「いたまし」は、可愛相だといふこと。○一切の有情——あらゆる生物、鳥獸のこと。有情(ウジャウ)は佛教語にして、情をもつて居るもの、即ち生物をさす。この語の反對は、非情とか無情といつて、木石の類をさす。○人倫にあらず——「人倫」は人間の仲間、人類の意。さういふものは人間でない。

第二百二十九段

口譯 顔回はその志として、自分が勞苦とする所を人にやらせまいと考へてゐた。すべて人を苦しめたり、又人

顔回は志、人に勞を施さじとなり。すべて人を苦しめ、物をしへたぐる事、賤しき民の志をも奪ふべからず。又いときなき子をすかし、おどし、いひはづかしめて興する事あり。おとなしき人は、まことならねば、事にもあらず思へど、をさなき心には、身にしみておそろしく、はづかしく、

をむごく扱ふことはあつてはならぬ。どんな賤しい民でも、その人がなしたいと志す所を曲げ抑へてはならない。又、幼少な子供をだましたり、おどかしたり、辱かしたりして面白がる事がある。おとなの人は、もともと斯くする事が賤のことであるから、何とも思はないが、幼い子供の心では、それが深く心にしみて、恐しく思ひ、恥しく思ひ、なまけなくも思ふ。その思ひは實に深刻であるだ

あさましき思ひ、誠に切なるべし。是をなやまして興する事、慈悲の心にあらず。

語釋 ○顏回——孔子門弟中第一の高弟。周代の魯國の人。字は子淵。二十九歳の時鬢髮悉く白く、三十二歳にして歿す。○志、勞を施さじとなり——自分でこの事は勞苦と思ふことは、その事を人にもさせまいといふやうに考へて居たとの意。「となり」は、といふのであるの意。論語、公治長篇に、「顏淵、季路侍。子曰。盍各言爾志。子路曰。願車馬衣輕裘。與朋友共敝之而無憾。顏淵曰無伐善。無施勞。」とあるのをいつたもので、朱子注に、「勞、勞事也。勞事非己所欲、故亦不欲施之於人」と解してゐる。○物をしへたぐる事——人をひどい目にあはせてはならぬ。物は人といふと同じ。百三十段の「物にあらそはず」百六十七段の「善にほこらず、物と争はざるを徳とす」百七十二段の「勇める心盛にして物と争ひ」などある物は皆人の意である。「しへたぐる」とは、ひどい目に合はせる。虐待するの意である。この句は後の「奪ふべからず」の「べからず」に意味が續き、「しへたぐる事あるべからず」の意である。○賤しき民の志をも奪ふべからず——どんな賤しい民でもその志を奪つてはならぬ。「志を奪ふ」は、賤民の意志、希望等を矯めたり、抑壓したりすることをいふ。この句は論語、子罕篇の「子曰。三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也」とあるによつた語。論語の原文では他力に資する者は馮み難いが、自己に堅く守る所は恃むに足るといふことである。然して原文の「べからず」は「得べからず」の意であるが、本段ではそれを「奪つてはならぬ」の意に變へて使つたのである。

らう。斯く幼少の子供を苦しめ困らして面白がる事は無慈悲なことである。

○いとよきな子をすかし——「いとよきなき」は「いとけなき」に同じ。幼少の意。「すかし」は、だますとか、欺くこと。なだめるの意ではない。○いひはづかしめて——その子が恥づかしいと思ふやうな事を言つて。○興ずる事あり——面白がる事がある。○おとなしき人——一人前の人。大人。この大人は、幼少な子供をだましたりおどしたりする人をさしてゐる。○まことならねば——本當の事でないから。前文の「すかし、おどし、いひはづかしめる」ことが、幼少に對するじやうだんであるからといふのである。○事にもあらず思へど——別に何とも思はないが。この句の主語は「おとなしき人」である。○あさましき思ひ——あさましいと思ふ心。「あさまし」は原義通り、あまりひどい。あまりになさけないこと。○誠に切なるべし——實に痛切であらう。○是をなやまして興ずる事——「是」は、いとよきな子をさす。「なやます」は、困らす。苦しめる事。

口譯 大人の喜怒哀樂も實は空(クウ)なものであるが、而も眼前の事實の現象に執着するのである。身體を痛め苦しめるよりも、心を痛めるのは、人を害

おとなしき人の、喜び、怒り、悲しび、樂しむも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に着せざる。身をやぶるよりも心をいたましむるは、人をそこなふ事なほ甚だし。病をうくることも、多くは心よりうく。外より來る病はすくなし。藥を飲んで汗をもとむるには、しるしなき事あれども、一旦恥ぢ恐るる事あれば、必ず汗を流すは、心のしわざなりといふ事を知るべし。

凌雲の額を書きて、白頭の人となりしたためしなきにあらす。

する事が一層ひどい。病気になるのも、多くは精神的に病気になる。外から来る病氣は少ない。薬を飲んで汗をかかうとしても、その効験のない事はあるが、一たび恥ぢ恐れることがあると、必ず汗を流す。それは精神的のしわざだといふ事がわからう。凌雲觀の額を書いて、忽ち白頭の人になつた例もあるのである。

語釋 ○虚妄——妄念から起つた空な事。眞ならざる一時の心の幻影。虚は事實のない事。妄は迷のことで、實質のあるものでなく、ただ心の迷ひによつて起る一時の幻影をいふ。○誰か實有の相に着せざる——「實有の相」とは、萬物皆空で、目に見えるもの皆假有に過ぎない。而るに人の妄念からそれを事實の存在として了ふ。その事實的存在なりとする凡ての現象といふこと。着すはヂヤクすとよみ、執着する。深く思ひ込むこと。子供ばかりでなく、大人の喜怒哀樂の情でも實は虚妄である。人々がこの虚妄を虚妄と達觀することが出来れば、怒りも喜びも悲しみもない筈だが、そこまで大悟徹底した人はない。一般の人は虚妄と思はず、假有を假有と觀せずして、實有する現象として執着して居る。大人でもさうであるからして、まして幼少な子供はなほさら、だまされたり、おどかされたりすると、それを眞實のこととなして恐しがつたり、恥づかしがつたりする、だから子供をだまし苦しめることはよくないと言ふのである。「誰か……ざる」は反語になつてゐて、誰でも皆執着する。誰でもそれに深く心を染めて思ひ込むこと。○身をやぶるよりも心をいたましむるには云々——身體を害することが、人に害を與へるのは言ふまでもないが、人の心を苦しめることは、それよりもつと／＼ひどい害を與へるものである。なほはそれより一層の意。○病をうくることも多くは心よりうく——病氣になるのも、大抵は精神的に病氣になるものである。○外より来る病はすくなく——外部から来る病氣は少い。外は心に對して言つたものである。○薬を飲みて汗をもとむる云々——發汗劑の薬を飲んで汗を出さうとしても、

その効果のない事もあるが。「しるし」は效果。效験のこと。文選卷廿七、嵇康の養生論に、「夫服藥求汗。或有弗獲。而愧情一集。渙然流離」とあるによる。○一旦恥ぢ恐るる事あれば云々——一度恥ぢたり恐れたりする事があると、必ず汗が流れて出るのは、それは心がかく汗を流さしめるのであることを知るべきである。○凌雲の額を書きて白頭の人となりしたためし——魏の明帝が凌雲觀（凌雲殿とも凌雲臺ともいふ）と云ふ高樓を建て、誤つて額榜を未だ字を書かないのに、高臺に釘づけにしてしまった。そこで魏の光祿大夫韋誕といふ書家を籠に入れて轆轤で引き上げて額に字を書かした。地上を去ること二十五丈の高さに於いて書いたので、心に恐ろしいと思つたことからして、書き終つて下りて來た時は、鬚も髪も白髪になつてゐた。それで早速子孫に言ひつけて書法を學ばせなかつたと云ふ。三國志に、「魏明帝立凌雲觀。誤先釘榜。乃以轆轤盛韋誕。轆轤引上書之。去地二十五丈。既下。鬚髮皓然。遺語子弟直絕此法。」とある。

第三百十段

口譯 人と争はず、自分の考へを枉げて人に従ひ、自分の身の事を後にして、人を先にするに越した事はない。

物にあらそはず、己を枉げて人にしたがひ、我が身を後にして人を先にするにはしかず。萬の遊びにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむ爲なり。己が藝のまさりたることをよろこぶ。されば負けて興なくおぼゆべき事、また知られたり。我負けて人をよろこばしめむと思はば、更にあそび

凡ての遊びの中でも、
 競技の如きにつき勝負
 を好む人は、勝つて面
 白味を得ようがため
 ある。従つて自分の藝
 の勝つてゐる事を喜
 ぶ。だから他人は負け
 て不快に感ずべき事も
 又知られる。若し、自
 分が負けて人を喜ばせ
 ようと思つたら、一向
 に遊びの面白味はない
 であらう。人につまら
 ぬ思をさせて、自分の
 心を慰めようとするの
 は、徳義に背いてゐる。
 親しい中で戯れるのに
 も、よく人をだまし欺

いて、自分の智慧の勝
 つてゐる事を楽しみに
 するものだが、これも
 亦禮儀に叶はぬ事であ
 る。だから最初は遊興
 酒宴から原因が起つ
 て、長い間の怨恨を作
 るやうな事が多い。こ
 れは皆争ひを好む爲め
 の弊害である。若し人
 に勝たうと思つたら、
 そんなつまらぬ事をや
 めて、ただ學問をして、
 道義の知識が人より勝
 るやうにと考へるがよ
 い。若し道を學ぶとい
 ふことになる、それ
 は自己の善行を鼻にし

の興なかるべし。人に本意なく思はせて、我が心を慰まむ事、徳にそむけり。

むつまじき中^{なか}にたはぶるるも、人をはかり欺きて、おのれが智のまさりたることを興とす。是又禮にあらず。さればはじめ興宴^{きやうえん}より起りて、長きうらみを結ぶ類多し。これ皆あらそひを好む失^{しつ}なり。人に勝らむ事を思はば、ただ學問して、其の智を人にまさらむと思ふべし。道を學ぶとならば、善に伐^{ほこ}らず、ともがらに争ふべからずといふことを知るべき故なり。大なる職^{しよく}をも辭し、利をも捨つるは、ただ學問なり。

語釋 ○物にあらそはず——他人と争ふことなくの意。「物」が「人」の意なることは、前段「物をしへたぐるること」の條に詳説したるが如し。「物に」の「に」が、「と」と同意なることは、本段の終の方にある「ともがらに争ふべからず」とある用例にて知るべし。然るに「物にあらそはず」を、「物事について人と争はず」などと解するはよろかからず。この句は、論語八佾篇の「君子無^レ所^レ争^レ」の語による。○己を枉げて人にしたがひ——自分の意見をさしひかへて、人の意見に従ふ。「己を」は、己の主張や意見をいひ、「枉ぐ」は、抑へつけてあらはさぬこと。屈すること。「人にしたがふ」は、人の意見に従ふこと。○我が身を後にして人を先にする——自分の身

のことは後廻しにして、人の事を先にやらさせるに越したことはない。論語、雍也篇の「仁者己^レ欲^レ立^レ而立^レ人^レ。己^レ欲^レ達^レ而達^レ人^レ」や、老子の「欲^レ先^レ民^レ。必^レ以^レ身^レ後^レ之^レ。」とあるのによる。「し^レかず」は、若かず。それに越したことはない。○萬の遊びにも——遊びわざ多き中に就きてもの意。「にも」のには、百十八段「鳥には雉」百二十一一段「養ひ飼ふものには馬」百二十四段「是法法師は淨土宗に恥ぢず」などの「に」と同義也。遊びわざの中にも競技的ならぬ娛樂もあり。今それらは措いて問はず。遊技中競技的のものを嗜み行ふ人はの意である。「遊び」は、遊びわざとか、遊びごとの意。古書では音楽のことをいふが、ここはそれではない。○勝ちて興あらむが爲なり——遊びごとで自分が勝ちて面白味を味はうとするからである。この語の下に、「それは」と補ふとよい。○己が藝のまさりたることをよろこぶ——この語の主語は、「勝負を好む人は」である。大成本は「よろこぶ」の下に「は」字ありて、「されば」の三字なし。然して注して曰く「山案、此よるこぶはのはの字を除き、此間にさればの三字を加へたる本多し。諺解、参考もかくのごとし。其説に云。勝をよろこぶから見れば、むかふの相手は負て興なく覺ん事推量せらるる也とあり。今しばらく古今抄、鐵槌などにしたがひて是をのぞく也。但兩本ともに其説をもらせり。今味ふてみれば、己が藝のまさりたるをよろこぶは、又負たる時には興なく思ふべき事也としらるるなりと一人の心のうへになしていへるものならんかし」とある。思ふに諺解、参考の説よきやうに思はる。○知られたり——知れてゐる。分つてゐる。さういふことはわかりきつたことであるの意。○更にあそびの興なかるべし——少しも遊びごとの面白みといふものは無からう。「更に」は、下に打消の語があるから、一向にとか、少しもといふこと。○人に本意な

て自慢せず、同輩と争うてはならぬといふ事を知るからである。時には重要な職をも辭任し、大なる利益をも捨て得るのは、ただ學問の力である。

く思はせて——人につまらなく思はせて、人につまらない思ひをさせて。人は勿論負けたその相手をさしてゐる。「本意なし」は、斯うしたいと思ふその考へが通らないでつまらなく思ふ、その心境を形容した語。○我が心を慰まむ事——正徳本、傳幽齋本、元文本、正徳本には、「慰まむ事」が、「慰めむ事」となつてゐる。恐らく原形は、「慰めむ事」とあつたものであらう。○徳にそむけり——人道に反した行ひである。○むつまじき中にたはぶるも——親しい間柄の中で、戯談などを言つて戯れるやうな時にも。○人をはかり欺きて——「はかる」は、だますこと。○おのれが智のまさりたることを興とす——自分の智恵が人よりもすぐれて居るのを愉快に思ふ。「おのれが」の「が」は、係續の意を示す助詞の「の」の意。「智の」の「の」は、主格を示す助詞で、「が」の意。○是又禮にあらず——是もまた禮儀にあはぬことである。前文に「徳にそむけり」とあるのに對して言つたものである。○興宴より起りて——興宴は遊興酒宴の意。酒宴の場合になした一寸の冗談などが原因となつて。○長きうらみを結ぶ——いつまでも解けない怨恨を構成する。○あらそひを好む失なり——争ひを好むより起る弊害缺點である。失は缺點とか、落度、弊害の意である。○人に勝らむ——元文本、正徳本には「人にかたん」とあり、正徳本には「人にかたむ」とあり、傳幽齋本には「人に勝む」とある。故に「人にかたむ」でなく、「人にかたむ」とよむ方がよるしからう。○其の智を人にまさらむ——この語は少し具合が悪い。「其の智を」とあるから、「まさらむ」を「まさらしめむ」とするか、「其の智の人にまさらむ」とかあるべき所である。正徳本には、「その智を人にまさむ」とある。これによると、その智を人よりまさむといふことになる。○道を學ぶとならば——ここは苟も道を學ぶとなら、それは善にほこらず、同輩と争つては

ならぬといふ事を知らうが爲めだといふ意であらう。前文の「其の智」は勿論、道德上の智をさして言つてゐる。然して、この句は、前文の「學問して云々」の但書のやうになつてゐる。○善に伐らず——善い事をなしても、それを鼻にかけて自慢しないこと。第二百二十九段のところに引用した論語類淵篇にある「願無伐善」の句をさしてゐる。○ともがらに争ふべからず——「ともがら」は同輩、仲間、同僚の意。にはと同意。仲間同志と争つてはならぬ。○知るべき故なり——學問して道を學ぶならば、さういふ事を知ることが出来るからだ。○大なる職をも辭し利をも云々——現在自分は重要な職務に就いてゐても、正しい道義から見てもよくないと思へば潔くそれを辭任する。又大なる利益があることであつても、それを得ることが道義に背くことであると知れば、潔くこれを抛擲するのは、畢竟學問より得た修養の力によつてなされるのである。

第三百三十一段

口譯 貧乏な者は兎角財貨を以て禮儀となし、老人は兎角筋肉的援助を以て禮儀とするものだが、それは甚だ間違つてゐる。自分の

貧しき者は財をもて禮とし、老いたる者は力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は、速にやむを智といふべし。許さざらむは、人のあやまりなり。分を知らずして強ひて勵むは、おのれが誤なり。貧しくて分を知らざればぬすみ、力おとろへて分を知らざれば病をうく。

身の程を考へ知つて、身の程に及ばない時は、速かに止めるのを智者といふべきである。若しそれを他人が許さないとすれば、それは承知しない人の誤である。我が身の程を知らずして、無理に勤むならば、それは自分の誤である。貧乏で自分の身の程を知らなければ、盗みをするやうになり、老人となつて體力が衰へて居るのに、身の程を知らずに無理な事をすれば、病氣になる。

語釋 ○貧しき者は財をもて禮とし——貧乏人は、人に財貨を贈ることが、即ち人に對して禮をつくすことだと思ひ。○老いたる者は力をもて禮とす——老人には筋力が少い。ところが老人はとかく人の爲に肉體的筋肉の援助を出すのが禮だと思ふといふのである。これ等は世の中の習はしであるが、よくないことであるとの意。「力」は筋力を意味してゐる。これは曲禮に、「貧者不以貨財爲禮。老者不以筋力爲禮。」とあるのによる。「財をもて」「力をもて」は、傳幽齋本や正徹本は、何れももちてとなつてゐる。○おのが分を知りて——自分の力量はどの位の程度かといふことを知つて。「分」は、身、身の程、分限のこと。ここでは富なり、筋肉の程度をさしてゐる。○及ばざる時は——自分の力では出来ないといふことを知つた時には。○速にやむ——財貨を出すことでも、筋肉を出すことでも、早速これを中止すること。○許さざらむは——自分には出来ないからして中止しようとするのに、他人がそれを許さないとすればそれは。○人のあやまりなり——許さない人の誤である。決してこちらの悪いのではない。○分を知らずして強ひて勤むはおのれが誤なり——自分の財力なり、筋肉力がどの程度のものであるかをよく知らないで、無理をして財を出さうとか、筋力を出して人を助けようとするのは、自己の誤である。○貧しくて分を知らざればぬすみ——自分は貧乏であるのに、我が身の程をも考へないで、無理に金を出さうとか、人に立派な品を贈らうとかすると、その必要な金の出所がないからして、しまひには他人のものを盗むやうになる。○力衰へて分を知らざれば病をうく——年を取つて體力が衰へて居るのに、その年齢の程度をも考へないで、無理な力仕事をするとな病氣になる。

第三百三十二段

鳥羽の作道は、鳥羽殿が建てられてから後につけた名前であつて、その以前からあつた名前である。元真親王の元旦の奏賀の聲が非常に高く莊重であつて、その大極殿で奏賀される聲が鳥羽の作道まで聞えたといふことが李部王の記に書いてあるとかいふことである。

語釋 ○鳥羽の作道——京都九條羅城門址四塚から上鳥羽に通ずる新しく作られた道のこと。吉田東伍氏の大日本地名辭書（山城紀伊郡）に、「京都九條羅城門址四塚より上鳥羽村を通じて大路存す。長さ二町許。其南は曲折、小枝橋を経て下鳥羽に通ず。此造路は朱雀大路の末にて、上鳥羽より西南に向ひ、佐比河原を経て久我驛に接したる者也。造都の初めに經營ありしならん。中世造路以南に鳥羽殿を起され、之を下鳥羽と云ふも、古の鳥羽は上鳥羽のみ歟云々。古今著聞集云、東寺の南つくり道の田中云々」とある。○鳥羽殿——大日本地名辭典、鳥羽離宮址の條に曰く、「白河天皇應徳三年創營、鳥羽天皇増修し、一に城南離宮と名づく。此地城南神社（眞幡神社）あるを以て也。初め仁明帝芹川遊獵ありしより歴代數御幸の所となり、藤原時平又此に水石亭を營みたり。白河、鳥羽二主の大造營に及び、殿舎、寺塔、方數町を占め、隨從の者屋宇を起し、凡百餘町に渉る。一時の盛邑也。後白河、後鳥羽二上皇亦此に御したまへるが、漸く荒廢に就き、仁治三年勝光明院火あり、後嵯峨天皇修理の事ありしかど、爾後全く廢亡す。宮址は竹

田村下鳥羽村に跨り、安樂壽院以西、賀茂川小枝に至る凡十町、城南森南北凡六町」とある。○むかしよりの名なり——作道とは新しく作つた道といふことである。故に白河天皇の時に鳥羽殿が出来てから道路が作られて、鳥羽の作道といふ名が起つたと世人は思つてゐるやうであるが、それは間違つてゐる。この鳥羽の作道の名は、鳥羽殿建立以前からある名である。○元良親王——陽成天皇の第一皇子。新撰姓氏録に、「三品兵部卿。母主殿頭藤遠長女。天慶六七廿六薨。五十四歳頓死」とある。○元日の奏賀の聲——元日には先づ寅刻（午前四時）に四方拜の儀式があり、辰刻（午前八時）より朝賀の儀式がある。この文句はこの朝賀の時に御祝詞を申し上げる聲である。公事根源、朝賀の條に、「是を朝拜とも申す也。辰の時に天皇大極殿に行幸なりて行はせ給ふ也。群臣皆禮服を着して、さながら御即位の儀式に同じ。内辨などもあり、開門などありて、めしの鼓をうたしむれば、群臣列して門に入る。天子高御座につかせ給へば兵庫寮鉦をうつ。執翳いでて帳を八字にかかぐ。近仗（江次第抄云、近仗謂近衛次將也）警蹕をせうし、圖書主殿香をたく。典儀（謂少納言也）再拜をとなふ。群臣此時再拜す。奏賀奏瑞とて、二人の者庭にすすみて祝ひ申す事也。是は去年の目出度き嘉瑞共の有るを國々より申せば、それを記して、今日是を奏する也。其時群臣再拜す。次に舞踏すれば、武官萬歳の旗をふる也。いと目出度き儀式ども也」とある。この奏賀がすむと奏瑞者が出る順序になつてゐる。奏賀の詞は、内裏式によると、「明神正御大八洲日本根子天皇我朝廷供奉親王等王等臣等百官人等天下百姓衆諸新年乃新月乃新日與天地共萬福手持參來天皇我朝廷拜供奉事恐恐恐申賜止申。」とある。○殊勝——ことにすぐれてゐて。聲が高くてよく通つたことをいつたものであらう。○大極殿より鳥

羽の作道まで聞えけるよし——「大極殿」とは、ダイゴクデンとよみ。大内裏八省院の正殿にて、大儀の行はせられるところである。さて、如何に元良親王の奏賀の聲が高いからといつて、大極殿にてよむ奏賀の聲が、鳥羽の作道といふ遠く隔つた南方まで聞えるとは思はれない。どうもこれは事實の話でないやうである。○李部王の記——李部は正しくは吏部と書き、共にリホウとよむ。式部省の唐名である。職原鈔に、「式部省（當唐吏部）云々。卿一人（相當正四位下。唐名吏部尙書大常卿。七省皆同之。）近代親王四品以上任之。人臣任之希例也」とある。ここは醍醐天皇の皇子、重明親王を申し奉る。重明親王は式部卿でゐらせられたから李部王と申したのである。重明親王は延喜八年親王となり、延長八年彈正尹、承平七年中務卿に任じ、天曆年中式部卿になられ、同八年四十九歳にて薨去。親王が天慶元年正月朔日から、延長四年十二月二十九日までの朝廷の行事公事を漢文體にて記述された十二卷の書物を「李部王ノ記」といふ。○侍るとかや——あるとかいふことであるの意で、兼好自身もまだ李部王記を見ないのである。

第三百三十三段

口譯 天皇の御寝なさる所は、東御枕である。大體、東を枕として、陽氣を受くべき爲め

夜のおとどは東御枕なり。大かた東を枕として、陽氣を受くべき故に、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕常の事なり。白河院は北首に御寝なりけり。北は忌む事なり。また伊勢は南なり。太神宮の御方を御

に、孔子も東枕に寝られた。寢殿造の正殿の設備としては、或は南枕にするのも普通である。白河院は北枕に御寝なされたのであつた。北枕は忌み嫌ふことであつてよくない。北枕がよくないといふことについては、また、「伊勢は京の南方にある。太神宮の方を後ろにしておやすみ遊ばされるのは如何なものであらう。よくないと思はれる」と或人が申した。さうではあるが天子が太神宮を遙拜あそ

跡あとにせさせ給ふこといかがと人申しけり。ただし太神宮の遙拜は、巽たつみに向はせ給ふ。南にはあらず。

語釋 ○夜のおとど——清涼殿中にある天皇の御寢所をいふ。禁秘抄上に、「夜御殿。四方有妻戸。南大妻戸一間也。御帳同清涼殿。(東枕)」と。禁秘抄抄に、「夜の御殿は御帳日の御座の如し。壁かべ代懸けたり。四の隅に燈爐有り。御帳の御枕の方に厨子二、あとの方に鏡かけたり。晝の御座に同じ。」とある。斯る御殿は床は板敷になつてゐて、そこに縷網線の疊三枚を敷き、その上に夜具の設けをなすのである。○東を枕として——東方を枕として寝る事。禮記玉藻に、「君子之居恒當戶。寢恒東首。」とある。○陽氣を受くべき故に——「陽氣」は支那の陰陽説からあらはれた説にして、陰氣に對し、この陽氣は積極的活動的の精氣である。さて方向からいふと、東は陽であり、西は陰である。そこで東を枕の方にして寝ると、寝てゐる間に東の氣、即發生、生長の精氣、活動力の陽氣を自然に身體に受けることになり、従つて壯健にもなり、幸福にもなりといふのである。○孔子も東首し給へり——孔子も東首にして寝られたといふのである。論語鄉黨篇に、「疾、君視之。東首加朝服、拖紳。」とある。朱子注に、「東首以受生氣」とある。この意は、孔子が病氣の時、君主が見舞に來られると、起きて拜することが出来ないから、頭を東に向け、禮服を夜具の上に掛け、その上に大帶をした形にして拜謁せられたといふのである。○寢殿のしつらひ——寢殿造の正殿の設備施設のこと。寢殿に於ても東枕にするが、若し東枕にしなければ、南枕にするのが普通のやりかただといふこと。「しつらひ」は設備のこと、ここ

ばされるのは、東南に向はせられるのであつて、南に伊勢があるとはされてゐない。

は寢殿内の寢所(御帳臺)の裝置をさしてゐる。○白河院——後三條天皇の御長子。久四年御即位。應徳三年御讓位。大治四年崩御。寶算七十七。院政を始められた方である。薙髮して法皇と稱しながら、院政をなされ天下の意の如くならざるものは、たゞ鴨川の水、雙六の采、山法師の三つあるのみと仰せられた方で、深く佛教を信ぜられ、高野、熊野に度々御幸あそばされた。○北首に御寝なりけり——夜は北枕にして御寝になつたといふのである。この理由としては、「白河院は佛者なるが故に、釋尊の頭北面西の涅槃の姿をうらやましく思召して、常に北首し給へり。されば佛者は平生臨終と心がける故に、此院も晝は代々の天子の日つぎをうけて、四海の政をとり行はせ給ひ、夜は涅槃の相さまに表して、御寝なる度ごとに御臨終の心持に思召して、かく北首し給ひしとなり(説)」とあるのは正しい見方と思はれる。○北は忌む事なり——北方は陰で、且つ肅殺の氣があるから忌むのである。故に白河院は北枕とせられたが、しかし北は昔から今に至るまで忌み嫌ふことであるの意。これは恐らく兼好の評言と見るべきであらう。下文の句に「人申しけり」とある。この或人の言を、一説に「北はいむ事也」以下をさすといひ、又、一説には、「夜のおとど」以下を一括してさすものとなしてゐるが、これは「又伊勢は南なり」以下をさすものとする方が宜しからうと思ふ。○また伊勢は南なり——「また」は、北枕がよくないことについて、上述の如き理由もあるけれども、又このやうな理由もあるとの意である。太神宮のある伊勢の國は京都の南方にあたるといふのである。○御跡にせさせ給ふ——「御跡に」は一種の當字にして、「御後に」といふ事。前に對する後方に、尻の方にの意。御足の方にの意。禁秘抄上に、「凡禁中作法先神事、後他事。且暮敬神之觀慮無懈怠。白地以神宮並内侍所方不爲

御跡。」とある。○いかが——どうであらうか、よくなからうの意。○太神宮の遙拜は巽に向はせ給ふ——巽はタツミとよみ、東南方をいふ。天子が宮中から太神宮を遙拜あそばされる時には、東南方を向いて遙拜あそばされるといふのである。禁秘抄上の恒例毎日常次第の條に、「次經朝餉——清涼殿北。着石灰壇。内侍兼數大床子圓座於石灰壇南間中央。立廻四季御屏風。垂御簾。典侍獻御笏。主上正御心着御(巽向)神宮内侍所已下御祈請。」とある。○南にあらざ——或人は伊勢神宮は京都の南方にあるといつてゐるが、天子が太神宮を遙拜なさるのは東南に向つてなされるのであるから、「伊勢は南なり」といふのは間違つてゐるといふのである。延徳本には「南とはあらざ」とある。これによると、「書物には南と書いてない」といふことになる。

第三百三十四段

口譯 高倉天皇御陵の法華堂の三昧僧、何某の律師とかいふ僧が、或時に鏡を手に取つて、自分の顔をつくづくと寫し見て、自分の容貌が如何にも醜く、

高倉院の法華堂の三昧僧、なにがしの律師とかやいふもの、ある時、鏡を取りて顔をつくづくと見て、我がかたちの見にくく、淺ましき事を餘りに心憂く覺えて、鏡さへうとましきこちしければ、その後ながく鏡をおそれて手にだにとらず、更に人にまじはる事なし。御堂のつとめばかりにあひて、籠り居たりと聞傳へしこそ、ありがたくおぼえしか。

餘りにひどいのを、しみん／＼となきけなく思つて、まざ／＼と醜い顔を見せつけた鏡までが厭はしいやうな氣がして、その後は永く鏡を見るのを恐れて、再び鏡を見るところか、手にさへもとらず、全く人々と交際することもなかつた。そして法華堂の誦經のお勤めにばかり出て、その外の時は一室の内に閉ぢ籠つて居たと傳へ聞きに聞いたが、誠に世にも珍しい尊い心掛けであると思はれた。

語釋 ○高倉院の法華堂——京都の東、清水寺の東南、清閑寺に法華堂の陵といつて、高倉天皇の御陵がある。この御陵に附屬してゐた法華堂のことである。この法華堂は天皇の御遺骨を納め奉つた所といふ。「高倉院」は後白河天皇の第七皇子、高倉天皇のことで、仁安三年御即位、治承四年御讓位、まもなく養和元年僅かに廿一歳にて崩御あそばされた。法華堂のことは第二十五段參照。この法華堂はその後荒廢してしまつたが、兼好の頃はまだ存在してゐたものと思はれる。今は御陵の西にその跡が残つてゐる。○三昧僧——法華三昧を修する僧。三昧は梵語で、智度論に、「善心一處不動、是名三昧。」とある。即ち一意專念法華經を讀誦して餘事に心を移さぬ僧を言ふ。なほ第二十五段參照。○なにがしの律師——何とか言つた律師といふことで、その本名を忘れたので、かく書いたのである。律師は僧官の名にして、僧都の次ぎで僧尼を統ぶることを司る。なほ第九十段參照。○鏡をとりて——鏡を持ちて。鏡を手にとりての意。○我がかたちの見にくく淺ましき事——律師が自分の容貌が醜くあんまりひどい顔であること。「かたち」は、容貌、顔付のこと。「の」は主格を示す助詞で、「が」の意。「淺ましき」は、あまりひどいのを。あきれ程ひどいのを。○心憂く覺えて——つまらなく思つて。なきけなく思ふ。○鏡さへうとましきこちしければ——「鏡さへ」とあるからして、律師が自分の顔が憎くらしくなるのは言ふまでもなく、なほその上に、かく醜い顔を見せつけて呉れる鏡までが憎い氣がすること。「うとまし」とは、厭はし、嫌はし、憎らしいこと。○鏡をおそれて——鏡を見ると自分の醜い顔がわかる爲めに、鏡をとつて見ることが恐いのである。○手にだにとらず——手に取つて顔を寫すことをしないのは言ふまでもなく、ただ手に持つといふことだけでもしなかつた。○更にま

じはる事なし——全く人と交際することをしなかつた。「更に」は下に否定の語があるから、全く、一向にの意である。○御堂のつとめばかりあひて——毎日時を定めて法華堂で讀經するその勤行にだけ参加して。「御堂」は法華堂のこと。「つとめ」は勤行（ゴンギヤウ）で毎日時を定めて讀經すること。「あひて」は、皆と一緒になること。参加して。○籠り居たり——勤行にだけ出て、その外の時間はすべて、自分の居間である一室に閉ぢ籠つて居たといふのである。○開傳へしこそありがたくおぼえしか——その律師の心掛けは世にも珍しく尊いものだと思はれました。「ありがたし」は、珍しいの意であるが、尊いとの意味も多分に含まれてゐる。「開傳へ」は、正徹本、傳幽齋本、光廣本、嵯峨本、正徳本、古版本等には、「開侍り」とある。傳と侍とは草書がよく似てゐるので、「傳へ」とある後世の版本は誤つたものであらう。

口譯 利巧さうな人も、他人の事ばかりおしはかり考へて、自分の事をば知らないものである。自己自身の價値をもよく知らないでゐて、他人の事がよく分るといふ、そのやう

かしこげなる人も、人の上をのみはかりて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして、外を知るといふことわりあるべからず。さればおのれを知るを物知れる人といふべし。
かたちみにくけれども知らず、心のおろかなるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近き事をも知らず、行ふ道のいたらざるをも知らず、身の

な道理があらう筈がない。それだから、自分の眞價がよくわかる人を、よく物が分る人といふべきである。自分の容貌が醜くても、そのことに氣づかず、自分の精神が愚であつても分らず、藝がまづくても分らず、自分がつまらぬ身分地位であつても、それに氣づかず。また病氣に罹ることもわからず、死が近づいてゐることも分らず、自分の修業してゐる道が、まだ未熟であるのも分らず、我が身の上

上の非をも知らねば、まして外のそしりをも知らず。但し、かたちは鏡に見ゆ、年は數へて知る。我が身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなれば、知らぬに似たりとぞいはまし。
かたちをあらため、齡を若くせよといふにはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞしづかに身をやすくせざる。行おろかなりと知らば、何ぞ茲をおもふこと茲にあらざる。

語釋 ○かしこげなる人——賢明らしく見える人も。○人の上をのみはかりて——他人の身の上ばかりを考へ評價して。「はかる」は、推し考へて。かうだらう、あゝだらうと臆測を逞しうすることであるが、ここは評價するの意も含まれてゐる。○おのれをば知らざるなり——自分の赤裸々な眞價を知らないのである。○我を知らずして外を知る——自己の眞價をもよく分らぬものが、他人の眞價をよく知る。○ことわりあるべからず——そんな道理は決して無い筈である。○おのれを知るを物知れる云々——自己の眞價を知つてゐる人をこそ、本當に物の道理やわけを知つた人といつてよい。○かたちみにくけれども知らず——自己の容貌が醜くとも、そのことを知つてゐない。○身の數ならぬをも知らず——自分の身分のまことにつまらぬ、數の中にも入らぬ程であるのをも知らない。身分を主として言つた語である。○年の老いぬるをも知らず——年老いてしまつて、人の中に出で交るべき身でもないのに、それが氣づかずに居ること。第百十三段

の缺點短所もわからなければ、まして他人からの非難も知らないでゐる。然し容貌は鏡を見れば分るし、年齢は數へて見れば分る。自分の事がわからないのではないが、もし分つたとしたところで、今更何とも仕方がないから、知らないやうに見えるのだといふかも知れない。然し容貌を改めて、醜いものを綺麗にせよとか、或は年を若くせよとか言ふのではない。若し自分の身に關したことがまづい

の「四十にも餘りぬる人の、ことにうち出でて男女のこと、人の上をもいひたはるる」や、同段の「老人の若き人にまじりて興あらむと物いひるたる」、第百三十一段の「力衰へて分を知らざる」などの類をさしてゐる。論語述而篇にある、「發憤忘食。樂以忘憂。不知老之將至。」とあるのとはその意味が大に異つてゐる。○病の冒すをも知らず——自分の身がだん／＼と病氣に罹つて行くのも氣がつかず。○行ふ道のいたらざるをも知らず——我が修業してゐる道がまだ造詣深く達せず、未熟であるのにそれも氣づかない。「行ふ道」とは、ここでは主として精神的修養方面をさして言つたものとすべきである。○身の上の非——我が身の上の缺點。或は未熟なところ。○まして外のそしりを知らず——自分自身の缺點でさへ分らないのであるからして、なほ更、他人が自分を誹つてゐることなどは分らない。○かたちは鏡に見ゆ年は數へて知る——しかしよく考へて見ると、自己のことが全然分らないといふわけではない。容貌の美醜は鏡を見れば直ちに分るのであり、自分の年齢が老いてゐるかどうかは、數へて見ればすぐわかることである。○すべき方のなければ——容貌は醜い、年は老いたとわかつたとて、それはどうにもしようがないことであるから。○知らぬに似たりとぞいはまし——他人から見れば、知らないのと同じやうに見えるだらう。「いはまし」は、言ふだらう。言ふかも知れないの意。○かたちをあらため——醜い容貌を改めて綺麗にすること。○拙きを知らば——この「拙き」は、容貌の醜いことも、藝のまづいことも、身の數ならぬことも、それ等を引きくるめて「拙き」といつたものと考へるのが妥當であると思ふ。要するに「劣つて居る」といふやうな意味になる。探本氏の解には、「これは上文の呼應上「貌の拙き」と見るがよい、容貌がまづいの意。藝の拙きと見た本もあるが、

ものであると知つたならば、どうしてすぐに引退しないのか。年取つたと知つたならば、どうして隠退して身を安靜に保たないのか。又我が行爲が愚であるとか知つたならば、どうしてそのことをよく考へないのか。

それでは文の筋は立たぬ」と言つてあるが、ここは、かたちとよはひのことばかりをいつてゐるのでなく、「行おろかなり」ともあるから、この拙きは、上文にいろ／＼とあげた事柄の中の二三を承けて書いたものと見るのがよいと思ふ。○何ぞやがて退かざる——やがては、すぐそのまゝの意。退くは、引退すること。つまりなぜ自己の現在の地位から引退しないのであるかの意。○何ぞしづかに身をやすくせざる——世間に出しやばつたり、若い者と共にあくせくと動くやうな事をなさず、どうして早くかかる地位を去つて、身心を安靜に保つやうにしないのかの意。○行おろかなりと知らば——「行」は、前文にあげた十の中の何れをも漠然とさしたものと考へてよろしい。「おろか」は、劣るとかまづいといふやうな意。即ち、自己一身についての事柄が、人より劣つてゐるのを知るならばの意。○何ぞ茲をおもふこと茲にあらざる——どうしてそれを思つてゐないのか。つまりよく／＼この點を思ひなさいよの意になる。これは書經大禹謨に、「帝曰。格。汝禹。朕宅。帝位。三十有三載。耄期倦于勤。汝惟不怠。總。朕師。禹曰。朕德。罔。克。民不。依。皐陶。邁。種。德。德。乃。降。黎。民。懷。之。帝。念。哉。念。茲。在。茲。釋。茲。在。茲。名。言。茲。在。茲。允。出。茲。在。茲。惟。帝。念。功。」とあるによる。

口譯 すべて他人に愛しすかれないうで、世人に交はつてゐるのは恥辱である。容貌がみに

すべて人に愛樂せられずして衆にまじはるは恥なり。かたちみにくく、心おくれにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能の座につらなり、雪の頭を戴きて、さかりなる人にならび、況や及ばざる事

く、心が劣つてゐながら、出でて官途に仕へ、無智で自分はあるながら、大なる才能家の仲間と交際したり、拙い藝を持つてゐながら、すぐれた藝能家の集つてゐる席上に列座したり、白髪頭をしてゐながら若き人々と一緒にゐるのは勿論のこと、ましてや及びもつかぬ事を望み、出来もせぬ事に心を勞し、所詮我が身に來もしないことを期待し、人を恐れ、人に媚びへつらふのは、是れは他人の與

を望み、かなはぬことをうれへ、來らざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず。貪る心にひかれて、みづから身をはづかしむるなり。貪る事のやまざるは、命ををふる大事今ここに來れりとたしかに知らざればなり。

語釋 ○人に愛樂せられずして——人に愛し好まれないで。「愛樂」(アイゲウ)は佛敎語にして、善法を親愛樂欲すること、樂(ゲウ)は好む、願ふの意であるが、ここは普通語として、他人より愛好せられることに言つたものである。○衆にまじはる——廣く世間の人と交際することをいふ。○心おくれにして——「おくる」は、劣るといふことで、氣おくれ即ち、卑怯、臆病の意ではない。○つまり精神智力の劣つてゐることをいふ。○出で仕へ——出でて官途に仕へること。家に籠つてゐることの反對である。○不堪の藝——下手な藝のこと。「不堪」は、堪能の反對にて、不熟達、不器用、拙劣の意。○堪能の座につらなり——上手な人々のゐる席上に列座すること。○雪の頭を戴きて——年を取つた白髪頭の身をして。○さかりなる人にならび——元氣旺盛なる若い人々と一緒になり。○及ばざることを望み——到底出來ない事を出來るやうに望み。○かなはぬことをうれへ——自分には出來もしないことについて、それが自分の思ふやうにならぬからとて心を痛めるをいふ。「かなはぬ」は、「及ばぬ」といふに同じく、到底成就の見込のないことをいふ。○來らざることを待ち——どんなにいつまでも待つてゐても、到底やつて來ることのない

へる恥辱でなくして、貪慾の心に引かれて、自ら自分の身を辱しめるのである。斯く貪慾の心の止まないのは、死といふ一大事が、今自分の眼前に來てゐる事を、十分よく知つてゐないからである。

幸運を期待してゐること。○人におそれ人に媚ぶる——自己の地位などが他人に奪はれはしないかと他人を恐れたり、何か利益を得ようとして、他人にへつらひおもねつたりすることをいふ。○人の與ふる恥にあらず——斯うした上文の如き行爲は他人が我等に與へる行爲ではない。○貪る心にひかれて——欲深い心にひきづられて。○みづから身をはづかしむる——自分で自分を辱しめるのである。即ち他人が恥づからしめるのでない。○貪ることのやまざるは——身を辱めるやうになつても、なほ貪る心が止まず、どこ／＼までも慾な事ばかりを考へてゐるのは。○命ををふる大事今ここに來れり——死といふ一大事が今やこの眼前に迫つてゐる。「をふる」は、終る、で他動詞となつてゐる。「終る」となると自動詞となる。○たしかに知らざればなり——十分によく理解してゐないから、何時までたつても慾張る心が止まないものである。

第三百三十五段

口譯 資季大納言入道とかいふ人が、具氏宰相中將に向つて、「あなたのお尋ねになる位の事は、どのやうな事であつても返答の出來な

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將にあひて、「わぬしの間はれむほどのこと、何事なりとも答へ申さざらむや」といはれければ、具氏「いかが侍らむ」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はか／＼しき事は片はしもまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそぞろごとの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らめ」と申され

い事はない」といはれたので、具氏は、「それは、どんなものでありませうか、必ず御返答なさるとも限りませう」と申された所が、大納言は、「それならば私に尋ねてごらん下さい」と仰つしやつたので、具氏は、「私はいしたむづかしい事は、少しも學んでをりませんから、お尋ねするまでには行かぬ。ただ何となく口にするつまらぬ事の中で、どうもはつきりと分らない事をお尋ね申ませう」と

けり。「ましてここもとの淺き事は、何事なりともあきらめ申さむ」といはれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは御前にてあらそはるべし。負けたらむ人は供御をまうけらるべし」と定め、御前にてめしあはせられたりけるに、具氏「幼くより聞きならひ侍れど、其の心しらぬ事侍り。むまのきつりやうきつにのをか、なかくばれりくれんどうと申す事は、いかなる心にか侍らむ、承らむ」と申されけるに、大納言入道はたとつまりて、「これはそぞろごととなれば、いふにも足らず」といはれけるを、「もとより深き道は知り侍らず。そぞろごとを尋ね奉らむと定め申しつ」と申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

語釋 ○資季大納言入道——藤原資季。資家の子。右大將道綱の裔。四條帝の曆仁元年參議に任ぜられ、後醍醐、後深草、龜山朝に歴任、正元元年（五十三歳）中納言より權大納言に進み、翌文應元年辭職、文永五年（六十二歳）十月出家、法名了心（イ信覺）、正應二年薨、年八十二。號二條、歌人である。兼好に七十六歳長ず。○とかや聞えける人——とか申した人。傳幽齋本、

申された。すると資季大納言は、「支那、印度のむづかしい事でも何でもお尋ね下さい。まして只今仰せられる如き日本の日常つまらぬ事などならば、どんな事でも明確にお答へ致さう」と言はれたので、陛下の側近の人々や、女官なども、「これは面白い争ひだ。どうせやるなら陛下の御前で、言ひ争はれるのがよろしい。そして負けた方は御馳走をなさるがよい。」といふことにきめて、さて御前に於

正徹本には、「ときこえる人」とある。○具氏宰相中將——源具氏のこと。村上源氏で、後醍醐帝の御傳であつた土御門通方の孫に當る。宰相は參議の唐名で、この人が參議になつたのは文永四年（三十六歳）の時、既に左中將であつた。文永十年に兼備中權守となり、建治元年從二位となり、九月薨。年四十四。歌人である。彼の死んだのは、兼好の生れる八年前で、資季には廿五年少し。○あひて——向ひて。對して。○わぬしの間はれむほどのこと——貴方の御尋ねになる位の事なら。「わぬし」は、「おぬし」に同じく、君とか、貴方の意。○何事なりと答ひ申さざらむや——何事だつてお答しないであらうか、必ずお答ひします。○いはれければ——おつしやつたから。「いはれ」の「れ」は敬語の助動詞。○いか侍らむ——どうだらうか。必ず出来るとはきまるまいの意。○あらがひ給へ——「あらがふ」は、争ふ、言ひ争ふこと。それなら問ひ出して勝負をやつて見給へ。○いはれて——受身の語法。具氏が資季にいはれてである。○はかしくしき事——しつかりしたむづかしい學問の上のことは。○片はしもまねび知り侍らねば——少しも學んで知つて居ませんから。「片はし」は、一端も、少しも。「まねび」は、「學び」である。○尋ね申すまでもなし——お尋ね申すほどのことはない。○何となきそぞろごと——「何となき」は、何といふ程の事もなし。つまり一寸とした些細な。「そぞろごと」は、つまらぬ事。たわもない事。深い意味もない只漫然といふこと。○おぼつかなきこと——はつきりしないこと。確かにわからぬこと。○まして——支那、印度のむづかしい事だつて知つてゐるから、まして、ここも……とつづけたのである。○ここも——此處といふことであるが、ここは日本の國の意とするがよい。當時の人々は、唐、天竺のことであると、むづかしいと考へてゐたのだか

て対決させたところが、具氏は「幼少の頃から常に聞いて居りますが、その意味の分らぬことがあります。ウマノキツリヤウキツニノヲカナカクボレイリクレンジウと申すことは、どんな意味でございませうか。御説明をお聞きしたい」と申された。大納言入道は、

ら、具氏がそぞろごとの中でわからぬことをたづねようと言つたので、それは日本をさすと見て、「ここもとの」と言つたものと思はれる。盤齋抄に、「天竺唐に對して日本をさしていふ」とあるのは妥當と思はれる。○浅きこと——淺薄卑近な事。○あきらめ申さむ——事の道理、意味明かにいたしませう。はつきりと御説明を致さう。○いはれければ——仰せられたので。上文の「いはれければ」に同じ。○近習の人々女房など——天皇（或は上皇）の側近に仕へてゐる人々。キンジユとよむ（第百二十八段参照）「女房」は宮中の女官。第四十四段参照。○興あるあらがひ——面白い言ひ争ひである。○同じくは——同じことなら。どうせ争論するなら。第五十九段参照。○御前——龜山院の後宇多帝の御前であらう。○供御をまうけらるべしと定めて——御馳走をなしなさい。即ちおごりなさいとの意。「供御」（クゴ）はもと陛下の御膳部をいふ言葉。武家時代には將軍の御膳をいつた事もある。ここは陛下の御前であるから、斯くいつたのである。「まうく」は、用意する。準備すること。負けた罰に皆に御馳走をなさいの意。「定めて」は、そのやうに約束をきめて。○御前にてめしあはせられたりける——陛下の御前に召し出されて兩方に對決させられた。「られ」は敬語でなく、兩方がそのやうにされたことを示す、受身の助動詞である。○聞きならひ——子供の時から度々聞いてよく知つてゐること。「ならひ」は、「習ひ」でなく、馴れてゐること。○その心しらぬ事——文句は知つてゐるが、その意味は知つてゐない事。○むまのきつりやうきつにのをかなかくばれいりくれんどう——この解については、閉田耕筆（伴蒿蹊著）の中に解いてあるのが一般に行はれてゐるから、次に引用する。「謎語といふもの、やまともろこしも、古へより聞ゆ。絶妙好辭を謎字にせるとし。ここに栢原の瓦金記せるもの有

な學問上のことは存じて居りません。それで初めから、貴方につまらぬ事をお尋ねすると約束したのです」といはれたので、大納言入道が負けになつて、その罰に御馳走をうんとなされたといふことである。

り、をかしなければあぐ。あたり近きに、ある宮がたの古女房の住ておはしけるが、雨夜のつれづれなるに、なぞ／＼などかけて興じ給ふ。椿葉落て露となるとかけて、雪ととく、椿葉落てとは、はの言を除くなり。露となるとは、つばきのつをゆに置かふるなり。さてゆきとはなりぬ。これにつきて、かの兼好の書給ふつれ／＼草の中に、馬のきつ、りやうきつにの岡中くばれいり、くれんどう、といふことのわきがたきに、ものしりの大納言殿もまけになりて、負わざいかめしうせられしといふこと見ゆるが、心にうかびて、かうがへ見るに、馬のきつは馬といふ言のくなり。りやうきつにのをか中くばれいりとは、りとかと上しもの二文字をのこして、中の七文字をのくるを、中くばれいりとは、いひまぎらはしたるなり。ぐれんどうは顛倒にて残れるりかの二文字をさかしまよみ、雁になるなぞ／＼とはとけたり。さしも深いひかすめて、興ぜしむかしの風流なるべしといへり。おのれおもふに、此うちれいりの三もじは、いひまぎらはしたるとはいへど、猶いかにともおもはるものから、かりと判ずるはおもしろし。」とある。又昭和五年七月一日の東京朝日新聞に、河口慧海氏がこれは西藏語である。佛教の實行三昧の思想をあらはしてゐるとして、「中道を思惟するものに幸福の山がある（ウマノキツリヤウ）幸福を思惟すれば、歡喜と（キツニノオカ）無病安穩の山を（ナカクボレイリ）ば身に受用する（クレンジウ）」と書いてある。参考のために掲げて置く。○いかなる心にか侍らむ承らむ——どのやうな意味でありませうか、お聞きしたい。○はたとつまりて——ばつたりと行きつまること。○そぞろごとなればいふに足らず——つまらないことであるから、かれこれと説明するにも足らぬ。○いはれけるを——資季大納言がおつしやつたのを。○深き道は知り侍らず——深遠な學問上の事などは存じ

ておません。○定め申しつ——お約束したのです。○所課——罰として課せられたもの。「課す」はおほす、罰として何事かおほせつけられる事で、ここでは供御を設けること。即ち罰として皆に御馳走をすることをさす。○いかめしくせられたり——「いかめしく」は嚴重に。即ちい加減の所で許されず、その御馳走を定めた通り間違なくちやんと立派になされた。

第三百三十六段

口譯 醫師のあつしげといふ人が、故法皇の御前に侍してゐて、そこへ法皇の御膳部がまゐつた時、あつしげが、「只今まゐりました御馳走の品々を、文字でも功能でも御質問下されて、私がそらでお答へ申し上げましたならば、それを本草に照し

醫師あつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御のまゐりけるに、「今まゐり侍る供御のいろ／＼を、文字も功能もたづね下されて、そらに申しはべらば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と申しける時しも、六條故内府まゐり給ひて、「有房ついでに物習ひ侍らむ」とて、「まづしほといふ文字は、いづれの偏にか侍らむ」と問はれたりけるに、「土偏に候」と申したりければ、「才のほど既にあらはれにたり。今はさばかりにて候へ。床しき所なし」と申されけるに、とよみに成りてまかり出でにけり。

合せて調べて下さい。一つも誤り申すことはありますまい。」と申した。恰度その時に六條故内大臣有房公がお出でになつて、「私有房が、お尋ねをして、ついでにあなたのお答へを聞いて一つ學問をしませう」といつて、「まづしほといふ字は、何偏でせうか」と尋ねられた時に、あつしげ醫師は、「それは土偏でございます」と申されたので、有房は「あなたの學殖の程度も、最早すつかりわかりました。」

語釋 ○醫師あつしげ——「あつしげ」は人名であるが、古來その傳は未詳である。和氣氏系圖に經成（正四下、大舍人頭、典藥助）の子に篤成といふ者があつて、典藥頭正四位下大膳大夫となつてゐる。然して伏見帝の永仁中に宇佐使を勤む。この篤成は有房と時代も一致するので、この人でないかと言はれてゐる。○故法皇——後宇多法皇の事とされてゐる。後宇多法皇は後二條帝の徳治二年七月御落飾。後醍醐帝の元亨四年（正中元）六月崩御。其間十八年に亘りて法皇と號せられた。文段抄に、「壽云、花園院號、萩原法皇。貞和四年十月十四日崩す。今はかくれさせ給へる故に、故の字をそふるなり」とあつて、從來の注釋書はこれによつてゐるが、これは徒然草の成立年代から考へてよろしくない。○さぶらひて——侍して居て。祇候して。○供御のまゐりけるに——法皇の御膳部が來た。「の」は、主格を示す「が」の意の助詞。一説に、室町時代の俗語にては、「の」を「を」と同一の意に使ふこともあるから、或はその意かも知れぬ。○供御のいろ／＼——御膳部にはいろ／＼の御馳走がついてゐる。その食物の品のいろ／＼について。○文字も功能も——その食品の名はどのやうに書くかといふ事も、又それにはどういふ滋養上の効用があるかといふこと。○たづね下されて——お尋ね下さいまして。○そらに申しはべらば——「そらに」は書物を見ずにの意。書物など見ないで、宙で申したなら。○本草に御覽ぜあはせられ侍れかし——私の申す文字も功能も、支那の藥用植物學書に引合せて調べて下さい。本草とは支那の古い藥用植物學の書で、もと神農氏の作つたものを、代々の學者によつて増補され、明の李時珍の増補改訂によつて本草綱目となる。但しこれは元時代にあたるから、それ以前のものである。○六條故内府——故人である六條内大臣のこと。次の有房のことをさす。内府は内大

今はもうそれだけに止して置きなさい。これ以上お尋ねしようと申ふことはない」と申されたので、一座の大笑いになつて、あつしげはすごとくと退出してしまはれた。

臣の唐風の名稱。○有房——源有房。久我相國通光の孫、通有の子。第二百一段光忠には父になる。和漢の才人能書家である。嘉元元年（五十三歳）權中納言、その後一度辭して延慶元年權大納言となり、同年辭し、文保二年從一位に叙せられ、元應元年六月廿八日病氣危篤となり、特旨を以て内大臣に任ぜられ、七月一日法皇その邸に臨幸になり、臥しながら龍顏を拜し、職を辭し、同日出家、法名有眞、翌二日正午薨す。年六十九。○ついでに物習ひ侍らむ——恰度よい機會でありますから、あなたからいろく〜と教へて戴きませう。○いづれの偏にか侍らむ——何偏でせうか。○土偏に候——シホの字は土偏であります。人から我の文字の知識を試しられたのであるから、正字で答ふべきを、塩といふ略字でウツカリと土偏と答へたのである。○才のほど既にあらはれたり——あなたの學殖の程もはや分つてしまひました。人から己の知識を試めされる際であるから、殿正にシホの正字鹽で答ふべきであつた。○今はさばかりにて候へ——上に「こそ」がなくして、下は「候へ」と命令形になつてゐるから、只今はもはやそれだけであれ。もうそれでよい。何も言ふに及ばぬ。○床しき所なし——奥ゆかしい所がない。これ以上聞きたいと思ふ追求的興味を起させる何物もない。「ゆかし」とは事物の真相を知りたいとの追求的興趣をあらはす語。○とよみになりて——一座の人々がどつと笑ひ崩れることになつて。「とよみ」は聲をあげてどつと大笑ひになること。○まかり出でにけり——退出した。勿論この主語は、「醫師のあつしげ」である。

第三百三十七段

口譯 花は満開であるのを、月は曇りなく皎々と澄み渡つたのばかりを見るべきものは限つては居ない。雨に對して見えない月を戀ひ慕ひ、一室にとぢ籠つてゐて、春の景色がどうなつたか知らずにゐるのも、やはりしみりとして情趣が深い。今にも咲かうとする頃の梢、もはや花の散つてしまつた庭などの趣は、殊に見る價值

花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春の行衛知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころおほけれ。歌の言葉がきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散過ぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるにおとれる事は。花の散り月のかたぶくを慕ふならひはさる事なれど、ことにかたくななる人ぞ、「此の枝かの枝散りにけり。今はみどころなし」などはいふめる。

語釋 ○花はさかりに——花は満開であるのを。この「花」は櫻花をさしたものと見てよい。○月はくまなきを——月は満月又はその頃の皎々と照つてゐるのを。○見るものかは——さういふのだけを觀賞するものであらうか、さうではない。○雨にむかひて月を戀ひ——降る雨に對して、雨ゆゑにかくれて見えない月を戀ひ慕ひ。和漢朗詠集、秋部八月十五日夜の所に、對雨戀月序、源順とある詩に、「楊貴妃歸唐帝思、李夫人去漢皇情」とある詩の題詞によるのである。この

が多いものである。和歌の詞書にも「花見に行つた所が、もう花が散つて了つてゐたのでよむ」とも書き、又は、「差支へる時があつて花見に行かないで歌をよむ」なども書いてあるのは、「花を見てよむ歌」といつてあるのに劣つてゐるようか、劣りはしない。花が散り、月が傾き沈むのを惜しく思ふ世の慣習は、もとから人情としてかくあるべき事ではあるが、物の情趣のわからぬ頑固下品な人に限つ

詩は類聚句題抄に出てゐて、起承の句は、「雲稠尙望清光透、水暗難忘素影生」といふのである。○たれこめて春の行衛知らぬ——「たれこめて」は簾や帳などを垂れて、その中に閉ぢ籠つてゐること。病氣か何かで室の中にとち籠つてゐるさまをいふ。「春の行衛」は、「春の行方」の當字で、花咲き花散り、だん／＼と縁になつて春が何時の間に過ぎて行くのか、少しも知らずに居る事。古今集春下に、「心地そこなひてわづらひける時に風にあたらじとて、おろしこめてのみ侍りけるあひだに、折れる櫻の散り方になれりけるを見てよめる。藤原よるか朝臣。たれこめて春のゆくへもしらぬ間に待ちし櫻もうつるひにけり」とある歌によつたものである。○なほあはれに情ふかし——やはりしんみりとしてよいものであり、いかにも趣の深いものである。「あはれに」は、「なり」の中止形になつてゐるのであつて、「花はさかりに」の「に」と同じく對立的になつてゐる。「なほ」は、「やはり」の意。○咲きぬべきほどの梢——これからそろ／＼花が咲かうとする頃の梢。○散りしをれたる庭——花の散つてしまつた花の庭上にあるさまをいふ。沼波氏や塚本氏の説明はあまりにしをれの語に拘泥してゐる。第四十三段「庭にしをれたる花」の條参照。○見どころおほけれ——見てよいと思ふ所が多い。○歌の言葉がき——「歌の詞書」と普通書く。和歌の前に書いてある小序。はしがき。即ち歌を詠むに至つたその動機などを書いて短い文章をいふ。○花見にまかれりけるに云々——櫻の花見に行きましたところが、もはや花は散り去つてしまつてゐたから、次のやうな歌を作るなどの時の詞書である。まかるはまゐるに對して、退出の意であつたのが、早くからまゐると混用して、行くの敬語となつた。「はやく」は、既にとか、もはやの意。新古今集春下に、「一年忍びて大内の花見にまかりて侍りしに庭に散

て、「この枝も彼の枝も花が散つてしまつた。もはや見る價值はない」などは、殊に言ふやうである。

りて侍りし花を硯のふたに入れて攝政の許に遣はし侍りし。今日だにも庭をさかりと移る花きえずありとも雪かとも見よ、(太上天皇)などの類。○さはる事ありてまからで——差支があつて花見に行かないで斯う詠んだ歌などの詞書。○おとれることかは——花を見て詠んだといふに比して劣つてゐることであらうか、決して劣つてゐない。○花の散り月のかたぶくを云々——花が散り、月が傾き沈まうとするのを惜しく思ふ世人の慣習は。○さる事なれど——尤もな事であるが。人情の自然として如何にもさうあるべきことだが。○ことに——殊に。特別に。「かたくな」にかかる副詞でなくして、終の「いふめる」にかかると見るのが妥當である。諸注誤つてゐる。○かたくななる人——頑固下品で物の情のわからぬ人。○今はみどころなし——もうもはや見るまでの價值がない。○などはいふめる——といふやうな事を言ふやうである。

口譯 月や花のことばかりでなく、すべて何事でも始めと終りとが特に面白い。男女間の情のことにしても、打解けて相逢ふことだけがひたすらの戀だとは言へない。或は何かの

萬の事も、はじめをはりこそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢見るをばいふ物かは。逢はでやみにしうさを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井をおもひやり、浅茅が宿にむかしを忍ぶこそ、色このむとはいはめ。望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ち出でたるが、いと心ぶかう青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢に見えたる木のまのかげ、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、

事情で男女相逢ふまでに行かなかつた心のつらさを思ひ、或は果敢ない契であつた事を恨み思つたり、或は秋の夜長を戀々として獨寢で明かし、或は遠隔の地にゐる戀人を思ひやつたり、或は荒廢した住居に昔の戀事を追憶する、こんなこそ本當に戀の情趣を解して居るとは言ふべきであらう。満月の皎々として照り渡つてゐる光景を遠くまで眺めるのもよい光景であるが、それよりは夜明け近くな

またなくあはれなり。椎柴、自慊などのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都こひしうおぼゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立去らでも、月の夜は闇のうちながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

語釋 ○萬の事も——月や花だけの事ではなく、その他總べての事。○はじめをはりこそをかしけれ——始めと終りとが面白い。凡て眞の情趣は物の絶頂全盛の時に無い。今に／＼と待ち受ける所、既に過ぎ去つたと回顧する所に面白味がある。○男女の情——男女間の愛情、戀愛。ここの「なさけ」には、男女の戀愛の間に存する情趣といふ意味も多分に含まれてゐる。○ひとへに逢見るをばいふ物かは——もう思ふがままに何も彼も許しあつて親しく逢ふことをば、ひたすら男女間の情といふものであらうか、決してそのやうなのばかりを眞の戀とはいはない。「ひとへに」は、ひたすら、一途に、といふ副詞で、普通これを「逢見る」にかかると説いてゐるが、これはさうでなく下の「いふ」にかかると見るのが妥當であると思ふ。さてこの「逢ふ」とか、「見る」とかの語は、平安朝時代に於ては今日と異つた意味に使はれてゐた。それは男女のほんとに打解けて、何も彼もすべて許し合つて逢ふことを意味してゐた語である。これもそれである。○逢はでやみにしうさを思ひ——相愛の情は成立しながら、而も萬事を許すといふ戀の究極の成立を見ずにやんでしまつた心のつらさを後から思ひ起すこと。○あだなる契をかこち——「あだなる」

つて、やつと待つてゐた有明の月の出でたのが、いかにも情趣深く、青味を帯びた月光であつて、それが深山の老杉の梢の間に、ちらちらと見える光景とか、或は又、時雨を催した一團の雲の間に月が一寸隠れた趣などの頃は、遙にしんみりとした情趣がある。それから又、椎の木や白樫などの葉が、つや／＼として水に濡れたやうになつてゐる上に、月光がきら／＼と照つてゐるのは、如何にも落付

は、はかなき、かりそめなるの意。「契」は、約束の意にて、男女二人の仲は決して變らぬと固く約束した。その二世三世との契を結びながら、而もそれが未遂げずして破れてしまつたことを恨み歎くこと。○長き夜をひとりあかし——二人で寝るときには、長い夜も短く思ふものであるが、一人で寝るとなると殊に夜が長いやうに感ぜられるつらさをいふ。「長き夜」は、秋から冬にかけての夜をさす。○遠き雲井を思ひやり——遠く離れてゐる戀人の身の上をこちらから思ふこと。「雲井」は雲居ともかく、空のことであるが、轉じて遠隔の地のことをいふ。「おもひやる」とは、遠隔の地のことを思ふこと。○淺茅が宿にむかしを忍ぶ——「淺茅が宿」とは、人足絶え、荒廢した家をさす。これは第二十六段の堀川院の百首の「むかし見しいもが垣根は荒れにけりつばなまじりの莖のみして」のやうに女の家としてもよければ、雨月物語の「淺茅が宿」の如く、自分のもとに住んでゐた宿としてもよい。さて「淺茅」とはまばらに生えてゐる茅(チガヤ)のことだが、單に茅といふに同じく一種の美辭である。「むかし」(昔)は二人の仲が圓滿で情交こまやかであつた當時をさす。「忍ぶ」は思ひ出してなつかしく思ふこと。ここは戀の相手の女が死ぬか何かして居なくなつたときのさまである。○色好むといはめ——世に言ふ「色好み」とは女色を愛するといふ悪い意味に用ゐられてゐるが、本來の意はさうでない。王朝文學にあつては、好色と云ふ意識に、一般に情趣を解するといふ意を包含してゐる語である。禁秘抄に、和歌をば、「好色幽玄之道」として尊重せられ、竹馬抄に「今の世には色好といふべき人、さらに待まじきやらん」とあるのを見ると、この語は狹義には男女間の情趣であるが、廣義には一般の情趣を解することである。○望月のくまなき——「望月」は満月のことで、満月が曇りなく照らすこと。

いたしんみりした感じ
がして、風流情趣を解
するやうな友が欲しく
なりだし、さうなると
田舎にはかかる友がな
いからして、都が戀し
い情も起る。すべて月
や花をば、何もさう目
でばかり見るものだと
は限つてゐない。春の
花の頃は家から花見に
出かけるでなくても、
又秋の月の夜はやはり
寢室の中にあるままで
も、花や月の情景を思
つてゐるのが、まこと
に一人ではあるが心強
く充分満足されて面白

○千里の外までながめたる——明月の光の明るさに、千里も遠い彼方のことが少しの曇りなく見えて、同時にそちらの人のことがまぎ／＼と想はれるとの意。この句は白氏文集十四、八月十五日夜禁中獨直。對月憶元九の詩句、「三五夜中新月色。二千里外故人心。」の句から思ひついたものである。○曉近くなりて待ち出でたるが——望月（十五日）以後の事で、もう月が出るだらうと思つてゐると、明方近くなつてやつと出て來た月がの意。「待ち出でたるが」「待ち出でたる月が」の意。○いと心ぶかう——非常に情趣深く。「心ぶかう」は、しんみりとして深い意味を持つたやうな情調のあるをいふ。有明の月は夜明け方に出るので、世間が寢靜まつてゐて、月そのものも形が小さいので、沈靜なしんみりとした感じが起るのである。○青みたるやうにて——青味を帯びたやうで。月光が青みがかつてゐるのをいふ。満月頃の月の光は白味が多いが、有明の月になるとだん／＼白味が失せて青味が勝つて來る、それを言つたのである。○ふかき山の杉の梢に見えたる木のまのかけ——これは深山の景色である。老杉の枝の間に見えて來る木の間の月をいふ。即ち杉の木の間からちら／＼と漏れて見える月である。○うちしぐれたるむら雲がくれのほど——時雨ぎはの雨を含んだ一團の雲に月の隠れて見える情景である。「しぐる」は秋の終頃、時々小雨がざあつと降つてくること。ここはこのしぐれる際の雨を含んだ雲を「むら雲」といつたのである。又この雲は空一面の雲でなく、かたまりをなして空に浮んだ雲である。「ほど」は、頃、間の意。この「ふかき山の杉云々」の句と、「うちしぐれたる云々」の句とは對立的になつてゐる。○またなくあはれなり——この上なく情趣の深いものはない。○椎柴——燃料雜用に供する材を柴といふ。檜柴、松柴の類の如し。椎柴は單に椎のことをいふ。○白樺

いものである。

——樺の一種である。普通にある樺（赤樺）に比しては葉の形狭く小さくして、椎の葉のやうに鋸葉あり、果實は赤樺より少し大にして、苦味少く食用に供せらる。古來歌文に椎や樺はよく出てゐる。○ぬれたるやうなる葉の上にきらめきたる——「ぬれたるやうなる葉」とは、葉の表面がつや／＼として居ること、水に濡れたやうに美しく光つてゐるのである。「きらめきたる」は、月光が照つてきら／＼と輝いてゐるさま。○身にしみて——その情景を見て、しみ／＼と身にこたへて感ずること。○心あらむ友がな——情趣を解するやうな友がほしいものだ。「心ある」は、情趣風流を解すること。「がな」は希求の意をあらはす感歎的助詞。ここは深山の中に一人暮してゐるさまであることが察せられる。○都こひしうおぼゆれ——以上のやうな深山の美景に接すると、田舎では風流を解する人もないので、京都がしみ／＼と戀しくなるといふのである。○さのみ目にて見るものかは——世間では月や花を一概に目で親しく見るべきものと考へてゐるが、何もさう一概に眼でばかり見るものでなく、心眼を澄して心で月花を感じなくてはならぬの意。「さのみ」は、さう何も。何もさう一概に。○春は家を立去らでも——わざ／＼花見に郊外へ出かけなくとも、花の春は家の中にとちこもつてゐても。下文の「思へるこそ」にかかる。○月の夜は閑のうちながらも——秋の月夜はやはり月見に出かけるのでなく、寢室の中に居るままで月を見ることをさす。○思へるこそ——實際の花や月を見ないで、今日あたりの花は見頃であらう。月はどんなに美しいであらうと、實際の光景を想像し思つてゐるのは。○いとたのもしうをかしけれ——心ある友はなく自分一人であるのであるが、まことに充分心強く満足され、又面白いものであるの意。ここは諸注いろ／＼の解はあるが以上の如く解するがよい。即ち「たのもしう」

は充分心強く満足されることをあらはしてゐる。

口譯 身分もよく物の
情趣のわかつた上品な
人は、無我夢中になつ
て物事を好み耽けると
いふ様子には見えな
い。又物事に楽しみ面白
がる様子もごくあつさ
りとしてゐる。教養趣
味のない邊鄙な田舎の
人に限つて、何事もし
つこく楽しみ面白がるも
のである。かかる田舎
人は花見などの時に
は、花の木の下にぐん
／＼と身をねぢてまで
も近寄り立寄つて、よ
そ目もせずちつと花を
眺めて、酒を飲み、連
歌をして楽しみ、さてそ
のしまひには大きな花
の木の枝を、風流な心

よき人は、ひとへにすけるさまにも見えず、興ずるさまも等閑なり。かた
田舎の人こそ色こく萬はもて興ずれ。花のもとにはねぢより立ちより、あ
からめもせずまもりて、酒のみ連歌して、はては大なる枝、心なく折りと
りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおり立ちて跡つけなど、萬の物よ
そながら見る事なし。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。見ごととおそし。その
ほどは、棧敷不用なりとて、奥なる屋にて酒のみ物くひ、圍碁、雙六など
遊びて、棧敷には人をおきたれば、「わたりさふらふ」といふ時に、各
肝つぶるるやうに争ひ走りのぼりて、落ちぬべきまで簾張り出でて、おし
あひつつ、一事も見もらさじとまぼりて、「とありかかり」と物ごとにい
ひて、わたり過ぎぬれば、「又わたらむまで」といひておりぬ。ただ物を
のみ見むとするなるべし。都の人のゆゆしげなるは、ねぶりていとも見

もなくねぢ折り取つて
しまふ。又夏などの時
には清冷な泉の流に手
をさし入れて掬ひ飲
み、遂には手の中につ
き込んで楽しみ、冬の
美しい雪の降つてゐる
ときは、美しく積つて
ゐる雪の上に降りて行
つて、履物の跡をつけ
てしまふなど、どんな
物でも、よそながら客
觀的に靜かに見るとい
ふ事なく、必ずそれに
觸れて見なくては承知
しない。そのやうな田
舎人の賀茂祭を見物し
た様子が、どうも珍妙
なものであつた。『祭の
行列のお通りはまこと
に遅い。その間は棧敷
に居る必要はない。』と
いつて、棧敷の奥の方
である家の座敷で酒を

す。若くすゑく／＼なるは、宮仕にたちる、人の後にさぶらふは、さまあし
くも及びかからず、わりなく見むとする人もなし。

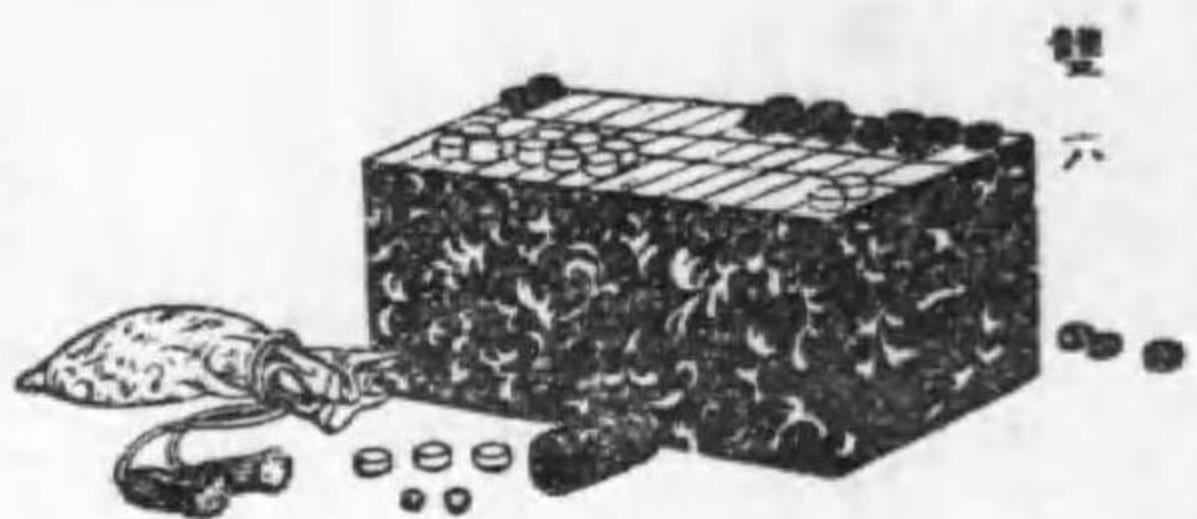
語釋 ○よき人——身分も高く、物の情趣も分つた上品な人をさす。第十段のよき人参照。○ひ
とへにすけるさまにも見えず——一概に好くといふ有様もない。「ひとへ」は一途に、ひたすら、
一概にの意。即ち何事についても、むやみやたらに好み耽けるやうな所がない。○興ずるさま——
楽しみ面白がる有様。○なほざりなり——疎略である。あつさりとしてゐる。○片田舎——邊鄙
な田舎のこと。「かた」は都から遠く離れ片寄つてゐることをさす。片山里も同様。○色こく——
しつこく。濃厚に。あくどく。○萬はもて興ずれ——萬事をば楽しみ面白がる。「は」は「をば」
の意。「もて」は、「それによつて」「それをして」の意。○花のもとにはねぢより立ちより——
「花のもと」は、花の咲いてゐる木の下。「ねぢより」は、人を押し分け、自分の身をねぢるや
うにしてぐん／＼と近寄ること。「立ちより」は、だん／＼と近くに寄ること、上の語の意を
更に強く言つたものである。○あからめもせず——わき目もせず、よそ目もせないこと。○まも
りて——見守つて。見つめて。○連歌して——第八十九段に既出、その條参照。○はては——し
まひには。○心なく折りとりぬ——風流な考もなく折り取つてしまふ。○泉には——清水の湧き
出でてゐるところ。但しここはその流れをも廣く含めて言つてゐる。さてこの文句からは、前文
の遊山の場合とは別の事を叙してゐると思はれる。正徹本や傳阿齊本にては、「泉にては」とな
つてゐる。○手足さしひたして——夏の暑い頃などにては、清冷なよい水だといつて手をさし伸

第百三十七段

飲み、御馳走を食ひ、
 碁をうち、雙六などを
 して遊んで、棧敷の方
 には番人をおいてある
 から、その番人がやが
 て「祭の行列がお渡り
 になります」と言ひ知
 らせる時には、各々は
 びつくりしたやうに、
 争ひ走つて棧敷に上
 り、棧敷の前方端に居
 るものは、落ちさうに
 なるほど、簾を前方に
 張り出して、押しあひ
 へしあひ、行列の何れ
 の一つをも見通すまい
 と見守つて、あゝだ、
 かうだと一々批評を
 し、その行列が通り過
 ぎて了ふと、「又次の行
 列が通るまで奥の方に
 入らう」と言つて棧敷
 を下りて奥座敷の方に
 行く。祭の前後の気分

して拘つて飲む、果は足をその中にさし入れて喜ぶといふのである。傳幽齋本や正徹本には、終
 の「て」の文字なし。その方がよいやうに考へられる。○おり立ちて——庭上に積つてゐる雪
 であらう。縁側などから下りて、庭に立つのである。○跡つけなど——美しい積雪の上に足跡な
 どをつけて歩くのである。○よそながら見る事なし——よそにあるままの状態として見る事はな
 い。即ち物を客觀的に見て楽しむことなく、必ず直接それにさはつて見なくては承知が出来ない。
 ○さやうの人——そのやうな無趣味な片田舎者。○祭見しさま——賀茂祭を見物したときの實際
 の有様。祭のことは第十九段参照。○いとめづらかなりき——まことに珍妙なものであつた。こ
 こは單なる珍しい意でなくして、變挺な珍妙なものであつたことをいつてゐる。○見ごと——見
 るべきもの。見るべき事。ここでは、祭の行列をさしてゐる。この見事の語は儀式だけなる行事
 のことをいふ。御堂關白記、長保六年十月十七日の條に、内裡にて義奉仕の後、御遊和歌などあ
 つたことを記し、「有御樂事。有和歌。賜上達部御衣、殿上人疋。見事了。遣出。」とある。
 ○そのほどは——その間は。祭の儀式行列が来るまでの間は。○棧敷不用なり——「棧敷」は、
 一段と高く構へた床のこと。賀茂祭の時には、往來の通りに面した家々では、家の前に棧敷を構
 へて見物したもので、ここはそこへ招かれたか何かして來た人の事である。「不用なり」とは、
 無用である。必要がないこと。棧敷に居ても何にもならぬの意。當時棧敷には簾を垂れ、二葉葵
 をかけ、薄縁(疊)を敷いたものである。○奥なる屋——棧敷は祭見物のために、家の前に特に
 設備されたものであるから、その棧敷からいふと、奥なるはその家の方をさし、屋は家のことで
 ある。ここでは家の座敷といふことになる。○圍基雙六——いづれも第百十一段に既出同條参照。

とか、情趣とかを味は
 うといふ餘裕は少しも
 なく、ただ行列そのも
 のをばかり見ようとす
 るのであらう。之に反



して、都の人の身分あ
 りさうな人は、行列が
 通つてきても、目をつ
 ぶつてゐてよくも見
 ず。又若くて身分の低
 い都の人々は、それぞ

○人をおきたれば——祭の行列が來たら、直ちに家の座敷にゐる人々へ、それを通告するために、
 棧敷には番人を置いてあるわけである。○わたりさふらふ——只今祭の行列が通ります。「わた
 る」は通るとか、通過すること。○各肝つぶるやうに争ひ走りのぼり——酒飲んだり、圍基、
 雙六などして家の座敷にゐた人々が、驚きあわてふために走り出でて、棧敷に上るのである。
 「肝つぶる」とは、いたくおどろくこと。びつくりすること。○落ちぬべきまで——落ちさうに
 なるまで。後から／＼と押しかけてくるので、棧敷の端にゐるものは押されて落ちさうになるの
 である。○簾張り出でて——簾は棧敷の前に掛けてあるので、人々が後から／＼と押されて、は
 み出されるので簾は往來の方へ飛び出るやうになるさまをいふ。○おしあひつ——棧敷の上の
 人々が互に押合ふこと。○一事も見もらさじとまぼりて——祭の行列のさまを一つも見落すまい
 と一生懸命になつて眺めてゐて。「見もらさじ」とは、見通すまい。「まぼりて」は、「まもりて」に
 同じく凝視すること、或本には、まもりてとなつてゐる。○とありかかり——あだかうだと見
 ながら批評しあふこと。○わたりすぎぬれば——行列が通り過ぎると。「わたりすぎ」は熟語の
 動詞。○又わたらむまで——又次の行列が通るまで。正徹本「又わたらむほど」とある。○
 おりぬ——棧敷を下りて家の座敷の方へ行くのである。○ただ物をのみ見むとするなるべし——
 かかる田舎人は祭の行列の物だけを見ようとするのであらう。その行列の前後の気分情調を味ふ
 考へは少しもない。○ゆゆしげなるは——立派な身分らしく見える人は。○ねぶりて——眠りて。
 ○いとも見ず——そんなによくも見ない。「いと」は通例、形容詞を修飾する副詞であるが、時
 に動詞を修飾することがある。而してその動詞は必ず打消の語を伴ふ。このときの意は、あま

れ仕へて用をなしてゐる主人公のために、立つたり坐つたりして、御用をつとめ、又都のもので、見物人の後方にゐる人は、不體裁にも上半身を前によりかかつて、頭を前に出すやうなことはしない。凡て田舎人のやうに無茶に無理をして祭のさまを見ようとするとする人もない。

口譯 ずうつと一體すべてに、二葉葵をかけた渡して優美上品な光景である、さうした所へまだ夜も明け離れぬ頃に、こつそりと人に見立たぬやうにして、物

り、そんなに、たいして、よくもなどの意になる。此場合「も」の助詞を添ふこと多し。第五十七段、第四十一段にその例がある。○若くすゑ／＼なるは——まだ年が若くて身分の低い者は。(これも同じく都の人である) ○宮仕にたちる——祭見物に来てゐる都の主人の用事の爲めに立つたり坐つたりして働いてゐること。「宮仕」は宮中に仕へることばかりでなく、貴人の家に仕へる場合にもいふ。これはその意味である。○人の後にさぶらふは——これも主人のお伴をしてゐる身分の低いものが、主人の後方に侍してゐるのは。○さまあしくも及びかからず——「さまあしく」は、見苦しい様にも、不體裁な有様にも。「及びかからず」は、上半身を前方に傾け、頭を前の方へ出すさまをせない。伸しかかつて見るやうな事をしない。○わりなく見むとする人もなし——見えないのを、無理にも見ようとするとするやうな人はない。「わりなく」は、無理に、無茶にといふこと。

何となく葵あひろかけわたしてなまめかしきに、明離あきはなれぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなと思ひよすれば、牛飼うしかひ、下部しもべなどの見知れるもあり。をかしくもきら／＼しくも、さま／＼に行きかふ見るも、つれ／＼ならず。暮るるほどには、立てならべつる車ども、所なくなみうつる人も、いづかたへ行きつらむ、程なくまれになりて、車どものらうが

はしきもすみぬれば、簾すだれ たたみもとりはらひ、目の前にさびしげになりゆくこそ、世のためしも思ひ知られて、あはれなれ。大跡おほあと見たるこそ、祭見たるにてはあれ。

見車を棧敷のところへ近づける車には、誰が乗つて來られたのか知りたいたい氣持がするので、その車にはあの人が乗つてゐるのか、それとも彼の人が乗つてゐるのかなどと推察してゐると、その車に従つてゐる牛飼童や、下部男どもの中に、見知りの者がまじつてゐるものもある。(従つてそれらの車の主はすぐわかるわけである) さうした物見車の或るものは、優美なさまであり、或車は華美に飾り立て

語釋 ○何となく——運歩色葉集などに、「無大小」と書いて、なにとなくとよんでゐるが、これによると總べてに亘つてといふ意味になる。ここはこの意味であつて、賀茂祭の當日は總べての物に葵を懸け渡してといふことになる。太平記卷一に、「今度の春宮をば持明院殿の御方に立進たしせらる。天下の事小大となく、關東せらひの計として觀慮にも任せられざりしかば云々」とあるのもこの意である。又、この「何となく」の語を、「なまめかしき」にかかるとして考へられる。然し前者の解がよろしからう。諸注には、「かけわたして」にかかるとして解してゐるのはよろしい。○葵かけわたして——「かけわたす」は、そのあたり一帯にずつと懸けることをいふ。ここは簾や柱などにあたり一帯に亘つて葵の葉がつけてあるをいふ。祭のときには種々の調度にもつける。これこの祭を葵祭といふことになつたのである。枕草子に、「葵いとをかし。祭のをり、神代よりして、さるかさしとなりけむ、いみじうめでたし。物のさまもいとをかし」とあるから、遠き昔からこの祭は有名であつた。○なまめかしきに——優美上品な光景である。さうした所へ。○明離れぬほど——まだ夜がすつかり明けてしまはない暗い頃に。○忍びて寄する車どものゆかしきを——牛車に乗つてゐる人が、自分が誰であることを他人にわからないやうに、朝まだ暗いうちに棧敷のあたりに寄せつける物見車の主が、誰だらうかと思ふ

てあつて、かくさまざまに飾つた美しい車の行きちがふを見てゐるのも退屈をしない。ところが日が暮れる夕方には、今まで立て並んであつた多くの車も、棧敷の上に隙間もなく並んでゐた多くの人も、どこへ行つたのだらうか。程なく少なくなつて、物見車の歸りの混雑もすんでしまふと、棧敷にかけてあつた簾や疊も取り拂ひ、目前に如何にも淋しい光景になつてゆく、そのさまを見ると、浮世

を。當時、この祭のときには、貴人たちは車を棧敷の下に寄せて、車の中から簾越しに見物するのが例であつた。この車の主人は恐らく婦人と思はれる。「ゆかしき」は誰の車かと、その主人が知りたいと思ふ追求の興味を持つた語。○それかかれかなど——その人か、彼の人か。あの車はあの某の人かなあ、それともかの某の人が乗つてゐるのかなと推量すること。○思ひよすれば——思ひよせると。推量して見ると。○牛飼下部などの見知れるもあり——「牛飼」は牛飼童のこと、即ち牛車の牛を扱ふもの。第百十四段参照。「下部」は召使の男。牛車に伴をして來てゐるこのやうな牛飼や下部の中には、自分が以前から顔見知りのものもある。従つてその主人は言ふまでもなく知つて居るわけである。○をかしくもきら／＼しくも——或車は優美なさまであり、又或車は華美に飾り立てて。勿論物見車の有様を言つてゐるが、それに乘つてゐる女の服装も含まれてゐる。「をかし」は美しいとか、上品に美しい、愛らしく美しい事。源氏物語桐壺の巻に、「宮の御腹は藏人の少將にていと若うをかしきを」。宇津保物語忠こそに、「十六歳といふ年の五月五日に、玉光り輝きたる男のいとをかしげなるを生み給へり」とあるのはその例證にして、「趣ある」と譯してはならぬ。○行きかふ見るとつれ／＼ならず——物見車が行きちがふさま／＼のさまの美しいのを見るのも、退屈しない。さて「をかしくも云々……行きかふ見ると」を別に考へて、往來する人の姿となし（車でなく）て解してある本もあるが、當時歩いてゐる身分の人には、「をかしくもきら／＼しくも」といはれる人はあるまい。そのやうな人は車である筈だから、ここではすべて牛車の情景として解いて置いた。○暮るるほどには——日が暮れる夕暮の頃には。○所なくなみあつる人も——隙間なくその邊一杯に立並んでゐる人々も。これは主と

の榮枯盛衰、會者定離といふやうな果敢ない實例も自然に感ぜ知られて、實に悲しく感慨無量である。斯うした朝から日暮の都大路の當日の光景をすべて見たのこそ、眞に祭を見たといふものである。

して棧敷の上に居た人々をさすものである。○車どものらうがはしきもすみぬれば——「らうがはし」は、亂がはしの音轉。混雑、雑沓のこと。物見車の行つたり來たりして、騒々しく亂雑であつたさまも止むと。○簾たたみ——棧敷に掛けてあつた簾や、敷いてあつた疊のこと。和訓栞のたたみの條に、「たたむを體にいふ詞なり。（中略）古へのたたみは、今云、薄縁の類なるべし」とある。但し、たたむは折たたむ意に非ず。幾枚も敷重ねる義であると本居宣長は言つてゐる。○とりはらへ——取り除くこと。○目の前にさびしげになりゆくこそ——眼前に寂しくなつてゆく様を見せつけられては。○世のためしと思ひ知られて——世の中の榮枯盛衰、會者定離の實例が悟られて。「思ひ知る」とは悟るといふやうな意。○あはれなれ——悲しい情調が湧く。感慨無量である。○大路見たるこそ——世間の人々は、祭の行列を見るのを、祭を見ることが考へてゐるが、本當に祭を見るときといふのは、さういふのではない。「大路」即ち都の大通りに人や物見車の混雑する様、又その祭の行列が終つて、車や人々が去つて寂しくなつてゆく夕べの情景、さうしたその日に於ける都大路の變化のすべてを見たのこそ、祭を眞に見たといふものである。○大路見たるこそ」は、正徹本には「とおぼえたるこそ」となつてゐる。

口譯 かの棧敷の前を
あちらこちらと、往き
來してゐる人の中に
は、見知りの人が大勢

彼の棧敷の前を、こころ行きかふ人の見知れるがあまた有るにて知りぬ。
世の人数もさみは多からぬにこそ。此の人みな失せなむ後、我が身死ぬべ
きに定まりたりとも、程なく待ちつけぬべし。大なる器に水を入れて、

あるのでわかる。それは世の中の人數も、思つたほどそんなに多くはないといふことである。今假りに是等の人が皆死んでしまつた後に、自分が死ぬべきものと定つてゐるとしても、自分は間もなく死に出逢ふであらう。大きな器物に水を入れて、それに細い穴をあけたとしたら、滴ることは少しでも、休むひまもなく漏れて行つたら、やがて器中の水は無くなつてしまふだらう。都の中には多くの

細き孔をあけたらむに、滴る事すくなしといふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中におほき人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならむや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山にも、送る數おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、作りてうちおく程なし。わかきにもよろず、つよきにもよらず、思ひがけぬは死期なり。今日までのがれ來にけるは、ありがたき不思議なり。しばしも世をのどかに思ひなむや。まま子立といふものを、雙六の石にてつくり立て並べたるほどは、とらむ事いづれの石とも知らねども、數へあてて一つをとりぬれば、その外はのがれぬと見れど、又々數ふれば、彼是まぬき行くほどに、いづれものがれざるに似たり。兵の軍に出づるは、死に近き事を知りて家をも忘れ身をも忘る。世をそむける草の庵には、閑に水石をもてあそびて、是をよそに聞くと思へるは、いとはかなし。しづかなる山の奥、無常のかたき、きはひ來らざらむや。其の死に臨めること、軍の陣に進めるにおなじ。

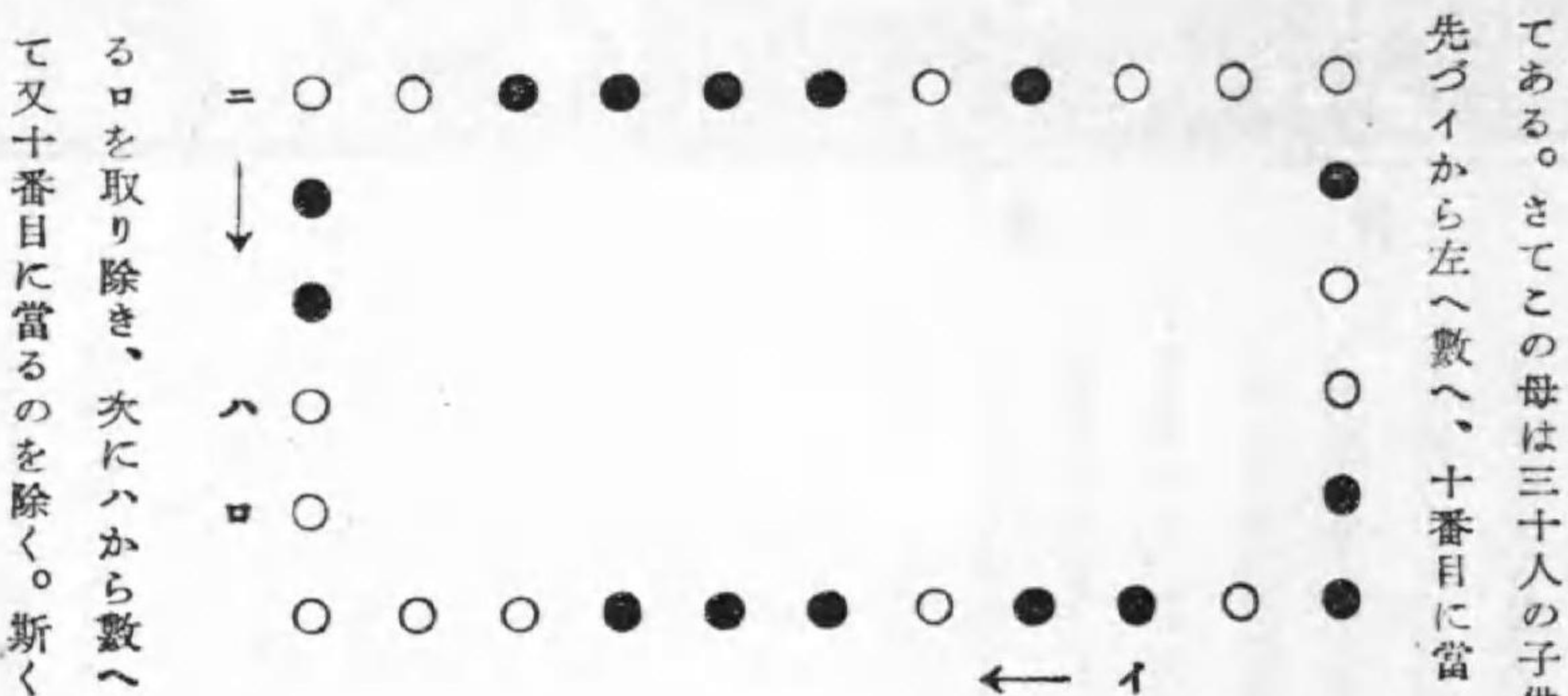
人が住んでゐるが、死人のない日は一日としてあることがないだらう。その死ぬ人も一日に一人や二人の少數ではない。鳥部野や舟岡山などの火葬場には勿論、その他の野や山の火葬場に死人を送ることの多いことはあつても、一人も死人を送らない日はない。さういふわけだから、柩を賣る者は柩を作りて店にそのままにして置く間はない。すぐ賣れてしまふのである。年が若いから死なないとか、

語釋 ○かの棧敷の——「かの」(彼の)は 普通に「こち行きかふ人」の「人」にかかるものとしてゐる。然し、又、棧敷を指定した詞と見て、「如上の」「今迄述べ來つた」棧敷と考へてもよい。○こち行きかふ人の見知れるがまた有る——「こち」は澤山に、あまたの意。有るにて」は、有るによりての意。あちこちと澤山に行きちがふ人々の中に、自分が以前から見知つて居る人が澤山あるのによつて。○知りぬ——これは倒置法になつてゐるのであつて、「世の人數もさのみ多からぬにこそ」といふ事實が、上文の事實、「見知れるが數多ある」との事によつて分つたといふ思想を述べてゐる。第八十五段にもこの用法あり。正徹本には「おもへば」となつてゐる。○世の人もさのみは多からぬにこそ——世間の人々の數は餘程多いやうに思ふが、かうして自分の見知れる人に逢ふことから考へて見ると、左程多いものでない。○此の人みな失せなむ後——この棧敷の前の雜沓してゐる多くの人々が皆死んでしまつてから、最後に。○我が身死ぬべきに定まりたりとも——自分の身が死ぬべきものにきまつてゐるとしても。○程なく待ちつけぬべし——死といふものを待つてゐて、まもなくその死に逢ふだらう。つまり、間もなく死なねばならぬだらうの意。「待ちつく」とは、待つてゐて逢ふこと。○細き孔をあけたらむに——小さい孔をあけたやうな時に。○滴ることすくなしといふとも——その細孔から滴り落ちる水の分量はたとひ少いとしても。○怠る間なく——絶間なく。始終。○やがて盡きぬべし——間もなく器の中の水は無くなるだらう。○死なざる日はあるべからず——人の死なない日は、一日だつて決してない。「あるべからず」は、決してないこと。○一人二人のみならむや——死ぬ人は一日に一人や二人であらうか、さうでない、もつと澤山である。○鳥部野——洛東の墓地、

健康であるから死なな
いとかするものではな
い。若くても強健であ
つても、思ひもかけな
いのによつて来るもの
は死の時である。今日
までその死を遁れて生
きながらへて来たのは、まことに珍しい不
思議である。暫くでも
人生をのんきに考へて
はゐられない。織子立
(ママコダテ)といふ
遊びを雙六の石で作つ
て、それを並べた時に
は、取られる石はどれ
ともわからぬが、數へ
あてて十番目にあたる

火葬場の名。第七段鳥部山の條參照。○舟岡——京都の紫野の南に横たはる小丘。大内裡の東北
方にあたる。雍州府志、山川門、愛宕郡に、「船岡山。在千本之東北」とある。墓地であり、
火葬場である。○さらぬ野山——さうでない野や山。即ち鳥部野や舟岡山以外の野や山にの意。
○送る數おほかる日はあれど——送葬の數の、平生よりも多い日はあるけれども。傳齋本、正
徹本にては、「あれど」が「あれども」となつてゐる。○送らぬ日はなし——遺骸を火葬場に送
らぬ日はない。○棺をひさぐもの作りてうちおく程なし——死人を納める棺をつくつて賣る者は、
それを作つて店に置く間はない。すぐ賣れてしまふ。即ち死人が始終あることをあらはしてゐる。
「ひさぐ」は賣ること。「うちおく」のうちは接頭語にして意味なし。○わかきにもよらずつよ
き云々——年が若いからまだ死なぬとか、健康であるからまだ死なぬといふことはない。そのや
うな事は、一向あてにならぬ。いつ何時死がやつて来るかわからぬ。全く思ひがけぬ時にやつて
来るのは死ぬべき時節である。○今日までのがれ來にけるは——今日まで死を免れて生きて來た
ことは。○ありがたき不思議なり——珍しい不思議なことである。「ありがたき」は、有り、
いの意で、珍しいとか、類稀なるの義。○しばしも世をのどかに思ひなむや——暫くの間でも、
世の中のことをのんびりと考へて暮されようか、そんなことはとても出來ないといふこと。正徹
本や大成本には、「のどかに」のはの字なし。○ままた子立——「ままた子立」は「織子立」と書
き、子供三十人を圓形に並べて置く。この三十人の子供は或母親の子供で、その中の十五人はこ
の母の實子で、他の十五人は前の母の子供である。さてこの母が家の財産を一人の實子に相續さ
せるために仕組んで圓形に並べたのである。その並びかたは争ひが起らないやうに數學を利用し

右を一つづつ取ると、
その外の石は取り除か
れる事を免かれたやう
に見えるが、數へて行
つて十番目にあたる石
を取除くと、あれこれ
とだん／＼石を抜き取
る間に、結局どれもこ
れも皆取られてしま
ふ。世の中の人がだん
だん死んでゆく中に、
自分も又死んでしま
ふのは、この織子立と
よく似てゐる。武士の
戦陣に出る者は、死に
近いことを知つて、家
庭のことも忘れ、一身
上の事をも忘れる。世



る口を取り除き、次にハから數へ
て又十番目に當るのを除く。斯くして最後に残つた子供に財産全部を與へるとのことにした。さ



賀 茂

てかくして數へ出して見ると、繼子はだん／＼無くなつて一人(ニ)だけになり、實子は一人も除かれなかつた。このとき一人の繼子が悲しい顔をして、「お母さん、あまり片一方ばかり除きますから、今からは私から數へて下さい」といつた。そこで繼母もたつた一人の繼子のいふ事であるし、それに一人と十五人のことだからそのうちに實子は誰か残る事であらうと思つて、最後の繼子(ニ)から反對に右へ數へて行つたところが、實子は皆なくなつて、繼子(ニ)のみが残つて、遂に全財産を受繼いだといふことである。これを數字にて示すと、(○印は實子を示す。)

○ 2. 1. 3. 5. 2. 2. 4. 1. 1. 3. 1. 2. 2. 1.

となる。さてこの配列算法は、和算にては、繼子立算とも計子術ともいひ、その考案者は藤原信西である。信西は保元の亂に活動した人物であつて、藤原通憲の薙髮後の稱(初めは圓空)である。その任官によりて日向守通憲とも少納言通憲ともいふ。彼は鳥羽、崇徳、近衛、後白河の四朝に仕へ、平治の亂に於て藤原信頼、源義朝等に殺されてしまつた。この人頗る典籍に通じた學者である。この日向守通憲が繼子算の問題を作りて幼童を導きたるものといふ。和算の學者である吉田光由は寛永四年に塵劫記三卷を著す。世人大に是を重寶す。その下巻の發端に繼子立と題するものがあり、その題辭既に世人の注意を惹くばかりでなく、勸



祭 の

善懲惡の意を寓するところあり、これから和算中の繼子算は特に有名となる。その文に曰く、「子卅人有、内先腹の子十五人、當腹の子十五人如此ならべて十に當るをのけて、又廿に當るをのけ、廿九人迄のけて、残る一人にあとを讓候はんと云時に、繼母如此立たる也。倍數へ候へば先腹の子皆のき候ゆえ、一人残りたるまゝ子の云様、あまり片一双にのき申候間、今よりは我からかぞへ玉へといへば、是非に及ばずして一人残りたる先腹の子より數へ候へば、當腹の子皆のき残る一人跡を取る」とある。此文章中には先腹の子一人残りたる時、前とは逆に進みて數ふるといはないが圖中にこれを明かにしてゐる。○雙六の石にてつくりて——雙六のことは、第百十段參照。ここはその雙六の黑白十五づつの石をとりて、まゝ子立をつくりてなすのである。當時この繼子立は一種の遊戯のやうになつて行はれてゐたやうである。雙六は嵯峨本、傳幽齋本、正徹本には假名にて、「すぐろく」とある。○立て並べたるほどは——石を並べ置いてまだ取り始めない間は。○とられむこといづれの石——取りのぞかれるのは、どの石であるか分らぬけれどもその意。○數へあてて——最初イの石から數へて、十番目の石口を數へあてて。○その外はのがれぬと見れど——初めは口の石だけが取られたのであるから、その時は口の外の石は皆助かつたやうに見えるが。「のがれぬ」は、通れたで、通れないの意ではない。○彼はまぬき行くほどに——あちらこちらと順次に間の石を抜取つてゆくうちに。「彼是」は、あちらこちらのこと。「まぬく」は、並ん

の中から通れた山村の粗末な家にゐる人は、静かに泉水、庭石の幽景を楽しんで、戦ひなどは没交渉だと思つてゐるが、それは實にはかない事である。静かな山奥だからとて、どうして無常(死)の敵が勢こんで攻めて來なからうか、すぐやつてくるのである。その死に臨んでゐることは、戦陣に進み出でてゐる場合と同じである。

で居るものの中から抜取ること、「間引く」といふのと同じ。○いづれものがれざるに似たり——すべての人が漸次死んでゆくのは、このまま子立のどの石も取られるのを免れないで、しまひにすべて取られてしまふのに似てゐる。「のがれざる」は、「石がとられることを免れないのをいふ。○家をも忘れ身をも忘る——どうせ近いうちに戦場で死なねばならぬと思つてゐるからして、家庭の事や、一身上の事などは忘れて一生懸命に戦ふ。正徹本や傳齋本には「も」は二つともない。○世をそむける草の庵——俗界から離れ去つて、世人と没交渉な野や山の粗末な庵に住んでゐるものは、「草の庵」とは、ここでは、草葺の粗末な家といふことで、隠遁者の住居をいふ。○水石をもてあそびて——泉水や庭石の趣ある景色を見て樂むこと。「水石」とは、泉水ともいひ、泉水や庭石のこと。○是をよそに聞くと思へるは云々——是は、戦をさす。戦死などいふことは、全くよそごとで自分には關係が少しもないと思つてゐる、その考へは淺はかである。○しづかなる山の奥——人里から遠く離れた閑静な山の奥の住居にも。○無常のかたき——無常の敵。「かたき」は、「兵の軍」の縁語である。勿論こゝは死をさしてゐる。○きほひ來らざらむや——勢よく押寄せて來ることが無からうか、それは押寄せてくるとの意。○其の死に臨めること——山の奥の庵に住んでゐる静かな隠遁者が、やはり死に直面してゐること。さういふ人にも死が近づいてゐることをいふ。○軍の陣に進めるにおなじ——戦ひの場所に進み出でて、死の危険に直面してゐると同じくやがて死なねばならぬ。

第三百三十八段

祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、或人の御簾なるを皆とらせられ侍りしが、色もなく覺え侍りしを、よき人のし給ふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防内侍が、

かくれどもかひなき物はもろともに

みすのあふひのかれ葉なりけり

とよめるも、母屋の御簾に葵のかかりたる枯葉をよめるよし、家の集に書けり。ふるき歌の詞書に、「枯れたる葵にさしてつかはしける」とも侍り。枕草子にも、「こしかたこひしき物、かれたる葵」と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季物語にも、「玉だれに後の葵はとまりけり」とぞ書ける。おのれと枯るるだにこそあるを、名残なくいかがり捨つべき。御帳にかかれるくす玉も、九月九日菊にとりかへらる

口譯 賀茂の祭がすむと、後の葵はもう不必要であるといつて、或人が御簾に掛つてゐる葵をすつかり取らせられなきつたが、自分(兼好)はそれを見て、どうも風流氣のないやりかただと思ひました。然しそれは立派な方のなさることであるからして、さうすべきものかと思つたが、周防内侍が、次のやうに、

いくら掛けておい

ても甲斐のないものは、あの方々と共に見る事の叶はない籬の葵の枯葉である。即ちいくらあの人に思ひを

かけた所で、斯うして離れぬになつて、逢ふ日のない二人の中だから、何とも致方がない。

と歌によんだのも、母屋の御籬に掛つてゐた葵の枯葉を詠んだものであるとのことが、周防内侍の家集に書いてある。古歌の前書にも、

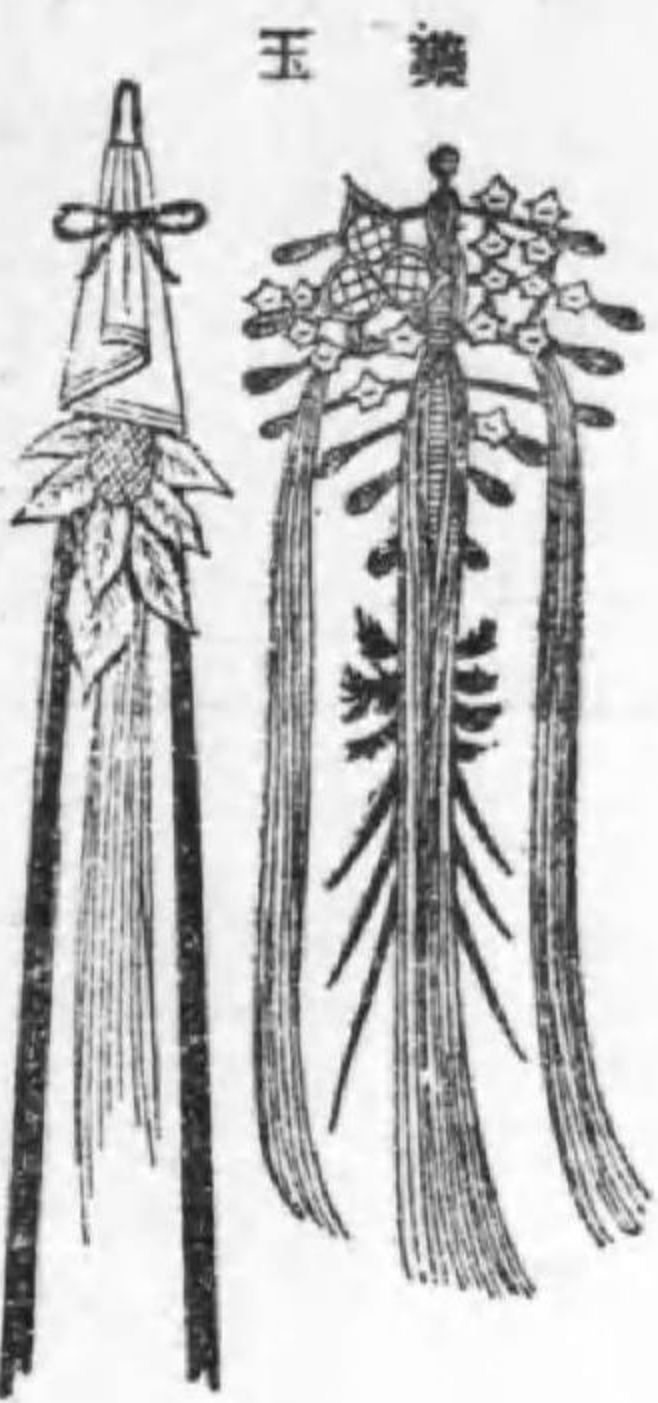
るといへば、さうぶは菊のをりまでもあるべきにこそ。枇杷皇太后宮かくれ給ひて後、古き御帳の内に、さうぶ、くす玉などの枯れたるが侍りけるを見て、「をりならぬねをなほぞかけつる」と、辨乳母のいへる返事に、「あやめの草はありながら」とも江侍従がよみしぞかし。

語釋 ○祭過ぎぬれば——賀茂祭が過ぎてしまふと。○後の葵不用なりとて——「後の葵」とは、賀茂祭が終つた後も、當日の葵の飾りをそのままにして置くのをいふ。「不用なり」とは、もういらぬと言つて。○或人の御籬なるを皆とらせられ侍りしが——或人は或人がの意。御籬なるを、御籬に掛つてゐる葵を。とらせられは、人をして取去らせられたとの意。○色もなくおぼえ侍りしを——風流氣のない仕方だと思つたが。色とは風流味とか、情趣、情味のこと。おぼえ侍りしは、傳聞齋本や正徹本には、侍りの二字なし。恐らくその方原形に近いものだらう。○よき人の——教養あり身分のよい人の意。○さるべきにや——やはりさうすべきのであるのか。さうするのが至當であるのか。○周防内侍——後冷泉院の女房といふ説と白河院の女房と云ふ説との二つがある。後拾遺集哀傷部の内侍の歌の詞書に、「後三條院位につかせ給ひての頃（中略）先帝の御事など思ひいづる事や侍りけむよめる」とあり、同雜一に、「後冷泉院うせ給ひて（中略）後三條院位につかせ給ひて後七月七日参るべき由仰せ侍りければよめる」とあるので、後冷泉、後三條二代に仕へた女房であることがわかる。金葉集雜上「堀河院の御時云々」の詞書あ

「枯れた葵にさし添へて送つた歌」といふのもあります。枕草子にも、「過ぎ去つた昔の戀しいものは、枯れた葵である」との意味が書いてあるのは、自分（兼好）がよむと、清少納言のあの言が如何にもなつかしう思ひつかれるのである。鴨長明の著作である四季物語の中にも、「玉だれに後の葵はとまりけり」と書いてある。葵が自然に枯れるのでさへ惜しいものであるのを、どうしてすつかり取捨てられ

る源俊頼の歌の連歌を勅命によつて内侍が返してゐるので、これによつて内侍は堀河院の御時にも猶仕へてゐたことが知られる。又、大江匡房の家集に、周防内侍が死んだ時の歌があるので、匡房の薨去した天永二年以前に亡くなつてゐるのがわかる。故に後冷泉、後三條、白河、堀河の四帝に仕へ奉つた女だといはれてゐる。彼女は平繼仲の女で仲子と號したとの説と、他に平棟仲女、平宗仲女等の諸説がある。その歌は、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新勅撰、續後撰、續拾遺、玉葉、續後拾遺、新千載、新拾遺、新後拾遺、新續古今、高陽院歌合にある。○かくれどもかひなき云々の歌——「かくれど」は、葵を御籬などに懸けること、思ひをかけるとの兩意を含ませ、「みす」は、御籬と見すとを、「あふひ」は、葵と逢ふ日を、「かれ葉」は、枯葉に、離ればの兩意を何れも言ひ懸けた語である。一首の表面の意味は、懸けてあつても甲斐のないものは、自分の思ふ人と諸共に見ることの出来ない御籬の葵の枯葉であるといふことで、その内面には、幾ら思ひを懸けても戀ひ慕つてゐても、詮ないものは相互に見ずして、逢ふ日の途絶え行くことであるの戀心を含めたものである。○母屋の御籬に葵の云々——「母屋」（モヤ）は、寢殿の真中の部屋。周囲の子廂、孫廂などに對して、棟の真下にあたる主家の義。ここの御籬といふのは、母屋と廂の間との間に掛けてある御籬をいふ。この籬に掛けてある葵の枯葉を、歌に詠んだといふ事が。つまりそのやうな詞書の文句がの意。○家の集——家集のこと。一個人の作歌を集めた歌集をいふ。是れは勿論、周防内侍の家集であるが、現在は残存してゐない。○ふるき歌の詞書——「詞書」は第三百三十七段の初めに出てゐるから参照。ふるき歌とは、漠然と古歌の詞書といふことであるが、例へば新古今集戀四の「はやう物申しける女に枯れたる葵をみあれの

よう。そのやうなことは出来ない。御帳臺にかかつてゐる薬玉も、九月九日に菊にとりかへられるといふ事だから、菖蒲は菊にとりか



へられるその折まであるべきものである。枇杷皇太后宮が崩御あそばされて後、古い御帳臺の中に、菖蒲、薬玉などの枯れたのがあつ

日つかはしける實方朝臣。古のあふひと人は咎むともなほそのかみの今日ぞ忘れぬ」などの如きをさす。「詞書」は正徹本に「ことがき」とあり、傳幽齋本には、「こと書」とある。○枯れたる葵にさして云々——歌を書いた短冊の如きを、枯れた葵に添へて人に贈るときは、歌の意。「つかはしける」は、「つかはしけるその歌」といふ意の詞書である。前の實方の歌の詞書はこれに似たものの一つである。この詞書のある古歌が別にあつたものであらう。○枕草子——平安朝の清少納言の隨筆で注するまでもあるまい。○こしかたこひしき物——それを見るにつけて、しみ

と過ぎし昔の戀しいものは枯れた葵である。つまり枯れた葵を見ると、面白かつた祭の當日のことが思ひ出されてなつかしいこと。枕草子に、「過ぎにし方戀しきもの、枯れたる葵、ひな遊びの調度云々」とある。○いみじくなつかしう思ひよりたれ——枯れた葵に着目した清少納言の心情を、兼好がいみじくも思ひ、懐しくも思つたのである。但、いみじくは次の「なつかしう」だけにかけて、甚だの意味にもとれる。「思ひよる」は、思ひつくとか、考へ浮んだの意。ここは兼好が清少納言の言をほめてゐるのである。塚本氏は、「ここは清少納言が、來し方の戀しいものをいふにつけて、枯れた葵を其の一つに挙げたのは如何にもなつかしい思ひよりだといふ心持であらう」といつてゐられる。然し句解に「よき趣向とほめたる義也」とある如く、「こし方こひしき物、かれたる葵」と書いた清少納言の事實について兼好がいかに面白い、なるほど面白いとほめてゐるので、前説のやうに解するのが妥當である。「思ひよる」は、さうと思ひつく。そのつもりとなるの義。○鴨長明——賀茂神社の禰宜長繼の子。管絃に巧で歌を俊

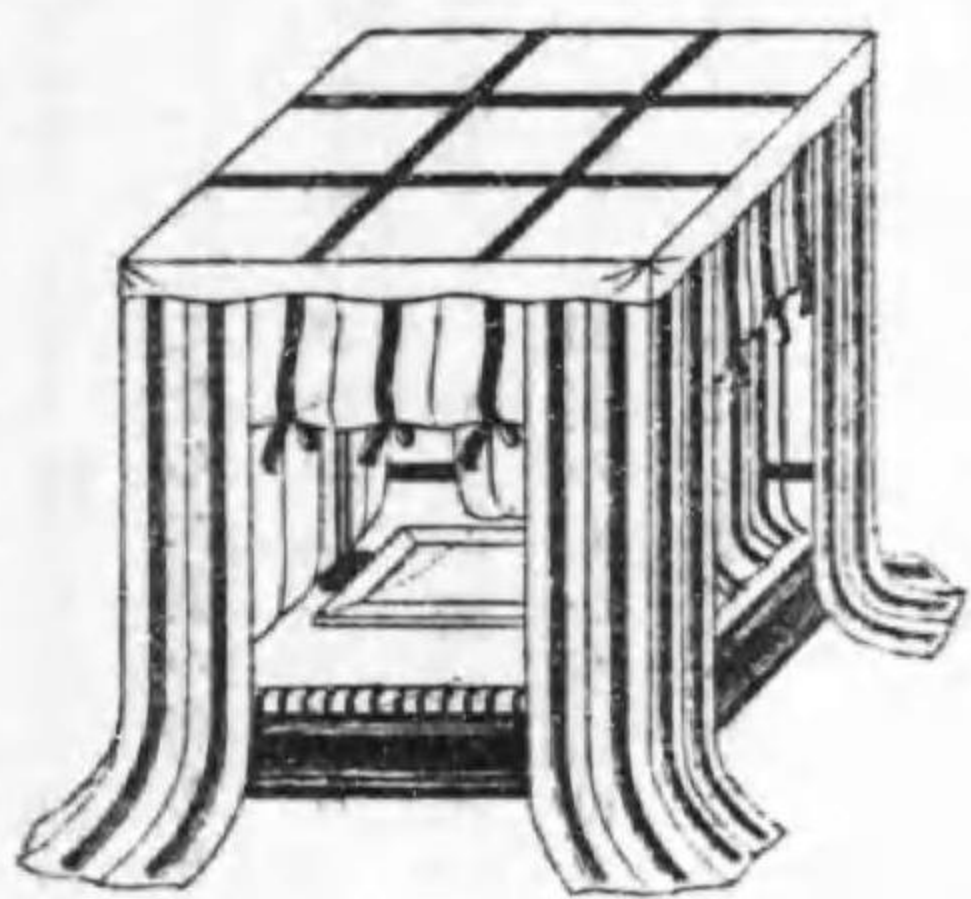
たのを見て、「をりならぬねをなほぞかけつる」と辨乳母が言つて



やつた返歌に、「あやめの草はありながら」とも、江侍従が詠んだのであつた。

惠僧都に學び歌人として有名である。後鳥羽院に召されて和歌所の寄人となる。父祖の跡を繼いで社司とならうとして許されなかつたので、その不満から五十歳のとき出家した。薙髮して蓮胤といひ、遂に隱遁して世を終つた。著書に、方丈記、發心集、無名抄、四季物語、伊勢記(不傳)などがある。○四季物語——長明の著で一卷ある。長明の大原山に遁世後の作といはれるが、偽撰説も有力である。内容は一月から十二月迄、月々の景色人情、宮中の行事、故事感想等を述べたものである。○玉だれに後の葵はとまりけり——四季物語第四、四月の條に、「葵はもろは草とて、ここになん二葉の葵ありて、よその里にはなきことかや。昔より松の尾の宮居に、此御社ふるき御うけひおはして、なべての鳴神のわざはひやはせんとの御事にて、もろかなぎも是をゑばうし、淨衣の腰にもかけ、又御内をはじめ奉り、何くれの宮、公卿の御家にもたまはりて、あるは御簾のまかうにはさみ、あるは母屋、中殿の鴨居などにかおかれぬ。五月の菖蒲、薬玉のありかにもまじへおきて、なほ長月の菊の折にもあふ事也。枯れたる葵かつらも、新しきよりはかうくしくおぼえたり。古今六帖の歌に、和泉式部、小野の大將に忘れられまゐらせて、またこと方のうへ宮人に馴れものし給ふを、まのあたり見るが佗しきにと、うち腹だちて、六月の中の七日の夕さりがた、御はしろうへの高欄に、わらはべの御簾にありしをとうでて、かなぐり捨てたりし葵の枯葉に添へて、少將の内侍のが行行くにことづけて、いひやりけるとなん。玉だれに後の葵はとまりけりかたても通へ人のおもかげ、といへるぞかし」とある。この歌の「玉だれ」とは、簾の美稱。「かたても」は、枯れてもに離れてもをかけた語。歌意は、斯うした御簾には祭の葵が今なほ残り止つてゐる。その葉の枯れたやうに、あなたは既に私(和泉式部)か

ら離れ去つてしまはられた。それにしてもせめてあなたの面影だけは私のところに通つて下さい。面影が通ふとは夢幻にその姿のあり／＼と見えること。人の姿の面影に見えるのは、先方が人がこちらを思つてゐる證據だと言はれてゐる。葵の枯れたのに事寄せて、縁は切れても全然私のことを忘れて、他の宮仕女などと懇意にならずゐて下さいと、小野の大將を恨んで和泉式部がよんだ歌である。○おのれと枯るるだにこそあるを——自然ひとりで枯れるのでも惜しいものを。



御帳

「おのれ」は自然にの意。こそあるを、こそいとをかしかるをの意。○名残なくいかがり捨つべき——どうしてすつかり取捨てしてまふやうな事が出来ようか、そんな事は出来ない。名残なくは、すつかり、残らずの意。○御帳——ミチャウ。御帳臺の事をいふ。御帳（オントバリ）を張り垂れた臺のこと。皇后の御帳臺は濱床といつて、高さ二尺ばかり、九尺四方の臺があり、四隅に柱を立て、四幅或は五幅の帳を四方の入口に掛ける。さうして帳の内には几帳三本を南東西の口に立て、中に縁綱の疊二帖を南北に敷き、その上に茵を置く。ここはこの御帳臺の中に薬玉が掛けてあつたのである。○くす玉——薬玉と書く。古今要覽稿五六に、「くす玉は、そのはじめ漢土より起りて、皇朝にも世事となれり。さてその造りなせるさまは、ふるくは五綵の糸にて、菖蒲、艾などを貫きたるもの也。それを後には撫子、紫陽花、その外色々の時の花どもして飾れるよし、新古今集の歌などにて然おぼえたり。これを後々は、

絲花にて作れり。此國にては嘉祥二年五月に始めて群臣に薬玉を給へるよし見えたり。もろこしにてもはやくよりの事と見えて、風俗通などにも記せり。もと漢土にて續命縷といひ、又長命縷、五色縷、或は縷索、辟兵縷などともいひ、さて五月五日に是をひぢにかくる時は、悪しき病を受けず、かつ壽命をのぶといへり」とある。仁明天皇嘉祥二年五月の詔に、「五月五日ニ薬玉ヲ佩ビテ酒ヲ飲ム人ハ命長ク福クアリトナモ聞召ス。故コノ薬玉賜ビ、御酒賜ハクト宜」と見え、西宮記に、「五月五日絲所、薬玉二流、藏人取之、晝御座母屋結ニ付南北柱。」と見え、禁中では絲所から調進したものである。「くす玉」の「も」の字は、「後の葵」の取捨つべからざるは勿論のこと、薬玉や菖蒲も亦菊の節句まで置くべきであるとの義。○九月九日菊にとりかへらるは五月にかけた薬玉を、九月九日の重陽の節供に菊にとりかへられるとの意。枕草子に、「節は五月にしくはなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたるも、いみじうをかし。九重のうちを始め、いひしらぬ民のすみかまで、いかで我がもとにしげく葺かむと葺きわたしたる、なほいとめづらしく、何時か異折はさはしたりし。空のけしきの曇りわたりたるに、後の宮などには、縫殿より御薬玉とて、いろいろの絲をくみさげて參らせれば、御帳たてまつる母屋の柱の左右に附けたり。九月九日の菊をあやしき生絹のきぬに包みて參らせたる、同じ柱にゆひつけて、月ごろある薬玉に取換へて捨つめる。また薬玉は菊のをりまであるべきにやあらむ。されどそれは皆絲をひき取りて、物ゆひなどしてしばしもなし」とある。○さうぶ——菖蒲のこと。これも五月の節句に用ゐるものである。○菊のをりまであるべきにこそ——菊のをりとは九月九日の節供をいふ。その時節まで残しておくべきものだ。○枇杷皇太后宮——藤原道長の女、妍子。三條天皇の

中宮である。今鏡(ふちなみ)に曰く、「入道前の太政大臣道長のおとどは云々。萬壽四年十二月四日六十二にてかくれさせ給ふ。をのこ君、女君あまたおはしましき。女君第一のは上東門院と申して、後一條院、後朱雀院二代のみかどの御母なり。次に第二の御むすめは、三條院の中宮姪子と申しき。陽明門院の御母なり。云々。寛弘元年十一月、内侍のかみになり給ひて、やがて正四位下させ給ふ。十二月に三位にあげらせ給ふ。七年正月二位にのぼり給ひて、同年二月に三條院の東宮と申しし女御にまゐり給ふ。位に即かせ給ひて、寛弘八年八月に女御の宣旨かうぶり給ふ。長和元年二月十四日中宮に立ち給ふ。帝位去らせ給ひて、寛仁二年十月十六日皇太后宮にあげり給ふ。萬壽四年九月十四日、三十四にて御ぐしおろして、やがてその日かくれさせ給ひにき。枇杷殿の皇太后宮と申す」とある。枇杷殿については、拾芥抄に「左大臣仲平公宅、昭宣公家、近衛南、室町東、或鷹司南、東洞院西一町」とある。枇杷皇太后はここに住んでゐられたので起つた名前である。○かくれ給ひて後——崩御あそばされてから。○古き御帳の内に——皇太后がまだ御在世當時に御使用あそばされた御帳臺の内である。○をりならぬねをなほぞかけつる——千載集哀傷部に、「枇杷殿の皇太后宮わづらひ給ひける時、所をかへて試みむとて、外にわたり給へりけるをかくれ給ひて後、陽明門院一品親王と申しける、枇杷殿に歸り給へりけるに、ふるき御帳の内に菖蒲、薬玉などの枯れたるが残りけるを見てよみ侍りける、辨乳母、あやめ草涙の玉にぬきかへてをりならぬねをなほぞかけつる」とある。あやめ草は、菖蒲のこと。涙の玉にぬきかへてのぬくは、玉を緒に通すこと。これまでは薬玉といふ玉を通してゐた菖蒲を、今は涙の玉に通し變へて。をりならぬは季節はづれで、即ち五月でないからかくいつたのである。ぬ

は菖蒲の根に、泣く音のネをかけたもの。かけつるは御帳に懸けたこと。歌の意は、皇太后御在世當時は、菖蒲は薬玉を貫きてゐたのを、崩御後の今は涙の玉に貫きかへ、時節はづれの根を懸けて只崩御のことを泣き悲むばかりであるとの義。○辨乳母——前加賀守顯時の女、三條天皇の皇女、朱雀天皇の後陽明門院禎子内親王の乳母である。○返事——カヘリゴトとよむ。返歌のこと。○あやめの草はありながら——右の千載集哀傷部にあつた辨乳母の歌のすぐ次に、「かへし、江侍従、玉ぬきしあやめの草(イ糸)はありながらよどの荒れむ物とやはみし」とある。この歌の意は、薬玉をぬいた菖蒲の草は今もなほ以前のまゝに残つてゐるが、その主皇太后宮がお亡くなられてからは夜殿(寢室)はかうも荒れるものと思ひもかけないことであつたとの意。よどの、夜殿に淀野(山城の菖蒲の名所)をかけたものである。○江侍従——赤染衛門の女。父は侍従大江匡衡で、その父が侍従であつたところから江侍従といふ。よみかたはゴウノジジウが正しいかと思はれる。大江家は、江家(ゴウケ)といひ、江家次第などといつたからかくよむものと思はれる。文華秀麗集などには藤原冬嗣のことを、藤冬嗣と書き、トウトウシと支那風によんでゐるが、江侍従は女房のことであるから、ゴウジジウとは呼ばれてゐたとも思はれぬ。文段抄に「エノジジウ」とよんでゐるのは、如何なものかと思ふ。「よみしぞかし」は傳幽齋本には、「よめるぞかし」となつてゐる。

第三百二十九段

口譯 家の庭に植ゑて置きたい木は、松と櫻の木である。松は五葉松もよい。櫻の花は一重櫻がよい。八重櫻はもと奈良の都にだけあつたものだが、それがだん／＼と廣まつて此頃は世の中到的所に多くあるやうになつた。さて吉野山の花でも、左近の櫻でも、皆一重櫻である。八重櫻は風變りな變挺なものである。ひどくつしこくす

家にありたき木は松、櫻。松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八重櫻は、奈良の都にのみありけるを、此のごろぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆ひとへにてこそあれ、八重櫻はことやうの物なり。いとこちたくねぢけたり。うゑすとも有りなむ。遅櫻又すさまじ。蟲のつきたるもむつかし。梅は白き、うす紅梅、ひとへなるが、とく咲きたるも、かさなりたる紅梅のにはひめでたきも、みなをかし。おそき梅は、櫻に咲きあひて、覺えおとり、けおされて、枝にしほみつきたる、こころうし。「ひとへなるがまづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極入道中納言は、なほひとへ梅をなむ軒近くうゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本侍るめり。柳又をかし。卯月ばかりのわか楓、すべて萬の花紅葉にもまさりて、めでたきものなり。橘、桂、いづれも木は物ふり、大なる

よし。

なほでない。このやうなもの植ゑなくてもよいだらう。又、遅櫻もこれ亦時節はづれでいやなものである。毛蟲のついたのもむさくらしい。梅は白梅や、薄紅梅や、或は又、一重の白梅が早く咲いたのも、八重なる紅梅が花のつや美しいのも、それらは何れも皆面白い。但し遅い梅は、櫻と同じ時に咲いて、人にもあまり愛翫されず、櫻に壓倒されて、枝にしほみついたやうに咲いて居るのは歴な

語釋 ○家にありたき木——家に植ゑておきたいと思ふ木は松と櫻である。さてこの松と櫻とについて次に詳しい記述をなすのである。○松は五葉もよし——普通の松でも勿論よいが、五葉の松もよいといふのである。○花はひとへなるよし——花は櫻のことで、櫻の花は八重櫻もあるが一重なるがよい。○八重櫻は奈良の都にのみ云々——八重櫻を奈良に植ゑられたのは聖武天皇の御時にて、一條天皇の時に京都の禁中に移し植ゑられた。詞花集春部に、「一條院の御時、奈良の八重櫻を人の奉りけるを、そのをり御前に侍りければ、その花を題にて歌よめと仰言ありければ、伊勢大輔、いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重にほひぬる哉」とある。この八重櫻の遺跡は、今奈良の師範學校の門内にある。此處は多分この歌によつて誓いたものであらう。又この八重櫻は櫻の種類の名であつて、櫻品に、「奈良櫻は八重櫻なり。花小輪にして甚だやさしく、色赤し。莖長く細し」と。○此ごろぞ世に多くなり侍るなる——八重櫻が世間に多く廣まつたのは、この兼好の時代に近い頃からであるといふのである。傳幽齋本には、「今の世にはいづくにもおほく成侍る」となつてゐる。○吉野の花——大和の國吉野山の櫻である。吉野山の櫻は所謂山櫻で、花の咲くと同時に葉も出るもの。さうして花は一重で稍小さい。○左近の櫻——紫宸殿の南庭御階の前にある。又「南殿の櫻ともいふ」これは紫宸殿を南殿といふからである。これに對して西の方にある橘を右近の橘といふ。左近、右近といふのは、儀式のある時に、左近衛、右近衛の陣の位置によるといふ。禁秘御抄に、「南殿櫻。在紫宸殿巽角。是大略自草創樹敷。貞觀此

ものである。「一重の梅が他の花よりも先きだつて咲き、他の花の咲く時節にはもう散つて居るのは、氣早で面白い」といつて、京極入道中納言定家卿は、やはり一重の梅を軒近くに植ゑられた。その梅は、京極の定家の邸の南側に今も二本あるやうである。柳の木もこれ亦面白いおもむきである。四月頃の若楓は、すべていろ／＼の花や紅葉にもまさつてよいものである。橘や桂は、共に時代がついて古木

樹枯^レ。自^レ根^ニ纏^ル。坂上瀧守奉^レ救^ル守^レ之。枝葉再盛。其後延喜御記群^ニ列^ス櫻樹東頭^ニナンド有^レ之。天徳燒失爲^ニ灰燼^シ。後康保元年十一月被^レ裁^ル則枯。二年正月又被^レ裁。同三月有^ニ花宴^シ。兩度之間。一重明親王家樹。一自^ニ西京^ニ移^レ栽^ル之。其後度々燒失。每度裁^ル之。近樹者堀河院御宇已來木也」とある。古今要覽稿にも、「かく度々の火にやけし櫻にて、八重なりし時も、一重なりし時も有りしなるべし云々。世に南殿といふは、もとの左近の櫻なるが故に、しか名付けしといひ傳へたれば、八重なりし時も有りしなるべし」といひ、南殿とは櫻の一種の名にして、地錦抄に「なでん——うすむらさき、八重くくりてさがる」とある。故に左近の櫻は一重なることも、八重なることもあつたのであらう。編年集成によると、もとは梅樹を植ゑたもので、桓武天皇遷都の時に始めて植ゑられたものであるが、仁明天皇の時に櫻樹に改められたものだといふ。○八重櫻はことやうのもの——「ことやう」は、異様。普通と變つた、一種特別な。普通でない所がよくないといふ心持をあらはす語。○こちたく——事々しく。いやにしつこい。○ねぢけたり——すなほでない。さらりとしてゐない。○うゑずともありなむ——植ゑなくてもよい。○遅櫻——普通の櫻より少し遅れて咲く櫻の意に使つたものと思はれる。されど櫻の種類に遅櫻といふのがある。一般には桐ヶ谷といふ八重で、花が少し小さく、紅色を帯びたもので、兼好のいふ遅櫻もこの種類のものであらう。○すさまじ——時節はづれで興趣のないこと。第十九段参照。○蟲のつきたるもむつかし——毛蟲のついてゐるのは氣味が悪い。遅櫻の頃になると春陽の氣も盛んになつて、毛蟲が梢に群がりつくのである。○梅は白きうす紅梅——梅は白いのも、薄紅梅のもよい。下の「をかし」の語にかかる。○ひとへなるがとく咲きたるも——一重の梅花が早く咲いたのも。下

となり、大きいのがよ

に、「かさなりたる紅梅」とある趣からいふと、「一重なるが」は、「一重なる白梅が」の意であらう。而してこれも並列的に下の「をかし」にかかる。○かさなりたる紅梅——八重の紅梅をいふ。○にほひめでたきも——花の色艶のすぐれてゐるもの。「にほひ」は、ここでは香でなく、花の色彩の美を言つたものである。「めでたき」は、すぐれてゐること。○みなをかし——白梅。薄紅梅。一重の白梅の早咲き。八重紅梅の美しきもの。以上の四つはいづれも皆趣があるといふのである。○櫻に咲きあひて——「咲きあふ」は、一緒に咲いて。同時に咲いて。一般には梅が散つて、次に櫻が咲く順序になるのであるが、遅い梅になると、早い櫻と同時に花が咲くやうになるのである。○覺えおとり——あまり人から賞玩されない。「覺え」は人から思はれること。寵愛せられること。○けおされて——櫻に壓倒されることをいふ。「け」は接頭語。○枝にしほみつきたる——しがみついて咲いてゐるさま。實際に萎んでゐるのではない。勢よく美しい櫻に比べて、その頃の梅花には氣力なく感ぜられるさまをいふ。○こころうし——いやな氣がする。○ひとへなるがまづ咲きて散りたるは——一重の梅が、春の花の中で最初に早く咲いて、さうして早く散つたのは。○心とくをかし——氣早で、ぐず／＼しなくて面白い。○京極入道中納言——正二位權中納言藤原定家卿。俊成の長子。建曆元年（五十歳）侍從に任じ、建保二年參議。翌年兼伊豫權守、その翌年又治部卿に任ぜられて、侍從を辭し、正三位となる。その後建保六年民部卿に轉じ、承久二年兼播磨權守となり、貞應元年參議を辭し、從二位に叙せられ、安貞元年正二位となる。貞永元年（七十一歳）正月に權中納言に任ぜられ、この年十二月官を止め、翌天福元年出家して明靜と號す。仁治二年八月薨去。年八十。歌道に於て天下之を宗とす。新古今集の

撰者となり、新勅撰集を獨撰奏進す。詠歌大概、顯注密勘その他歌道の著多し。日記を明月記といふ。二條北、京極西に在り、世に京極中納言といふ。彼が歌道に於て重んぜられたことは、徹書記に、「於_レ歌道一定家を離れむ輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべき事なり」とまでいはれた。○なほ——やはりの意。八重の紅梅もよいが、それでもやはり一重の（恐らく白梅であらう）方が氣に入つてゐたと見えて。○京極の屋の南むきに——「京極の屋」は、定家の住宅である京極の邸をいふ。この家の南側に。風雅集雜に、「定家卿はやら住みける家にしばし立入りて又ほかへ移り侍りけるをり、彼のみづから植ゑて侍りける梅の木に結びつけける、永福門院内侍、忘れじな宿は昔に跡ふりて變らぬ軒に匂ふ梅が枝。返し、前大納言爲世、朽ちのこる古き軒端の梅が枝も又とはるべき春を待つらし」とある。彼が特に一重梅を愛したことは不明であるが、この當時までまだ實物が存してゐたことがわかる。又徒然草にあるやうなことが言はれてゐたのであらう。「ひとへなるがまづ云々」の語の典故は不明である。○今も二本侍るめり——兼好時代にもまだ二本存してゐる。「めり」圓滑叙法に用ひたもの。○卯月ばかりのわか楓——陰曆四月頃、若葉の萌え出たばかりの楓。○すべて萬の花紅葉——この「すべて」は下の文句である「まさりて」にかかる副詞とも考へられぬこともないが、これは總じてとか、おしなべての意と考へる方がよろしいと思ふ。「すべて」「萬」と同義語を二つ重ねたものである。源氏物語帯木の巻に、「すべて萬の事なだらかに怨すべき事をば見知れるさまにほのめかし」とあつて、岷江入楚に「すべて萬の事」を注して、「總じてといふ心なり」とある。○めでたきものなり——愛すべきものである。よいものである。結構なものである。○橘桂——「橘」は第十九段参照。「桂」は第百

四段参照。○木は物ふり大なるよし——其のやうな樹木は古木となつて、大きくなつたのがよい。

草は山吹、藤、杜若、撫子、池には蓮、秋の草は萩、薄、きちかう、萩、女郎花、藤袴、しをに、われもかう、かるかや、りんだう、菊、黄菊も、葛、葛、朝顔、いづれもいと高からず、ささやかなる垣に、しげからぬよし。此の外、世にまれなる物、唐めきたる名の聞きにくく、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。おほかた何もめづらしく有りがたきものは、よからぬ人のもて興するものなり。さやうの物なくてありなむ。

語釋 ○杜若——カキツバタ。鳶尾科植物。初夏、青紫又は白色の花を開く。○池には蓮——草の中で、池中にあるものでは蓮がよい。蓮はハチスとよむ。蜂巢の義よりしていふ。蓮房の形から來たもの。以上は草についての一般に亘つて記述したものの、春より夏に亘つていひ、池のものが蓮はよいといつた。それで以下は秋の草について述べるのである。○萩——禾本科の多年生草本。水邊又は原野に自生し、高さ一米半。地下莖は根状をなして横走し、地上莖は節を有して細く、中空。葉は硬質、細長き線状で、尖頂、全縁、葉鞘は莖を包む。夏秋の交、基部に絹様の毛の叢生せる花が、葉頂に圓錐花序をなして開く。花色は初は淡紫色で、後、白色に變ずる。○きちかう——桔梗のこと。○藤袴——菊科繭草屬の多年生草本。秋の七草の一にて、河畔の地

口鼻 草では、山吹、藤、杜若、撫子がよい。池にある草では蓮がよい。以上は大體春から夏までの草をあげてゐる。次に秋の草では、萩、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫菀、われもかう、刈萱、龍膽、菊は白菊は勿論のこと、黄菊もよく、葛、葛、朝顔、是等以上の草は、どれでもそれが、大して高くない、小さな垣根に繁茂してゐないで、ばらりと植ゑて

ゐるのがよい。以上の草以外の草で、世間で稀なものであつて、それが支那風のむづかしい名で聞き苦しく、その花も見馴れないやうなものなどは、大してこのましくない。すべて何物でも、珍しく滅多にない稀な物は、風流心のない下等な人の興じ樂むものである。そのやうな物は世の中に無くてもよい。

などに自生し、秋に淡紫色の花を開く。○しをに——紫苑のこと。菊科の多年生草本。莖の高さ五尺に達し、秋淡紫色の花を開く。○われもかう——地榆と書く。薔薇科の多年生草本。莖の高さ二、三尺。秋暗紅紫色の花を開く。この花は花體小にして、多數集つて橢圓形の穗状をなす。○かるかや——刈萱と書く。禾本科の多年生の草本。高さ八十糎位。葉は長い線状をなし、白い縦筋がある。秋、花穂を生じ、苞は褐色を呈する。鬚根はタハシ、刷毛などの料とする。○りんどう——龍膽と書く。龍膽科の多年生草本。山野に自生し、莖は高さ二尺位に達する。葉は披針形又は卵狀披針形で先端尖り、全縁で縦に走る三脈があり、葉柄なく、莖を抱いて對生する。葉は笹に似てゐるので、笹龍膽といふ。秋、紫色鐘狀の花を開き、花後、蒴果を結ぶ。○菊黄菊も——菊とは自然白菊をさすものとなる。故に次に黄菊もとあるので、古歌にては白菊を主として賞美してゐる。大全本には、「きくは白色を歌に賞翫す。然れども黄なるもよしとの心なり」文段抄には、「きく。白菊をいふなるべし。次に黄菊もとあり」とある。されど菊は黄菊もよいと、下の黄菊は、上の菊の制注の如き形にて書いたものとする説もある。諺解本に、「菊ハ黄菊モト、ハの字の入りたる本あり。其時は菊の類にては黄菊ぞと云心也。ハの字なき時は、上の菊は白菊なるべし。次に黄菊もと云ふ心なり」句解には、「上の菊の字はすべての菊花の愛すべき事をいはんとて只菊と計りいひ出して、下にとりわき黄菊を賞する事をいへり。月令に菊有黄花」とあれば、菊は黄なるを正色とすると見えたり。又菊は黄菊と書きて、ハの字を入れ、モの字を除きたる本も有り。見るもの、えらび従ふべし」とある。○葛——クズとよむ。荳科の藤木植物。長さ十米位。莖は蔓性、葉は三小葉より成る複葉で、莖と共に褐色の毛茸を生じ、長き葉柄を有し

て互生する。秋、葉腋に二十糎位の花穂を抜き、紫紅色の蝶形花を總狀花序に開く。根は山芋に似て肥大し、葛粉を採り、莖の纖維を取つて葛布、藤行李などをつくる。○いと高からずさやかかなる垣に——「高からず」「ささやかなる」の二語は共に、垣にかかる語である。そんなに高くない、即ち小さな垣のこと。「ささやか」は小さいこと。○しげからぬよし——あまりごち／＼に植ゑられず、まだらに植ゑてあるのがよい。○世にまれなるもの——世の中にあまりない珍しい植物のこと。○唐めきたる名のききにくく——支那風のむづかしい名の聞き苦しくて。「唐めきたる名」は、支那風のむづかしい名。「聞きにくし」は、「聞き苦しき」こと。枕草子に、「露臺の前に植ゑられたりける牡丹の唐めきをかしき事」などをさして言つたものと考へられる。○花も見なれぬ——支那風の名で、世間でもあまり見馴れない。即ち珍奇な花といふこと。○いとなつかしからず——そんなに好ましくない。大して愛着を感じない。○おほかた何も——すべて何物にても。○有りがたきもの——あまりめつたにない。稀なもの。珍しきもの。○よからぬ人の——物の分らぬ下品な人が。よき人の反對語。○もて興ずる——もてはやす。興じ樂む。○さやうのものなくてありなむ——さういふものは無くてもよい。そのやうな支那風の名の草は寧ろない方がよい。

第四百四段

口譯 死後に、持ち物

身死して財殘る事は、智者のせざる處なり。よからぬ物たくはへ置きたる。

の残るといふ事は、智恵のある者のしない所である。感心しない物を蓄へて置いて残ることとはくだらないことであるし、よい物が残されるのは、その品物に執着してゐたらうと、気毒なやうな気がする。うんと仰山に残つてゐるなどは、如何にも醜態である。自分の死後に誰それに譲つてやらうと考へる物があつたなら、自分がまだ生きてゐるうちに、その品物を譲るがよい。日々始終無くては

もつたなく、よき物は心をとめけむと、はかなし。こちたく多かる、まして口惜し。「我こそ得め」などいふ者共ありて、跡に争ひたる、さまあし。後は誰にと、こころざすものあらば、生けらむうちにぞゆづるべき。朝夕なくてはかなはざらむ物こそあらめ。其の外は何も持たでぞあらまほしき。

語釋 ○財——タカラとよむ。但し大成本にはザイと音讀してゐる。ここでは主として、家財、什器類をいふ。○智者——知識あり、物の道理のわかつてゐる人をさす。○よからぬ物——つまらないもの。○たくはへ置きたるもつたなく——保存して置いたのもつまらない。「つたなく」(拙く)は、くだらない。つまらない。などの意にして、その人がくだらない人だといつてゐる。○よき物は——その蓄へて置いたものが、よい物であるならば。この「よき物」は、趣味上から言つて上品高尚なものをさしてゐると思はれる。○心をとめけむとはかなし——生前にそれ心執着せしめて、珍重してゐたのだらうと思はれて、その人のことが情なくなる。○こちたく多かる——非常に澤山あるのは。「こちたく」は、事々しく。うるさい程。甚しく多くの意。枕草子に、「例の炭櫃に炭こちたくおこして」などある。○まして口惜し——猶更苦々しい。「まして」は、猶更にの意。「口をし」は、歎かましい。苦々しいこと。さう澤山仰々しくあるのである。くても、くだらなく思はれるのに、そんな物が仰々しく澤山あるのは、猶更苦々しく思はれるといふのである。○我こそ得め——その遺財は我こそ頂戴しよう。死後に親戚の者どもの中で、残

叶はぬやうな物は仕方がないが、それ以外の品物は、何も持たないでゐたいものである。

された家財などを是非貫はうと主張する者があらはれてくるのである。○跡に争ひたるさまあし——死後に残されてある家財を奪ひ合ひをしてゐるのは、みつともない。「跡」は賞字にて、死後のことをいふ。「さまあし」は、みつともない。醜態である。○後は誰にと志すものあらば——自分の死後には誰々に、この品物をやらうと思ふ物があつたならば。「もの」は品物をさすとするのが妥當である。但し、者の意に考へられぬこともないが、前者の方が文の上では自然であると思ふ。○生けらむうちにぞゆづるべき——自分がまだ生きてゐるうちに、それを譲つておくべきものである。「生け」は加行四段動詞の未然形。「ら」は完了の助動詞「リ」の未然形で、それに未來の助動詞「む」のついたものである。○朝夕なくてはかなはざらむものこそあらめ——平常どうしても無くてならぬものは、さういふ風に持つて居るのも仕方がないであらう。「朝夕」は朝と夕とで一日全體を代表する。毎日々々始終の意。つまり日々とか、平常の意になる。「こそあらめ」は「こそさあらめ」の意。○持たでぞあらまほしき——何も持たないでゐたいものだ。持たずにゐる方がよいの意。

第四百四十一段

口譯 悲田院の堯蓮上人は、俗姓を三浦の何某とかいつて、もとは

悲田院堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて、物がたりすとて、「吾妻人こそ、いひつる事はたのま

ならばなき立派な武士である。故郷の人が来ていろ／＼話をする序に、「關東人といふものは、一旦言つたことは信頼される。ところが京都の人は、返事ばかりよくて、眞實性が無い」と言つた所が、上人は、「貴殿は、そのやうに思ひなさるであらうが、私は永らく京都に住んで、親しく都の人につきあつて見ますと、都の人の心は、東國人に比べて劣つてゐるとは思ひません。都の人はすべて心が温和

るれ。都の人は、ことうけのみよくて、實なし」といひしを、聖「それはさこそおぼすらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心おとれりとは思ひ侍らす。なべて心やはらかに情あるゆゑに、人のいふほどの事、けやけいなびがたく、萬えいひはなたず、心よわくことうけしつ。偽せむとは思はねど、ともしくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意とほらぬ事多かるべし。吾妻人は我が方なれど、げには心の色なく情おくれ、偏にすくよかなるものなれば、はじめより、いなといひて止めぬ。にぎはひゆたかなれば、人にはたのまるぞかし」とことわられ侍りしこそ。その聖、聲うちゆがみ、あら／＼しくて、聖教のこまやかなることわり、いとわきまへすもやと思ひしに、この一言の後、心にくくなりて、多かる中に寺をも住持せらるるは、かくやはらぎたる所ありて、其の益もあるにこそと覺え侍りし。

語釋 ○悲田院——京中の孤兒、貧者、老者などを救済する寺。佛教の慈悲の思想に由来して出来た社會施設であつて、正史に見えるのは奈良朝光明皇后のときで、續紀天平二年四月十七日

で情愛があるので、人から何か頼まれると、きつぱり斷り切れなくて萬事自分の思ふ通りに言ひ切り得ない。終に心弱く人の言ふことを請合つてしまふ。勿論虚偽をしようと思はないのだが、さて請合つたことを實行しようとなると、貧乏で思ふ通りにならぬ人ばかりゐるので、自然に最初爲し遂げてやらうと思つた素志通りにならない事が多いのだらう。關東人は自分の郷里ではあるが、どうも

に「始置皇后宮職施藥院」とあり、天平寶字四年六月、光明皇后崩御の條に、「太后仁慈。志在救物。創建東大寺及天下國分寺者。本太后之所勸也。又設悲田施藥兩院。以療天下飢病之徒也」とある。平安朝時代になると、延喜式(左京職)に、「凡京中路邊病者孤子。仰九箇條令。其所見所遇。隨便必令取送施藥院及東西悲田院」とある。即ち平安朝の始めには左右兩京に悲田院があつたやうであるが、後には一個所になつてゐる。拾芥抄に「在鴨川西畔。施藥院別所也」とあるのが、それを示してゐる。是れは現今の上京區扇町大應寺のところである。雍州府志(寺院門上、愛宕郡)に、「古在京北大應寺之地。方近三町。泉涌寺之末寺而有寺產五十石。應仁年中兵亂之時。後花園院在源義政公室町花御所。此時東山泉涌寺爲兵火燒。故竊奉葬此院。于今竹林中有陵。爾後移悲田院於泉涌寺。今天神辻子天神社者。古悲田院之境內而則爲鎮守」とある。○堯蓮上人——傳記未詳。大成本は和論語を引用してゐるが、この書は偽書であるから信ぜられぬ。上人とは、釋氏要覽に、「內有智德。外有勝行。在人之上。名上人」とある。つまり僧の德行ある者の稱。聖人と書くはよろしからず。○俗姓は三浦のなにかしとかや——俗姓は何であつたかよく知らないので、三浦某とかいひての意。「俗姓」とは出家しない前の姓氏をいふ。盤齋抄によると、「伊豆の三浦也。武士孫なり」とある。○さうなき武者なり——立派な武士である。「さうなき」は、雙無きで、ならばない立派な意。○故郷の人——上人の故里の人。多分今の相模三浦のことであらう。「來りて」は、傳幽齋本や、正徹本には「きて」とある。○物がたりすとて——話をするといつて。何かの話をする序に。○吾妻人——東國の人。文段抄はアヅマビトとよみ、句解は、アヅマノ人。大全是吾妻人」となり、傳幽齋

心に愛想がなく、情愛が劣り、ひたすら愛想なく一本調子であるので、いやなもの初めから、否といつて断つてしまふ。一旦引受けるとなると、富み足ること裕福であるからして、自然人々から信頼されるのである」と、事のわけを説明なされたので、今迄はこの上人は、言葉遣ひが訛つてあらつばいので、どうせ佛教上の精緻な道理はよく分つてはゐないだらうと思つてゐたが、この上人が故郷の

本は、「東のまうさ」とある。○いひつる事はたのまるれ——一度言ひ出したことは必ず爲し差げるから、信頼が出来るの意。偽書ではあるが、和論語には、「悲田院堯蓮上人に乾加賀入道時雲問て曰、古郷の人の尋來て云けるは、東國の人は心も潔よく云ほどの詞づかひも頼ありてよけれ云々」とある。○都の人はことうけのみよくて實なし——京都の人は、口先の承諾だけはよいが眞實はない。「ことうけ」は、受合ひ承諾すること。○といひしを——「を」を目的格のをと藤田氏は解してゐられるが、これは意味の裏返る場合の助詞である。○聖——僧を尊んで言つた語。ここでは堯蓮上人をさす。○それはさこそおぼすらめども——あなたがそのやうにお考へあそばされませうが。「それ」は、其許(貴方)の意である。下の「おのれは云々」とあるに對す。第二百三十八段第六節にもこの用例がある。それが代名詞對稱として用ゐられたのは、鎌倉時代に起つて、室町時代に盛んに用ゐられた。傳幽齋本には、「それはさもおぼすらめども」とある。○おのれ——自分は、私は。堯蓮上人をさしていふ。○馴れて見侍るに——多くの京の人々に親しく交際して、都人の心もちを考へて見ると。傳幽齋本は、「なれみ侍に」とあり、大成本は、「なれて見るに」とある。○人の心おとれりとは思ひ侍らず——眞實心といふ點について、京都の人は、東國人に比べて劣つてゐると思はない。○なべて——京都の人はすべて。なべては、概して、押しなべて、一般に。○心やはらかに情あるゆゑに——心が濃厚で物が分りそれでゐて人情にあつた。心やはらかは、かたくなの反對で、濃厚で物の分りのよいこと。「情ある」は人情にあつたこと。○人のいふほどの事——他人の頼むやうな事。ほどはその範圍を示したものと考ふべきである。「いふ」は、言ひ依頼する事。○けやけくいながたく——きつぱりと断

人に對して返答された一言葉を聞いてからは、上人がゆかしく慕はしくなつて、多くの僧侶の中で、悲田院の住職ともなされたのは、斯ういふ心の溫和なところがあつて、自然にかういふ住職になるといふ利得もあるのだと思つた。

ることができにくく。「けやけく」は、明かに際立つて。きつぱりと。「いなびがたく」は、否み難く。○萬えいひはなたず——萬事について、はつきりと断言しない。「言ひはなつ」は、心に思ふだけのことを口に出していふ。言ひ切るの義。○心よわくことうけしつ——断るほどの心の強さもなく、弱々しい氣で引受けてしまふ。「ことうけしつ」は、引受けたとの返事をしてしまふこと。傳幽齋本には、ことうけしつ偽せむとは思はねどもしくかなはぬ」が「かないぬ」となつてゐる。恐らく脱落であらう。○ともしくかなはぬ人のみあれば——貧乏で思ふ通りにならぬ人ばかりがゐるから。「ともし」は貧乏であること。「かなはぬ」は、何か事をしようとしても、費用のために思ふ通りにならぬこと。つまり富裕でないこと。かなふは富裕であることで、發心集に、「此國にかなへる聞へ有る人多かり。然ども門田五十町持る人はありがたくこそ有め」とある。○本意とほらぬ事——他人の頼みを叶へてやらうとする素志の爲し遂げられぬこと。○我が方なれど——自分の郷里の人ではあるが。自分の郷里の事であるからして、郷里の方を悪く言ひたくはないがの意。○げには——どうも。實際どうも。「は」は強意の助詞である。従つて、實はとか、本當の所はと解するのはよろしからず。○心の色なく——愛想がなく。やさしみがなく。第三百十九段の「色もなくおぼえ侍りし」の色と同意。○情おくれ——情が少い。やさしみに乏しい。「おくる」は、乏しいとか、劣つてゐる。少い。○偏にすくよかなるものなれば——「偏に」は、只もう一筋に。ひたすら。「すくよかなる」は、眞つすぐ。お世辭のないこと。一本調子なこと。ひたすらお世辭なく一本調子であるからして。○はじめよりいなといひて止みぬ——事の最初から、そのやうな事は出来ませんといつて止めてしまふ。それに手をつけるやうな

ことはしない。○にぎはひゆたかなれば——主語は東國人と見るのがよい。東國人は裕福であるから。「にぎはひ」は動詞であつて、富み足らふこと。裕福なること。この主語は東國の人とすべきである。都の人とする解はとらぬ。これは太平記の所謂、「朝廷は年々に衰へ、武家は日に盛んなり」といふ時代であつたから、東國人の富有なことを言つたのである。○人にはたのまるるぞかし——東國人はお世辭のない一本調子であつても、一旦引受ければ、それをなし遂げるだけの資力を持つてゐるからして、結局他人から信頼されるのである。○ことわれ侍りしこそ——そのやうに道理を説いて言ひ聞かされたので。この句はここで切れてゐるのでなくして、下文の「心にくくなりて」にかかる。「心にくくなりて」は、「心にくくなりしか。さて」となるところが、作者の思想がここで曖昧となつてゐる。さてその中間の語は、挿入句で、この言葉を兼好が聞かなかつた以前の事を述べたものである。○聲うちゆがみ——言葉が關東訛に訛つての意。聲はアクセントのことを含まれるが、言葉といふことである。「うちゆがみ」は、曲つて正しくないことからして、ここでは言葉のなまることをいふ。源氏物語東屋の巻に、「若うよさら東の方の遙かなる世界に埋れて年経ればにや、聲などほと／＼うちゆがみぬべく、物うちいふ少しだみたるやうにて」とある。○あら／＼しく——言葉遣が荒つばいのである。ここでは性質や動作が荒いといふのではない。○聖教のこまやかなることわり——佛教のこみ入つた道理教義。「聖教」(シヤウゲウ)は、佛者が佛教を自稱する語。佛教といふこと。○いとわきまへずもやと——あまりよく分つて居ないかも知れないと。「もや」の下に、「あらむ」などの語が省略された形。○この一言の後——この一言を聞いて後は。正徹本や傳幽齋本には、「この一こと葉

の後」嵯峨本も「この一言葉の後」とある。恐らく原形はこのやうであつたものであらう。平家物語にも、「心深うねらふ方も有りけむ、一言葉も不出」とある。○心にくくなりて——奥ゆかしく慕はしくなつて。その人物が慕はしくゆかしくなつて。○多かる中に——世には僧侶が澤山あるが、その僧侶の中で。○寺を住持せらるるは——一寺の住職として、寺を持つてゐられるのは。ここは悲田院の住持(一寺の主)たることをいふ。「らるる」は、教語の助動詞。○やはらぎたる所——心のやはらいだ所があつて。心が柔和で情があるので。○その益もあるにこそ——この上人は、心の柔和な徳によつて、自然一個寺の住職といふ利得(よい地位を得たこと)を得たのであらう。益は利得、利益といふこと。「こそ」の下に「あれ」などの語が省略されてゐる。ここを沼波氏の講話や、内海氏の詳解には、「この人が住持になれば人に利益がある」といふやうに解釋してゐるのは誤である。

第四百四十二段

心なしと見ゆる者も、よき一言はいふものなり。ある荒夷のおそろしげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては、ものあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらむと、いとおそろし。子ゆるにこそ、萬のあはれは思ひ知

口譯 物の道理、人情を少しも理解しないやうに思はれる人であつても、たまには一言葉位はよい事をいふものである。或る東北の鄙

らしい武士の、見るからに、こわさうな顔つきをした男が、傍の者に向つて、「御子様がおありなされますか」と尋ねたところが、「いや子供は一人も持つて居りません」と答へたので、「それでは貴殿は人情をお分りになりますまい。さぞ冷酷無慈悲な御心でおありなさる事だらうと、まことにこわい。人は子供があつてこそ、いろ／＼な親子、夫婦、兄弟、隣人に對する人情といふものを理解せられるのである」といつた。それは如何にもさうあるべき尤な事である。恩愛の道(親子の愛情の道)でなくては、斯ういふ

「語る」心なしと見ゆる者——なきげが無く、思慮もないといふ風に思はれる者。つまり物事の情味を解し得ない人といふこと。○よき一言はいふものなり——たまにはよい事もいふものである。光廣本等には「は」の字なし。今、弘賢本、文段抄、傳幽齋本によりて補ふ。○荒夷——これは東北地方のずつと邊鄙な所から京に来てゐる身分低い武士をさしてゐる。○おそろしげなるが——見るからに怖いやうな顔つきをしてゐる奴が。○かたへにあひて——「かたへの人にあひて」の意。はたの者に向つて。傍の人に對して。「あひて」は、對しての意。○御子はおはすや——御子様はおありになりますか。「おはす」は、ありの敬語である。○さてはものあはれは知り給はじ——それでは人情はお分りになりますまいの意。さてはは、それではの意。ものあはれは、ここは人情といふこと。○情なき御心にぞものし給ふらむ——無情冷酷な御心でおありなさるでせう。「ものす」は、どうする、どうあるといふ働きを一般的にいふ詞で、そのどのやうな働きを示してゐるかは、文の前後の關係で知るより外ない。○といとおそろし——と思ふと、まことに恐しい。○子ゆゑにこそ萬の云々——子供が自分にあつてこそ始めて、すべての人情といふものも、成程と心にさとることが出来る。と言つたがそれは。「子ゆゑにこそ」は子供を自分が持つことになつて始めて。「すべての人情」とは、親子の愛、兄弟の愛、世人に對する慈悲

荒夷どもの心に慈悲の心があらうか、いやありはしない。親に對して孝行をする心の無いものでも、自分が子供を持つやうになつて始めて、親の愛してくれた心が理解出来るものである。

口譯 浮世を捨てた人で、萬事に無一物無係果であるものが、全く妻子などの係累多い人が、何かにつけて人に誦ひ、慾の深いのを見て、むやみにそれを輕蔑するのは間違つてゐる。然しその係累の多い當人の心になつて考

などすべてを含めた證である。○さもありぬべき事——いかにもさうあるべき尤な事である。○恩愛の道——恩愛の道とよむ。これはもと佛語で、親子、夫婦、兄弟などの家庭的愛情をいふ語で、特に親子の間の愛情をいふ場合が多い。こどもその意味である。○かかるもの心に慈悲ありなむや——こんな荒夷のやうな奴どもに慈悲の心があらうか、ありはしない。「慈悲」は、智度論廿七に、「大慈與一切衆生樂。大悲拔一切衆生苦。」とある。即ち他人に對して、與樂拔苦しようとする情である。○孝養の心——ケウヤウの心とよむ。孝行の情をいふ。○親の志——親が子を愛して呉れた心。志は心の義。

世をすてたる人の、よろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、萬よろづにへつらひ、望のぞみふかきを見て、無下むげに思ひくたすは、僻事ひがことなり。其の人の心になりて思へば、誠に悲しからむ親のため、妻子のためには、恥をも忘れ、ぬすみもしつべき事なり。されば盜人をいましめ、僻事ひがことをのみ罪せむよりは、世の人の飢ゑず、寒からぬやうに、世をばおこなはまほしきなり。人、恒つねの産さんなき時は恒の心なし。人きはまりてぬすみます。世、治まらずして凍餒とうがいの苦しみあらば、科とがの者絶ゆべからず。人を苦しめ法をかさしめて、それをつみなはむ事、不便ふびんのわざなり。さていかゞして人を惠む

へれば、本當にいとしい親や妻子の爲めには、恥ぢも外聞も忘れて了ひ、盗みもしさうなことである。だからして盗人を捕へ縛り、悪事をする人を罰するよりは、世人が食に飢ゑることのないやうに、又寒さに苦しませぬやうに、世を治めて行きたいものである。人に一定の生活の業務がないと、常に一定した心の守りが無い。人は貧窮すると、遂に盗みもする。世の中がよく治まらないで、飢ゑ凍

える苦しみがあつては、世に罪人の無くなりやうがない。人々を凍餒の苦しみにあはせておき、法律を犯かさせておいて、その人を罪に處するといふことは、まことに可愛想なことである。然らばどのやうにして、人を恵むべきかといふに、それは民の上に立つ爲政者が奢り浪費する所を止め、人民を愛撫し、農業を奨励するならば、下の民に福利のあることは疑ひのあらう筈がない。衣服食物が

べきとならば、上のおごり費す所をやめ、民を撫で農をすすめば、下に利あらむ事疑あるべからず。衣食尋常なる上に、僻事せむ人をぞ、まこと盗人とはいふべき。

語釋 ○世をすてたる人——世を捨てて佛門に入つた人。世捨人。○よろづにするすみなるが——「よろづに」ここでは、全くの意とするがよい。「するすみ」は、無一物、裸一貫で少しの資財もなく、家庭的繋累もない者といふこと。獨身無一物の境遇。沙石集四下(八)に、「法門の次に樂天之詩を引出してはいはく、匹如身後有^ニ何事(○匹如身振假名。スルスミ)云々。文の意は、人の一物も手にもたぬを匹如身といふ云々」と、四季物語一に、「かうするすみの身にもぬるのみなる云々」とある。白氏文集偶吟詩に、「匹如身後有^ニ何事。應向世間無^レ所^レ求。」とあるのを古注に引き、説明してゐるが、匹如身をスルスミとよむことの理由としてはまだ明確になつてゐない。○なべてほだし多かる人の——すべて妻子などの係累束縛の多い人が。「なべて」は、おしなべて。一般に。概して。「ほだし」は、束縛の意にして、妻子眷族の類をいふ。○萬にへつらひ望ふかき——萬事につけて人の機嫌をとり、自己の向上を計つたり、又慾望深いのを。○無下に思ひくたす——むやみに侮蔑する。「無下に」は、むやみに。一途に。ひどく。「思ひくたす」は、くさすに同じ。くだらぬ奴だと思ふ。けなす、輕蔑する。思ひおとすこと。○僻事なり——道理にはづれてゐる事である。間違つてゐることである。○其の人の心になりて思へば——その人は、妻子などの束縛係累多い人をさす。その當人の心境になつて考へてやれば。○誠に

悲しからむ親のため、妻子のためには云々——ここは諸説の解のあるところで、「悲しからむ。」として、ここで文章を切つてゐる本もある。さうすると悲しは悲哀の意になる。然し、本文の内容からいふと、この「悲し」(かなし)は、いとしい、いとほしい、かはゆい^の意と見るのがよい。萬葉集に「妻子見れば可奈之^か久め^くし」とあるのを始めとして、源氏物語夕顔に、「我がかなしと思ふ女を仕う奉らばやと願ひ」。源平盛衰記三十一に、「今更子^ながかなしく、妻が戀しければとて、いかで見捨て奉るべき」。宇治拾遺物語六に、「女一人より外に又子もなかりければ、この女をぞまたなきものにななくしける」とあるのは皆その意である。然して、「誠に悲しからむ親のため云々」と、からむを、親や妻子につく連體形即ち、形容詞的修飾語と見るのが妥當であると思ふ。このときは、「誠に」の副詞は、ずつと下文の、「恥をも忘れ、ぬすみもしつべき」に係ることになる。○盗人をいましめ——「いましむ」は捕へ縛ること。即ち盗人を捕縛するをいふ。○僻事をのみ罪せむよりは——僻事は道理にもとり、又は事實に違ふ事。ここは悪事をなした者をさす。この悪事をなした者ばかりを罪科に處するよりは。○世をばおこなはまほしきなり——世の中を治めたいものである。世の政治をなしてゆきたいものだ。「おこなふ」(行ふ)は、治めること。○恒の産なき時は恒の心なし——恒の産は、常に我が生活をなしてゆく生業。恒の心は、常に持つてゐる固有の善心。孟子梁惠王章句上に、「無^ニ恒産^一而有^ニ恒心^一者、惟士爲^レ能。若^レ民則無^ニ恒産^一。因無^ニ恒心^一。苟無^ニ恒心^一。放僻邪侈無^レ不^レ爲^レ已。及^レ陷^ニ於罪^一。然後從而刑^レ之。是罔^レ民也。焉有^ニ仁人在^レ位。罔^レ民而可^レ爲^レ也。」とあるによる。恒産恒心については、趙注に、「恒常也、産生也。恒産則民常可^レ以生^レ之業也。恒心人所^レ常有^ニ善心也。惟有^ニ學士之心^一、

世の普通人並にしてゆかれて、それでなほ且つ悪事をする人をば、眞の盗人といふべきである。

者。雖窮不_レ失_レ道。不_レ求_レ苟得_レ耳。凡民迫_レ於_レ飢寒。則不_レ能_レ守_レ其常善之心也。」と説明してゐる。○人きはまりてぬすみす——人間はいよ／＼困窮すると盗みをする。孔子家語五、(類回)に、「鳥窮則啄。獸窮則攫。人窮則詐。馬窮則佚。」とあり、論語衛靈公篇に、「小人窮斯濫矣。」と、又、管子に、「禮義生_レ於_レ富足。盜賊起_レ於_レ貧窮。」とある思想である。○凍餒の苦しみあらば——人民にここえうゑる苦しみがあつたらば。孟子盡心章句上に、「所謂西伯善養_レ老者。制_レ其田里。教_レ之_レ樹畜。導_レ其妻子。使_レ養_レ其老。五十非_レ帛不_レ煖。七十非_レ肉不_レ飽。不_レ煖不_レ飽。謂_レ之_レ凍餒。文王之民。無_レ凍餒之老_レ者。此之謂也。」とある。○科の者絶ゆべからず——罪人の絶えやう筈がない。「科の者」は、とが人ともいひ、罪人をいふ。○つみなはむ事——罪する。罪に處せようとする事。罰すること。○不便のわざなり——かはいさうな事である。氣毒なことである。○さていかがして人を恵むべきとならば——それでは、どうして人を恵むべきかといふに、それは。○上——カミとよむ。人民の上に立つ人。人君や大臣など民の上において、下、人民を治める人をいふ。爲政者。○民を撫で農をすすめば——人民を愛撫し、農業を奨励したならば。帝範、務農篇に、「勤_レ穡務_レ農則飢寒之患塞。遏_レ奢禁_レ麗則豐厚之利興。」とある。○下に利あらむ事疑あるべからず——下は人民のこと。人民に福利のあることは疑ふべき所でなく、極めて確かなことである。○衣食尋常なる上に——衣服や飲食が人並であるのに、その上にの意。

第四百十三段

口譯 人の臨終の有様の立派であつたことなどを、世人の語つてゐるのを聞くと、ただごく靜かに何等取亂した所がなかつたといふならば、如何にもその臨終は奥ゆかしいものである。それを愚かな人は、不思議な普通と變つた瑞相のあつたやうに餘計なことまで附けて語り、その死してゆく人の臨終に言つた言葉なり、その時なした事にしても、自分の好む方に引きつけて譽め立てるものである

人の終焉のありさまのいみじかりし事など、人の語るを聞くに、ただしづかにして亂れずといはば、心にくかるべきを、愚なる人は、あやしくことなる相_{さう}語りつけ、いひし言葉もふるまひも、おのれが好む方_{かた}にほめなすこそ、その人の日來_{ひころ}の本意_{ほんい}にもあらずやおぼゆれ。この大事は權化_{ごんげ}の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれ違_{たが}ふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。

語釋 ○終焉——この語の讀み方については古來二つあるやうである。下學集には、ジュウエンとよみ、文段抄や大成本は、ジウエンとよんでゐる。これが正しいであらう。但し、寛延四年本増補鐵植本及び、正徳本には、シウエン、首書註釋本もシウエンとよんでゐる。臨終。死にぎはること。○いみじかりし事——すぐれて立派であつたこと。○ただしづかにして亂れずといはば——ただ物靜かで取亂した所がなかつたと、それだけ言ふならば。○心にくかるべきを——その死んで行つた人に對して、奥ゆかしいといふ感じがするだらうに、それを。○愚なる人は——死んだ人のことを噂する人が、物の道理のわからない人であつた場合には。○あやしくことなる相を語りつけ——不思議に變つてゐるすがた有様を附け加へて語る。偉人の臨終などによく言ひ傳へられることで、紫雲がたなびいたとか、空より花散り天樂が聞えたとか、佛、菩薩の來迎があつたとかいふ奇怪の行相_{ぎょうさう}を語りつけることをいふ。「あやし」は、不思議なことをいひ、「ことな

が、それはその死んだ
當人の平素の本志にも
背かうかと思はれる。
死といふ一大事は、權
化な人でもそれを見て
あれやこれやと批評す
ることは出来ない。又
博學の學者でもあれこ
れと推察出来るもので
はない。まして凡人な
どが批評出来るもので
はない。故に死んでゆ
く人は、正しき道を踏
み心に疚しい所がない
ならば、それでよいの
であつて、他人の見聞
いていふ批評によつて
定まるものではない。

る」は、普通と異つたことをいひ、「相」は、形相のことで、有様とか、すがたのこと。「語りつ
け」は、さういふ事を附け加へて話すことをいふ。○いひし言葉もふるまひも——その死んだ人
が臨終に言つた言葉も、爲した振舞も。○おのれが好む方にほめなす——「おのれ」は、死んで
行く人の有様を噂する人をいふ。その人が自分のすきなやうに、いろ／＼とないことでも立派さ
うに作つて言ふこと。○その人の日來の本意にもあらずや——その人は、死んだ當人をさす。そ
のやうにいる／＼立派さうな死に方をなして行つたと、ありもしないことをつけ加へられて話さ
れるのは、死んだ人その人の本來の意志ではないだらうと思はれる。下に「あらむ」の語が略さ
れてゐる。○この大事——死といふ一大事をいふ。○權化の人——權化は權現と同じく、カリに
人間の姿となつてあらはれた人といふことで、佛、菩薩などが衆生濟度のために、假に人間の姿
となつて、此の世に生れることの如し。ここはそのやうなすぐれた人や、聖僧などをさしてゐる。
○定むべからず——ここは古來いろ／＼な解釋のしかたがあるが、死ぬ人の臨終の有様がどうの、
斯うのといふことは、凡人があれやこれやと批評するのは間違つてゐるのは、勿論のこと、權化
の如き人でも、又、博學の偉い人でも、それを批評したり、或はあたらうとか、斯うだらうと
か推察できるものではない。といふやうな解し方が妥當と思ふ。文段抄に、「わきよみみては權
者、博士もえさだむべからず、えはからふべからず。只其臨終せし人の心次第なるべしと也。問。
權化、博士の終焉とても定めはからひがたしと云説有如何。答不可也。權化の人はもと佛菩薩な
らば、いかでか此一大事定がたらん。野植云。およそ人の臨終の時、紫雲たつなどいひて種々
の奇瑞をいへど、大やうはまことすくなし、風雨雷電の時に善知識の死るもあるべし。かたちあ

れば病有、病にしな多ければ思ふままに有べからず。されば、覺寺の開山佛光の頌に、老僧舍利
包天地。莫向空山撥冷灰といふ。夢窓の夢中間答の中にも此心をいへり」とある。この文
段抄の第一の解に従ひたい。「博學の士」は、ひろくまなべる大才の人をいふ。士とは、諺解本
に「學者の惣名を曰士となり」とある。○おのれ違ふ所なくば——「おのれ」は、死んでゆく
當人をさす。死んでゆく人が、平生正しい道をなし、悟を開いてゐるならば。○人の見聞くによ
るべからず——他人が何と見ようが、何と聞かうが、死するときの外相の如何によるものでない
から、そのやうなことを氣にするなといふのである。

第四百四十四段

口譯 梅尾の上人が、
道路をお通りになつた
時、河で馬を洗ふ男が、
「あしあし」と言つて
ゐたので、上人はこれ
を聞き、立ちどまつ
て、「あゝ有難い事だ
よ。これは前世の功德

梅尾の上人、道を過ぎ給ひけるに、河にて馬あらふ男、「あしあし」とい
ひければ、上人立ちどまりて、「あなたふとや、宿執開發の人かな。阿字
々々と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるは」と
尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候」と答へけり。「こはめでたき事か
な。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつるかな」とて、感涙
をのこはれけるとぞ。

のあらはれた男であるな。しきりに阿字々と唱へてゐるよ。さてはその馬の主は、どのやうな方であるか。あまりにもありがたく思はれるよ」と尋ねなると、その男が、「府生殿のお乗りになる御馬でございます」と答へた。すると上人は又、府生を不生と聞き違へて、「これは又ありがたい事だなあ、まことに阿字本不生である。お蔭にてわしも佛道に縁を結ぶことになつたよ」とて、感涙を流し

語釋 ○梅尾の上人——明惠上人をいふ。釋高辨のこと。梅尾は山城國葛野郡梅畑村（高尾の東北十町許の地）で高山寺あり、寺は土御門帝の建永元年明惠上人高辨の開基。華嚴宗弘布の名刹なり。元亨釋書五に、「釋高辨。姓平氏。紀州在田郡人云々。九歳父母繼亡。離宅從高尾山上覺。讀俱舍頌。不旬日便能誦。云々。十六就上覺剃落。於東大寺戒壇受具。寺有聖詮者。善賢首宗。請益日新。十九從興然阿闍梨。稟兩部密法。自爾止北山梅尾。盛唱賢首宗。云々。嘗曰。我國慧學之者多而定修之人希矣。以故學者闕證道之門焉。是我之大患澆季之弊也。便於北峯崑崙構一字。禪冥思惟。五門禪要達磨多羅禪經等以爲心術。又依華嚴宗義撰坐禪次第並入解脫義二卷。常修佛眼明妃法云々。梅尾者古練若之地。廢地久矣。辨居此復院宇。承元二年還紀州。於内崎山創伽藍。四年又歸梅尾。寬喜四年正月寂。年六十。」とある。○あしあし——足々である。馬の足を洗はうとして、馬に對して、「足を揚げよ」といつたのである。それを上人は、「阿字々々」と聞き取つたのである。○あなたふとや——あゝ、尊い事よの義。「あな」は感動詞。あゝの意。やはよと共に感歎の意をあらはす助詞。○宿執開發の人——宿世に執り行ひし善根功德が、今世に開發して善果を結ぶことをいふ。即ち過去の功德によつて有徳の立派な人として現世に生れた人といふこと。宿執は宿習とやゝ似て、宿世から伴ひ來つた煩惱執着の義であるが、この文ではそれを宿善と同義に使つたのである。○阿字々々と唱ふるぞや——阿字は、悉曇十二母韻の最初の韻であり、又字である。此音、此字が本となりて一切の梵語梵字を生ず。大日經疏「阿字是一切法教之本」とある。佛教では、阿字を萬法の生れる始原と崇め、全宇宙の本體の記號として、この阿字を用ひ、阿の字に不生不滅の義があるとす。扱、

て拭はれた。

佛道を思ふのあまり上人の耳には、男が足と云つてゐるが、萬法の原理である阿字として聞えたのである。やは感動の助詞。○いかなる人の御馬ぞ——上人はこの男が阿字々々といつてゐるものと思ひ、その男を尊うと思ふと共に、斯の如き立派な下僕を使つてゐる主人が慕はしくなつて、この馬の主はどのやうな人であるかと尋ねたのである。○あまりにたふとく覺ゆるは——「あまりに」は非常にといふことで、今日の「あまりにも」に同じ。「覺ゆるは」は、思はれますよの意。この「は」は今日の、さうですわ、何々でございますわの「わ」と同じく感動詞である。○あまりにたふとく覺ゆるはいかなる人の御馬ぞ」といふやうに倒置法になつてゐるのではない。○府生殿——六衛府及び檢非違使の下役人。職原抄下に檢非違使の條に、「府生（左右）。府生者非衛任之官。仍府督判授之後。申下使宣旨。」と。又、諸衛の條に、「將曹（相當七位下、唐名親衛錄事）云々。府生、（同前。唐名衛史）大將判授之。番長（近衛舍人中撰用之）。上皇執政若給兵仗。大臣及左右大將必召使之。大納言大將不召使。大臣大將已上召加府生也。」とある。この府生を上人は又、不生と聞き違へたものである。○こはめでたき事かな——これはありがたきことである。結構なことであるといふのである。○阿字本不生——阿字は前述のやうに、一切教法の根元であるからして本來本有のものである。他の因によりて生ずるものでないとの義。即ち本不生である。此の義を觀するなれば、遂に一切諸法本不生の義を觀得すべしと云ふ。これを阿字觀といふ。○にこそあなれ——「にこそあるなれ」の略。何々であるのだの義。○うれしき結縁をもしつるかな——結縁は、佛道に縁を結ぶこと。有難い結縁をしたものだの意。上人はお蔭でありがたい結縁をなしたと感涙に咽んだものである。○感涙をのどはれける——のどふは

ぬぐふ(拭ふ)と同意。涙を拭はれたこと。涙を流したこと。涙を流したから拭つたわけである。

第四百十五段

御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。よく／＼
慎み給へ」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬より落
ちて死ににけり。道に長じぬる一言、神の如しと人思へり。さて「いかな
る相ぞ」と人の問ひければ、「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、
この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」とぞいひける。

語釋 ○御隨身——上皇つきの御隨身であらう。御隨身は近衛將監、將曹以下の官人。攝關及び
上皇の隨身には本府の隨身である所から御の字をつける。第一段參照。○秦重躬——傳未詳。歸
化人の子孫である。畑字を書いてハタとよむも、もとは秦と同じものである。もとはハダとよん
だものらしい。姓氏錄に、「仁德天皇御世。以二百二十七縣秦氏(民)。分置諸郡。即使養蠶織
絹貢之。天皇詔曰。秦王所獻絲線絹帛。朕服用。柔軟溫煖肌膚。賜姓波多。」と、古語拾遺
に、「所貢絹綿軟於肌膚。故訓秦字。謂之波陀。」とある。○北面——上皇の御所を警固の武
士。上皇の御所を警固する武士である。第九十四段參照。○下野入道信願——傳未詳。○落馬の

口譯 御隨身である秦
重躬が、北面の武士、
下野入道信願の事を、
「落馬の人相を持つて
ゐる人だ。よく／＼お
氣をつけなされ」と或
る人に語つたが、或る
人は一向當てにならぬ
ことと思つてゐたが、
果してそのうちに信願
は馬から落ちて死んで
了つた。世人は重躬の
豫言に感心して、その
道の蘊奥を極めた偉い

者のいふ一言は、神の
なさることのやうに誤
りのないものだと思つ
た。そこで或る人が「落
馬の人相とは、どのや
うなものであるか」と
尋ねたところが、重躬
は、「あの信願は大變な
桃尻でありながら、而
もむやみに跳ね上る悍
馬をお好みになつたの
で、この落馬の相があ
ると言つたのでありま
す。私の人相判断には、
何時だとして申し誤りが
ありませんか、ありま
せん」と言つたのであ
る。

相ある人なり——馬から落ちる人相のある人である。相は人相のこと。人のすがた形をいふ。こ
れは兼好が第三者に對して、信願のことを評して言つたものである。この解には諸説があるや
うであるが、この方がよいと思ふ。○いとまことしからず思ひけるに——一向本當らしくないこ
とだと思つて居たがの意。ここの主語は勿論、第三者とする方がよろしい。他説もあるが面白か
らず。○死ににけり——文法上は「死にけり」とあるがよろしい。傳齋本には「死にけり」と
なつてゐる。大成本、鐵植本は、「死にけり」と假名をつけてゐるが、これは後世よみ誤つてか
くよんだものでなからうか。なほ第四十二段參照。○道に長じぬる一言——いづれの道について
も、その道の事に熟達し、蘊奥を極めた人のいふ一言はの意。勿論、ここの道は、人相を觀るこ
とをいふ。他説に乗馬道に熟達精通したことともいふ。○人思へり——重躬が、信願の人相を評
したのを聞いた第三者をさしてゐる。○さていかなる相ぞと人の問ひければ——そこで馬から落
ちる人相といふものは、どのやうな特徴のある人相をいふのかと、第三者の人が、重躬に尋ねた
のである。「さて」は、そこでのこと。「人の」は、「人が」の意。○桃尻——桃の實は尻が圓く
して、ずわりが悪い。それと同様に馬に乗ることが下手であつて、馬に乗つて、尻が鞍にすわら
ぬことをいふ。これ諺解本に、「桃は器にろくにすはらぬ物也。是は尻うきて鞍のうちさだま
らぬをいふ也」とあるによる。されど至文堂發行、藤村作編徒然草に、「桃尻は、もみ尻にて、
尻をもむことなり。福富草子に、『藤太腹は痛けれど食物にのみ心入たる、をかしゃ、さもしゃ、
あまり腰のひきつり、おなかの痛むにたへずして、立ち出でんとしけるが……も尻をすゑて走
りにげんとしけるを』とあり。現代の諸庄、『桃ハ器ニロクニスハラヌ物也。是ハ尻ウキテ鞍ノ

ウチサダマラヌヲ云フ也」と諺解に云へるをとれども誤なるべし。必ずしも上馬の時に限らざるべけれど『六度御落馬あり。世の人桃尻とぞ申しける』(長門本平家、八)ともあり」とある。一説として存すべきである。○沛艾——カンの強い馬。即ち悍馬をいふ。氣荒くして、はね上る癖のある馬をいふ。文選籍田賦に、「龍驤騰驪而沛艾」とある。鎌倉室町時代には流行した語である。○この相おほせ侍りき——この人相を負はせました。落馬の相があると申しました。「おほせ」は課する。言ひつけるの義。○いつかは申し誤りたる——「かは」反語。いつだつて間違つたことを言つただらうか。一度も間違つたことを言ひはしない。

第四百四十六段

明雲座主、相者に逢ひ給ひて、「おのれ若し兵仗の難やある」と尋ね給ひければ、相人、「誠に其の相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害のおそれおはしますまじき御身にて、假にもかくおぼしよりて尋ね給ふ。是既に其のあやぶみのきざしなり」と申しけり。果して矢にあたりてうせ給ひにけり。

語釋 ○明雲座主——明雲は、文段抄、首書本、大成本、寛延本、大本には、メイウンとよみ、

口譯 明雲座主は、人相見にお逢ひになつて、「自分に若しか劍難の相はあるまいか」とお尋ねになると、人相見は、「確にその劍難の相がおありになりませぬ」と申上げる。する

と明雲は、「おれに劍難の相があるといふのは、人相にどういふ特徴がある爲めのか」とお尋ねなされると、「武人などとは異つて、人から傷つけられたり、殺されられなさる御心配などの無い御身分でありながら、假にもそのやうに劍難の相はありはしないかと思ひついでお尋ねなさる。これがもう既にその劍難の前兆であります」と申上げた。所が果して矢にあつてお亡くなりになつた。

増補鐵槌本、諺解本は、ミヤウウンとなつてゐる。今は前者のよみに従つて置いた。「座主」は、天台座主のことで、比叡山延暦寺の貫主である。叡山第五十五代第五十七代兩代の座主。村上源氏で、久我大相國雅實の孫。權大納言顯通の二男である。壽永二年十一月、源義仲の法住寺殿を攻めたとき矢に中りて入滅。年六十九。天台座主記(群書類從所載)に、「第五十五、法印明雲(圓融房)。治山十年。權大納言顯通卿二男。師主最雲親王。相實法印灌頂弟子。仁安二年二月十五日任座主(年五十三)中略。第五十七、僧正明雲(圓融房)治山四年。治承三年十一月十六日更任僧正。即還補座主(年六十五)云々。養和二年正月八日轉大僧正(年六十八)云々。壽永二年十一月十九日入滅(六十九)。祇候法住寺殿義仲寄戰之間頓滅云々」とある。この段のことは源平盛衰記三十四に、「後白河院御登山の時、少納言入道信西御供に候ひけり。前唐院の重寶衆徒、存知なかりけれども、信西才覺吐きなどしたりけり。そのついでに、明雲僧正、我に、いかなる相が有るかとお尋ねあり。信西、三千の貫主、一天の明匠におはす上は、仔細申すに及ばずと答ふ。重ねたる仰に、我に兵仗の相ありやと尋ね給ひければ、世俗の家を出で、慈悲の室に入りおはしぬ。災天何の恐かあるべきなれども、兵仗の相ありやの御詞怪しく侍り。これ即ち兵死の御相ならむと申したりけるが、果してかくなり給ひけるこそあはれなれ。」とあり、なほ同卷の初に、「天台の座主明雲大僧正は、馬に召さむとし給ひけるを、権六郎親忠、能引いて放す矢に、御腰の骨を射させて、眞逆に落ち給ひ、立ちも上り給はざりけるを、親忠が郎等落重つて御首を取る」とある。なほ二百二十五段参照。○相者——後の相人に同じ。人相を見る人。源平盛衰記によると信西である。惠空の参考抄には、安部泰親としてゐる。○おのれも兵仗の難やある——

私の人相に武器によつて傷害を受けたり、或は殺されるやうな難がありますかの意。兵仗は、太刀、弓矢などの武器をいふ。故に兵仗の難とは剣難の相の事をいふ。○誠に其の相おはします—なるほどいかにも剣難の相であらうしやいます。○いかなる相ぞ—我れ明雲に兵仗の難があるといふが、我れの人相にどのやうな特徴があるためかと尋ねるのである。○傷害のおそれおはしますまじき御身にて—武士とは全然異つた境遇である、天台座主といふ僧侶の身に於て、人から傷つけられるなどの心配はない筈である、そのやうな御身に於て。○假にもかくおぼしよりて—假にも剣難の相はないかと思ひつきなされて。假にもはかりそめにも。かくはそのやうに、即ち兵仗の難でもありはしないかと。おぼしよるは思ひよるの敬語で、思ひつくこと。○是既にあやぶみのきざしなり—是がもう既に危難の前兆であるとの意。○矢にあたりてうせ給ひにけり—明雲は壽永二年、木曾義仲が後白河上皇の法住寺の御所を攻め奉る時、偶々招請され何候参籠してゐたが、義仲四天王の一人楯親忠に射殺された。

第四百七段

灸治あまた所になりぬれば、神事にけがれありといふ事、近く人のいひ出せるなり。格式等にも見えすとぞ。

語釋 ○灸治あまた所になりぬれば—灸治は、灸をすえて病氣をなほすことであるが、ここは

口譯 灸を据えた個所が多くになると、身體のけがれ(穢)として神事にたづさはるのを

忌み嫌ふといふ事は、近頃、人の言ひ出した事である。格式等にも見えてゐないといふ事だ。

その灸をすえて、そのあとが残つてゐるのをいふ。つまり灸の跡が、身體中にあちらこちらと多くなると。○神事にけがれあり—體に焼け跡が多くなるので、汚れた體として、神事には遠慮すべきであるとして憚ること。神事は、まつり、祭祀。かみごとの意。よみかたについては、文段抄や首書本には、カンワザ、正徳本、大成本はジンジとよみ、寛延本は、シンジとよんでゐる。さて文段抄の中に、貞徳の説として、「灸治三所まではくるしからず。四所あればけがると吉田の神龍院申されし。此神龍院は二位殿の舍弟、左兵衛殿の叔父にて、神道よくまなび給ひし人也」とある。拾芥抄下末觸穢部に、「灸治穢者七日。居灸之人三日。但膿血出間。不可參神社。是師説也」とある。これと同じやうなことが、文保記に、「加灸之人七日。居灸之人三日穢也。灸膿血出者不參大神宮。」觸穢問答に、「問、灸治の穢如何。答。灸三ヶ所までは大社宮寺共不憚之。四ヶ所に及べば憚之」と、又、神風記に「灸治穢七日、居灸之人三日いむ。但、うみいづる間、神社へまゐらず」とあるなどは同じやうな説である。○近く人のいひ出せるなり—近頃に、近代になつてから、人々が語り出したことである。その近頃とか、近代とは作者兼好の時代をもととして近頃といつてゐるのである。○格式等にも見えすとぞ—灸治のあとは神事に忌むことだといふのは、格式など昔の法律規則を書いたものの中に、書かれてないといふことである。ここは兼好が自らそれらの記録を一一忠實に調べたといふのではない。當時は法律命令を概稱して「律令格式」といふ。その一々につき解説をすると、律は刑罰の制。令は一般に公布する法令。格は令、式、律の臨時の改定増補、又は執行の命令、式は官吏の職務規定をいふ。嵯峨帝の時の弘仁格、弘仁式、清和帝の時の貞観格、貞観式。醍醐帝の時の延喜格、延喜式は三代格

式として有名なものである。

第四百四十八段

口譯 四十歳以上になつた人は、身體に灸をすゑると同時に、三里にも灸を据ゑないと、

のぼせる事がある。だから必ず三里に灸をすゑておかねばならぬ。

四十以後の人、身に灸をくはへて三里を焼かざれば、上氣じやうきの事あり。必ず灸すべし。

語釋 ○身に灸をくはへて三里を焼かざれば——「灸をくはへて」は、灸をすゑることである。身體の背や腹などの如きところに灸を据ゑて同時に三里を焼かなければといふのである。「三里を焼く」とは、膝の下外側の少し凹所になつてゐる所をいふ。灸穴の一つ。焼くは灸を据ゑること。前の「くはへて」と同意。塚本氏は、「身に灸をくはへて」を、「三里を焼かざれば」の副詞のやうにとつてあるが、これは佐野氏のやうに本書の如く解くのが妥當と思ふ。明堂灸經に「男子三十已上不可不灸三里。三里所以下氣也」とある。○上氣——のぼせること。○必ず灸すべし——この意味は、「必ず三里に灸すべし」の意である。

第四百四十九段

口譯 鹿茸を鼻にあて

鹿茸ろくじやうを鼻にあてて嗅ぐべからず。ちひさき蟲ありて、鼻より入りて腦をは

むといへり。

て嗅いでならぬ。その中に小さな蟲が居て、嗅ぐとその蟲が鼻から入つて、腦髓を食ふといふ事である。

語釋 ○鹿茸——鹿の袋角ふくろのこのこと。和名抄に、「鹿茸。和名鹿乃和加豆乃。鹿角初生也」とある。フクロゾノは後の名と思はれる。重修本草綱目啓蒙に曰く、「凡夏至の時角墜つ。直に其跡より新角を生ず。初は茄子の如く圓かにして光り、紫褐色にして蠶形の如し。採りて乾す時は、色黒くなる。これをフクロゾノと云ふ。和名抄にシカノワカゾノと訓ず。鹿茸なり。鹿茸は暫時に生長するものなり。故に未だ長ぜざる一寸半より二寸許にして、柔なるを薬用とす。四五寸に至れば、硬くなりて良ならず。故に未だ角形にならずして圓なるを茄子茸と云ふを用ゆ」とある。○腦をはむ——頭の中に入つて行つて腦髓を食ふといふのである。本草綱目五十一、鹿の條に、「洗曰。鹿茸不可_レ以_レ鼻嗅_レ之。中有_二小白蟲_一。視_レ之不見。入_二人鼻_一。必爲_二蟲類_一。藥不_レ及也」と。是れは今日から見ると滑稽なことであるが、當時はそのやうに信ぜられてゐたのである。「といへり」は、醫書には書いてあるといふやうな意味である。

第四百五十段

口譯 藝能を身に習得しようとする人が、まだよく熟達しないうち

能のうをつかむとする人、よくせざらむ程は、なまじひに人に知られじ、うちよく習ひ得てさし出でたらむこそ、いと心にくからめと、常にいふめ

は、なまじつかに世人に知られまい。こつそりと習熟してから、人仲へずつと出たのこそ、大變奥ゆかしいだらうと、常にいふやうだが、そんな事をいふ人は、一藝も習得し得るものではない。まだ全然未熟なうちから、その道の名人の仲間に入つて、そしり嘲笑されても恥ぢとするところなく、何と言はれても平氣でその場を過ごし、さうして専心その道の素養をなす人は、そのわざについて、う

れど、かくいふ人、一藝も習ひ得る事なし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、そしり笑はるるにも恥ぢず、つれなくすぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして、年をおくれば、堪能のたしなまざるよりは、終に上手の位にいたり、徳たけ人にゆるされて、ならびなき名をうる事なり。天下のものの上手といへども、はじめは不堪の聞えもあり、無下の瑕瑾もありき。されども其の人、道のおきてただしく、これを重くして放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となる事、諸道かはるべからず。

まれつきその道の奥儀を極める天分はなくても、その道に停滞せず、ずん／＼と修養向上をなし、又道をおろそかにしないで、幾年かを過ごす内には、終にその道の上手な人で素養を積まない人よりは、却つて、天下の名人の地位に達し、藝道も進歩し、人々から尊ばれて、天下無雙の有名な人となるのである。天下の何事の名人といはれる人でも、初めは下手だといふ評判もあり、ひどい缺點も

の藝を人の居る中で演ずるのが意。さしは接頭語で、ずつと勢よく人中へ出る心持を含めてゐる。○いと心にくからめ——奥ゆかしいことであらう。どんなに人から感心されることだらう。○常にいふれど——常に人はいふやうであるが。○かくいふ人一藝も習ひ得る事なし——そのやうなことをいふ人は、たつた一藝であつたとて、十分に習得し得ることはない。○堅固かたほなるより——全然未熟なる頃からの意。堅固は、全くとか、全然といふことである。文段抄に、「壽云、一向初心なる時よりと云心也。季吟云。堅固は何にてもかたく其事の外、他なき義より、一向におなじ」とある説がよい。堅固をこの一向とか全然の意に使つた用例では、宇治拾遺物語十一に、「堅固の田舎人にて、仔細を知らず、無禮を現し候ひつらむ」。源平盛衰記十八に、「三歳の時父盛光も死ににけり。堅固の孤子なりけれども」同書三十三に、「木曾冠者義仲は云々。堅固の田舎人にて云々」義經記五に、「御邊が膝のふるひやうを見るに、堅固叶ふまじ」の如し。沼波氏は「藝が堅きを云。流通自在ならぬなり」と解してゐられる。古注では句解本に、「堅固はやはらかならぬ義にて、其道に流通自在ならぬ心に通ふべし」とやはり解いてゐるが、これはよろしくない。「かたほ」は、まほに對する語にして、未熟、不十分で整はないこと。○上手——上手な人のこと。但し、現今の言葉でいふならば、寧ろ名人といふのにあたる。後の「上手の位」「天下のものの上手」なども、やはり名人といふやうな意味である。○つれなくすぎてたしなむ人——何と言はれようが平氣で通つて。「つれなく」は、平氣で、無心で、しぶとくなどの意。強顔、強面などの字を當てる。「すぎて」については、「すきて」に清んでよむ説もある。文段抄は、「壽云、強面。強顔。おもてつよく藝能にすきてと云義なり」とあり。増補鐵植もこれによ

第百五十段

あつたのである。けれどもその人は道の規則を正しく守り、之を重んじて勝手氣儘な事をしなかつたので、遂に斯道の大家となり、萬人の師表となつたのである。斯くの如きことは、何れの學問藝道に於ても皆同じことである。

つてゐる。首書本には、「面つよく藝能をすき好みて也」とある。大成本は二説をあげて、「一説に過ぎてと見たる抄もあれど、きの字清みてよろし、すき好む心なり（參）。過ぎて也。爰にてはすぐれての義に通ふべし。きの字清みてよめば下の暗むと云詞に心重りて誤なるべし（句）」とある。句解本によると、つれないことが度を越してゐるとの義になるが、これでも意味は通ぶる。されどすきてと清音によむ説は面白くない。光廣本には「過て暗む人」とあるのによつて前説によるがよい。○たしなむ——稽古、練習。素養を積む。この語は好むとは少し意味が異つてゐて、好むと同時にその道に達しようとする努力する意が多分に含まれてゐる。○天性その骨なければども——生れつきその器用がなくても。その藝に對する天分に恵まれてゐなくとも。「天性」は、生れつき。「骨」は或道の微妙な骨髄。轉じて其の骨を會得すべき天分。天才をいふ。ここは轉義の意。「なければども」は、「なくとも」の假定を強めて既定形式にしたもの。○道になづまず——その修めようとする藝道に停滯して進歩しないこと。○みだりにせず——道をおろそかにしない。慎重な態度にて、道を勉め勵むことをいふ。○年をおくれれば——年をおくるうちに。年をすごすと。年をおくるからと譯してはならぬ。これも假定條件を強めて既定法であらしたしたもの。○堪能のたしなまざるよりは——堪能は、器用なことで、今日の上手にあたる。「堪能の」は、「堪能の人が」の意。「たしなまざるよりは」は、道の素養をつとめない人よりは却つて進歩の意。○終に上手の位にいたり——しまひには名人の地位にも到達し。○徳たけ——徳は藝道を修養して得た才能、能力及び藝人として品位などを概括した意。「たけ」は高くなること。向上すること。つまりその人の藝能が圓熟の域に達して、自然に世人を悦服せしめるやうになるをいふ。

ふ。○人に許され——世人に名人として認められ、尊敬せられるをいふ。○ならびなき名をうる——天下無雙の名聲をとるのである。○天下のものの上手といへども——世の中のどのやうな藝道の名人といつても。「もの」は、特にそれと指定せずに、どのやうな道にもといふやうな意。○不堪の聞え——下手だといふ評判。「聞え」は、噂とか評判といふこと。不堪は下手なこと。○無下の瑕瑾——甚だしいきず。無下（ムゲ）は甚だしいとか、極端な意。瑕瑾は、きず、缺點のこと。○道のおきてたたく——その藝道の定め即ち規則を正しく守ること。○これを重くして——道の規定を重んじて。「これを」は、「道のおきて」をさす。「重くして」は重んじて。○放埒せざれば——勝手氣儘なことをしななければ。「埒」は、馬場の柵の義。その埒をとりはづして馬を走らせるやうに、規則に従はず我儘勝手にすることをいふ。○世の博士にて——世の中にすぐれた斯道の大家となつて。博士は、もの知り、大家といふ事。○諸道かはるべからず——何の道でもかはる筈はない。學問技藝どのやうな道でも皆同じ事である。

第二百五十一段

口譯 或人が次のやうな事を言つた。年五十歳になるまで修業して、名人にならないや

或人のいはく、年五十になるまで上手にいたらざらむ藝をば捨つべきなり。勵み習ふべき行末もなし。老人の事をば人もえ笑はず、衆に交りたるも、あいなくみぐるし。おほかた萬のしわざは止めて、暇あるこそ、めやすく